



牡丹崩水す



竹田敏彦著



始



360

特207
535

牡丹崩れず

竹田傲彦著

小説選集



博文館



牡丹崩れず — 目次 —

凱	旋	列	車	一	
春	の	影	一一		
良	人	無	き	母	三三
紅	白	の	花	四八	
隣	邦	の	志	士	八二
娘	は	知	ら	ず	一一三
血	を	引	く	敵	一四九
二	人	の	姪	一六五	
春	の	呪	ふ	嵐	一八七
兄	の	家	二〇三		
許	さ	れ	ぬ	戀	二一四
歸	ら	ぬ	人	二三九	
良	二五〇	

軍は、大陸灼のした頬に微笑を含んで答禮すると、静かに中央窓際の椅子に着いた。

『わしは日本酒ぢやよ』

將軍は、石岡副官に命じながらちらと車窓に眼をやつた。外は寒々とした夕明りが、ほのかに野面を包み、青々と盛上つた麥畑にも、ふくらんだ木々の梢にも、生々した早春の氣が溢れてゐた。

『梅はもう散つたらうな』

將軍は、盃を取上げたが、

『ほう……』

かすかに驚嘆の聲を發した。列車は、今轟々と富士川の鐵橋にかゝつて、水面が夕明りに光つてゐたが、將軍の瞳は、夕燒雲の晒を流した大空に吸つけられてゐた。そこには、雄大な靈峰富士の姿が雪の肌を匂はせて、くつきり夕空に聳えてゐた。

瞬間、將軍の胸に、あの日のことが、昨日のやうに鮮かに浮んできた。

あの日……。

蘆溝橋事件が突發して、上海に飛火した直後まで——刻々擴がる東亞の戰雲を睨んで、豫備役の大木大將は、岳麓河口湖畔の別荘で、隱者のやうな生活を續けてゐた。

烈しい雷鳴の後の、爽かな夏の夕だつた。將軍はヴェランダの籐椅子に倚つて、黙々と、暮れゆく富嶽に向つてゐたが、そこへ民子夫人が、一通の電報を持つてきた。

『電報?……』

將軍は、はつと冥想から覺めて、電文に眼を落したが、

『民子……』

と急に容を改めた。

『大木家は子供がないので、わし一代で斷絶させる心算だつたが、今度東亞といふ子供が授かつたぞ。喜んでくれ』

北京公使館附の武官時代から、東亞經綸の大抱負を抱いて、支那革命運動を援け、來朝の亡命志士とともに、わが朝野を狂奔した將軍が、豫備役から返り咲いて、〇〇方面最高指揮官に親補されたことは、將軍にとつて、何んなに思ひ設けぬ榮光であり、またどんなに望ましい死場所だつたらう。

『老骨を大陸に埋めるつもりなのだが、再びかうして富嶽を仰がうとは……』

『閣下……』

副官が、名刺の束を握つて立つてゐた。

『静岡から乗込んだ新聞記者諸君が、御感想を伺ひたいと言ひますが』

將軍は、名刺を取つて、一枚一枚入念に眺めたが、

『記者諸君も將兵と共に、第一線で勇敢に働いてくれたので、大いに感謝してゐるが、かう傳へてく

れ……御苦勞ぢやが、軍狀奏上前には何も喋る譯にはいかんとな」

「記者諸君は、何か一言でもと申してゐますが」

「それではね、大勢の部下を殺しながら、老骨一人生き残つて、相済まぬ、これだけ傳へてくれ」

將軍は嚴肅な面持で、ポケットの朝日を出して火をつけると、うまさうに煙を吸ひ込んだ。

すると、眺めてゐた一人のボーイが、にやと微笑して、くるりと後向になつたと思ふと、手を伸べて「禁煙」その札を外して、そつと隠してしまつた。食堂の客はこのボーイの機轉を禮讚するやうに明るい微笑を送つた。

「閣下、あと一時間で熱海であります」

重松參謀長も、にんまり將軍の顔を見た。

「あゝ、今夜は熱海泊りだつてね、うむ、熱海……」

將軍は、何故か、感慨深さうに頷くのだつた。

「いや、わしも、三十年振りぢやが……」

將軍の眼にも、何か懐しげな微笑が浮んだ。

「三十年振り、それはまた古いことですね」

參謀は驚いて眼をみはつたが、

「あれは例の支那の辛亥第一革命の直前ぢやつたが、東亞の歴史を顧みて、今昔の感に堪へないよ」

將軍は、往時を追懐するやうに眼を閉ぢたが、

「その時ぢや、面白い話がある。あの革命戦に使ふ爆彈の製造を、現役工兵大尉が受持つてゐてね。

その試験を箱根山中でやることになり、同志が揃つて熱海へやつてきたんだ。まだその頃は、熱海も

田舎ぢやつた。その晩一同が、大尉の實物説明を聞いてゐると、押入れに隠してあつた爆彈が、轟然

爆發して一間四方の壁を打ち抜いてしまつたんぢや。幸ひ負傷者もなかつたし、そこは多賀海岸の一

軒屋だつたので、世間にも知れずに済んだが、とんだことで、爆彈の威力が證明されたんだよ。はつ

ははは……」

將軍は、忙しさに、吸ひさしから、ちかに朝日に火を移したが、

「その翌朝、東京から大事あり、直ぐ歸れとの電報だ。さあ大事露見かと、ひやくしながら歸つて

見ると、同志の萱野長知宛に「愈々決行する、爆彈兵器を持つて至急出發してくれ」といふ黄興から

の電報だ。同志の面々勇躍して上海に飛んだのぢや」

興亞の聖戦に三軍を指揮して、今凱旋の將軍は、三十年前支那革命の運動を回顧する懷舊の情に、

若々しく頬を輝かせたが、何かまた思出した風で、

「いや、爆彈騒ぎと言へば、第二革命の時にも、これに似たことがあつた。これに蔣介石のエピソ

ドもあるんだよ。たしか大正四、五年頃ぢやつたが、第二革命に失敗した孫文、黄興、仲樞銘、戴天

仇、張群、張繼、唐繼堯、岑春煊の諸名士、蔣介石、殷汝耕等の青年志士など三十餘名が、日本に亡

命中で、大森新井宿に浩然廬といふ學社を設けて、當時わが參謀總長の上原勇作、外務省の小池政務局長、台銀重役等が援助して青年志士の教育を施したんだがね、爆薬の教授をしてゐた野口工兵中尉が、學生の希望で、祕かに千葉の旅館の二階で、爆薬調合の實地教授をやつてゐると、これまた轟然爆發して、二階の屋根を打抜き、東京では號外が飛び騒ぎが持上つた。その席上蔣介石もゐたんだが、爆發の寸前に、眼に羽蟲が飛び込んで、席を立つたんだ。ところが蔣介石の坐つてゐた席は、てうど爆薬の飛んだ方向だったので、あれの眼に羽蟲が飛び込まなかつたら、蔣介石は今頃生きてゐなかつた譯だ。人間の運命なんて、實に不思議なものぢやよ」

「面白いお話ですね。蔣の恩人が羽蟲、はつはは……」

「さうぢやよ」

「しかし、重慶には幸運の羽蟲はゐませんね。蔣も今度は墓穴を掘つてますね」

「しかし、あれはいゝ男だつたが、好漢、蜘蛛の網に引つかゝつて、悶いてゐると思へば、一掬の涙なきを得ないよ」

將軍は、腫を潤ませたが、

「わしが、最後に蔣に逢つたのは、昭和二年、あれが武漢派の壓迫で箱根へ来て滞在してゐた時、例の羽蟲の話を持出すと、蔣は、あの時、千葉の旅館で爆死したつもりで、今後は自分の命を支那の統一と日支提携に捧げる決心であると、聲涙ともに下つて語つたものだが……」

將軍は、咳くやうに言つて、じつと窓外へ眼をやつた。

間もなく――。

凱旋列車は、歡呼の怒濤を衝いて、靜かに熱海驛ホームに滑り込んだ。

萬歳の嵐

旗の波

提灯のゆらめき

展望車から降り立つて、群集に舉手の禮を返す、戦闘帽もいかめしい將軍の顔は、大陸の戦野に三軍を叱咤した日の嚴肅そのものだつた。

二

晴れの帝都凱旋の前夜を、大木將軍は、熱海で心靜かに送らうとするのだつた。

旅館の襦袍に寛ろいで、いで湯に二年有餘の戦塵を洗ひ流した將軍は、さすが軽くとした風で、廊下に歩を運んだが、

「おや……」

立止まつて庭を見下した。軒先近く雪のやうな花をつけた梅の老樹が、闇に浮上つてゐた。

「暗香浮動……」

將軍は吟ずるやうにつぶやきながら、二階十二疊の座敷に通つて座蒲團に腰を降すと、床の間の大観の一幅と、萬兩の投入に眼をやつた。その時、廊下の外から、

「閣下……」

と、まだ軍服の儘の副官が顔を出して、

「お客様でございますが……」

「今夜は誰にも逢はぬと言つておいたが……」

「みんなお断りしてをりますが今見えられたのは御婦人の方で」

「婦人？……」

將軍は、怪訝に眉を寄せた。

「江島邦子さんと申されました」

「江島邦子！……」

瞬間、將軍の眼がはつと刮られた。

「取次ぐだけは取次いでくれと申されますので……」

「さうか……」

將軍は、ちらと疊に眼を落したが、

「それではね……遠方わざ／＼御苦勞ぢやつたが、今夜は公用以外のお客には、お眼にかゝれないで

残念ぢやが、大木から宜しくと、それだけ傳へてくれ」

「はッ……」

副官は階段を降りて、玄關へ出ていつたが、式臺の前には、着古した紋付ではあるが、氣品に充ちた美しい婦人が、慎ましく控へてゐた。相當の年輩ではあらうが、匂ふやうな氣高い美貌は、年よりも、ずつと若く見せてゐるに違ひなかつた。副官を見ると待兼ねた様子で、

「御無理を申しまして、濟みませんでした」

「閣下に申上げましたが、遠方わざわざ御苦勞ですが、今夜は公用以外の方には、お目にかゝれないさうであります。大木から宜しく、とのお言葉でありました」

「さうでございましたか」

婦人はほつとしたやうに、切長な眼に美しい微笑を漂はせたが、

「御多用中を有難うございました。どうぞ閣下に、お宜し……」

丁寧にあいさつして、靜かに辭し去つた。

副官が、引返してくると、將軍はヴェランダの椅子に凭れて、ほのかな月光に閃めきそめた相模灣を眺め入つてゐたが、

「副官、何うぢや、姥櫻ぢやが、美人だつたぢやらう。はつはゝは」

と將軍には稀らしい冗談を飛ばした。副官も氣輕に、

「あれでお幾つくらゐにられますか？」

「さうぢや、四十一、二とは見えんぢやらうが……」

「私は三十五、六かと思ひました」

將軍をわざ／＼熱海まで出迎へた美しい女性は何者だらう？ ……副官の顔には、明かに好奇の色が動いたが、將軍はそれきり黙り込んでしまつた。が、暫くして時計を眺め、

「電報ひとつ頼まう」

副官に呼びかけた。

「一〇ヒゴゴ、ゴテンヤマノタクヘキタレ……澁谷區大山××番地江島邦子ぢやよ」

「はッ……」

副官は、はつと顔を上げたが、手帖を疊んですぐ出て行つた。將軍は再び、夜の海に眼を放つた。月光は次第に冴えて、海は銀色の夢を湛へ、うつすり煙つた初島から宇佐見岬の邊りへ、鏝めたやうに漁火が流れた。

「あれも一時、これも一時、往時渺茫夢の如しぢや……しかし偉い女だが、寂しからう……」

謎のやうに獨語して、海を眺め入つた將軍の瞳はいつか熱く潤んでゐた。

春の影

最終日の試験は、江島暉子の得意の英語だつた。

答案を書き終つて、ほつと腕時計を覗き込むと、振鈴までには、まだ十五分の餘裕を残してゐた。

盗むやうに、そつと顔を上げて邊りを眺め廻すと、まだ、みんな卓におつかぶさるやうにして、ペンを動かしたり、頬に手をつけて考へこんだり、懸命な姿勢だつた。（これで、女学校の試験もおしまひなんだわ……）

長い間、いやな思ひをしてきた試験も、いよ／＼これが最後かと思ふと、暉子はさすがに、感傷な氣持になつて、名残り惜しさうに、二度、三度と答案に眼を通したが、解釋も、われながら見事な出来で、一つの誤謬も發見されなかつた。

（さ、もういゝわ）

暉子は女學校生活の最終日の試験に、級友五十何人のトップを切ることに誇らしさに勢よく立上つた。瞬間、さつと風のやうな氣配がして、級友達のびつくりしたやうな、妬ましがな瞳が、一齊に暉子に向けられたが、暉子の視線は無意識に、窓際に走つてゐた。すると、そこに親友の池田章代の

眼が、

『待つてゐたのよ、いゝこと……』

と、言ふやうに動いた。

眸子もにつこり眼で答へて、廊下へ出たが、何かじつとしてゐられない氣持で、赤煉瓦の建物を飛び出した。

卒業式まで、學校はもうお休みなのだ。いや、五年といふ長かつた女學生々活も、これでおしまひなのだ。眸子の胸は、小鳥のやうに弾むのだつた。

『何といふいゝお天氣なんだらう』

眸子はうつとり大空を仰いだが、やはらかな春の光を浴びた彼女の姿態は、もうすつかり、成熟した娘の美しさだつた。黒水晶のやうに澄んだ圓らかな瞳、花びらのやうに濡れた唇——聰明な、近代的な魅惑を湛へたうちにも、形のいゝ鼻が、傳統的な、冒し難い氣品を匂はせて、すんなりと均整のとれた全身の線が、着古したセーラー服にさへ、ひどくスマートなものに見えてゐた。

『さうだ、お母様に報告しなくちや……』

眸子の眼には、愛情に潤んだ母の瞳が泛んで、思はず小走りに校門を出たが、牛込見附へ向つて坂を下り、飯田橋驛まで来ると、公衆電話のボックスへ飛び込んだ。

(この電話で、どれだけお母様といろんなお話をしたことだらう)

眸子は、五年間の母の心勞を思ひながら、うつとり受話機を握つた。

『あゝ、もしく山手病院でございますね』

『はい、こちらは山手病院でございますが……』

聞き馴れた看護婦の聲だつた。

『私、眸子ですの』

『あら、婦長さんでございますか。唯今手術室でございますけれど……』

『ちや、なか／＼でせうね』

『生憎、大手術なものですから……』

『まあ……』

眸子の母の邦子は、山手病院の看護婦長を勤めてゐるのだつた。患者の生命が醫師と看護婦の手に握られてゐるやうな、大手術の瞬間は、全く重大な使命に、全靈を打込んで、無念無想の境地だ——と、何時か母が語つた言葉を思出して、眸子は嚴肅な白衣の母親の姿を神々しく描き出しながら、ボックスを出た時、

『あら、ひどいわ、あんたつたら……』

池田章代が、笑ひながら駆け寄つてきた。

『こつそり電話なんかかけて……さあ、白状なさいよ』

悪戯らしく、暁子の肩を叩いた。

暁子と章代は、わざと飯田橋驛から乗らずに、土手公園沿ひに、市ヶ谷見附の方面へ歩き出した。

章代は心配さうに、

『私應用問題のC…H…U…M…つて単語、どうしても思ひ出せなかつたのよ』

『あれ、チャム、ぢやないの、ほつほほ』

『えッ、しまつた！』

二人は顔を見合せて、くすりと笑つた。チャム(仲好し)といふ英語の単語は、暁子達女學生間では、無邪氣な彼女達の同性の愛情を現はす微笑ましき隠語だつた。

『だつて、あんな単語を出す先生も先生よ』

『あれは先生が、私達への、最後の御愛嬌だわよ。ほつほほ』

二人は笑つたが、

『それで、あんた卒業してから何うなさるの？ 福原さんみたいに、ちやんと許婚者きまつてゐるんぢやない？』

暁子は、悪戯らしく、章代を覗き込んだが、章代は拗ねたやうに頭を振つた。

『制服の處女から、直ぐに家庭の主婦なんて、眞ツ平。私は娘時代を享樂したいのよ。娘時代が人生で一等華やかで幸福なんぢやないかしら……』

『さうかしら……』

暁子はさうした憧れに輝く友の瞳を眺めながら首をかしげた。

『だつて私、卒業しても二年ぐらゐは、娘でゐて自由に樂しみたいの。あんた、何う？』

『私は、制服の處女から、オフィスの處女へよ。だつて、私は働かなくぢやなりませんもの』

暁子は、言ひながら、また白衣の母の姿を思ひ泛べてゐた。そして、同じ制服の姿で、睦み合つた親友でも、學園を巣立つた瞬間から、銘々境遇によつて、もうはつきり別々な生活に別れてゆく寂しさを、章代と自分の境遇に比べて、佗しく心に描くのだつた。

暁子は、母の邦子の外に、父も兄弟もなかつた。母の邦子は立憲民友會の元老として、政黨華やかなりし頃の我が政界に謳はれた大立物江島直隆の次女として生れたのだつた。直隆は、政黨全盛期の大正中期に此世を去り、長男直彦が相續して、二、三會社の重役などを勤め、駒込の邸宅に、相變らぬ豪華な生活を送り、長女俊子も井菱財閥の少壯幹部室井政之助に嫁して、一門華やかに榮えてゐるが、何うした譯か、邦子一人が、さうした兄弟の交際から離れて、一看護婦として、娘暁子一人を相手に親一人子一人、寂しく、つましく、世間の片隅に日を暮してゐた。

それについて、暁子の聞いたところでは、邦子の父江島直隆は生前非常に青年を愛して、江島家には、多くの青年が出入してゐたが、邦子は、その一人と許婚の間柄となり、祝言の式まで挙げたのであるが、入籍の間際に青年は支那に旅して、旅中に、ぼつくりと急逝してしまつた。ところが、既に

暁子が宿つてゐた。それを江島家では、秘密に葬つて、暁子を他所に里子に遣り、邦子は他の然るべき先へ、嫁けようとしたのであるが、邦子は、子供の愛情に惹かれて、暁子を連れたまゝ、江島家を飛出した。そんなことが動機となつて、實家との往來も絶えてゐるのだいふのであるが、何かそこには、その青年との間に絡まる、もつと深い事情に違ひないことは、もう世間の表裏を知りそめた暁子には、想像のつかないこともなかつたが、しかし自ら婦長の職を勤めながら、自分を女學校へまで通はせて、荒い風にも當てずに育ててくれた母の深い愛情を思ふと、暁子の心はたゞ感謝の外、この優しい母の過去に對して、批評や、詮索がましいことは、思ひもよらないことだつた。

『だつて、これまでお母さんに働いて頂いたでせう。今度は私の働く番なのよ』

『でも暁子は、言ひながら、急に潤んできた瞳を、章代の視線から外らした。』

一一一

邦子が、澁谷大山の自宅へ歸つてきたのは、夕方七時頃だつた。暁子は、もう自分で夕飯の仕度をして、餉台まで出して待つてゐた。

『それぢや、もうせい／＼したわね』

邦子は、座敷で不斷着に着替へながら、最後の試験を終つた娘を、励むやうに言ひながら、茶の間へ出てきて、餉台の前に坐つたが暁子の制服姿を眺めると、

『もうこれからは、あんたも和服にして、着こなしのお稽古もしなくちや、卒業すれば次は結婚ですからね、何處で人様に見られてもいゝやうに、少しは、娘らしく、お化粧もしなくちやね』

『あら、いやなお母様……』

暁子は、赧くなりながら、母親を睨んだが、

『私、お母様、働きに出たいの、これまでお母様にばかり働いて頂いたでせう。これから私が働いて、お母様に少しでも、樂をしていたゞかうと思ひますの』

『まあ、そんな餘計な心配をしてゐるの』

邦子は、笑つて娘の顔を覗き込んだが、その眼は、いぢらしさに潤んでゐた。

『職業婦人は、お母様一人で澤山……お母さんの楽しみは、あんたに月給を助けてもらふより、早くいゝお婚さんを探しあてゝ、立派な奥様になつて貰ひたいこと。これまでだつて、お母さんはどんな苦勞はしても、あんたをお嬢様らしく、身綺麗にして上げることが、何よりの愉しみだつたんですの、判つて？』

『でも……』

暁子は、ほろりと眼を伏せたが、

『お母様、私、いつまでも、お母様と二人だけで、愉しく暮して行きたいと思ひますの』

『お母様だつて、そんな氣持のしないこともないけど……それではお母さん安心出来ないの。お母様

は一人になつても、あんたさへ幸福になつてくれたら、それを眺めてゐるだけで澤山なの』

『あらお母様にそんな風に言はれると、私なほ寂しくなりますわ』

暁子は、涙ぐんで、甘えるやうに母親を見た。邦子も、急に熱くなる瞳を外らしたが、

『さうく、いゝものを忘れてゐた……』

急に思出して箸を置くと、奥へ立つて、簞笥の中から、風呂敷包を抱いて、にこくと引返してき

た。

『今日、病院へ出入りの呉服屋さんから、あんたのも一反とつてきたのよ』

邦子は白地の反物を取出すと、電燈の光にかざしながら、

『ほらね、麻の葉模様の漆入りよ。染め上げたらきつと、立派なものになると思ふの。地色は何んな

のが好き？』

『あらまあ、素的……』

暁子も、うつとりと眺め入つたが、直ぐ心配らしく、

『でもお母様、何だか勿體ないと思ひますわ。大丈夫？』

『ほつほほ、そんな心配は、あんたがしないだつていゝの』

邦子は陽気な笑聲を立てたが、

『これも、お嫁入りのお仕度よ。ね、どんな話がかゝつてきても、恥をかゝない用意だけは、常々心

かけてしてあるから大丈夫。あんなはそんな心配しないで、お嬢様らしく、ちゃんとしてゐればいゝの。判つて？』

『えゝ、でも……』

餘りにも有難い母の愛情に、暁子が聲を濡めらせた時だ。

『御免下さい……』

格子戸の開く音が聞えた。

暁子は、母を見て、玄關へ立つていつたが、

『あら……』

玄關の土間には二十七八歳の、美しい青年が、微笑をふくんで立つてゐた。

『やあ、暫くでした』

『まあ、お珍らしいわ……』

暁子は、手を突いて、眩しく青年を仰いだが、その時、

『まあ、牧山さんですの、ようこそ、いらつしやいます』

邦子も、いそぐ顔を出した。

『大變、御無沙汰しました』

青年は馴々しく口をきいて、靴の紐を解き初めた。

「試験でお忙しいのでせうと、お噂してゐましたの」
 「やつと卒業試験も済みましたので、ちよつと春山へ、英氣を養ひに出かけてゐたものですから」
 青年は、牧山英二といつて、山岳スキーでは、ちよつと聞えた名前だつた。九州の炭礦王牧山蓮藏氏の愛甥で、五高から東京帝大経済學部に入學した四年前の春、下宿屋だとか、アパートなどの混雑が嫌ひな彼は、或る知人の紹介で、邦子の家の二階に落着き、一年半ばかり寄宿してゐたのだつた。スポーツマンらしい、快活な性質で、眸子に英語を復習つてやつたり、時には喧嘩もしながら、まるで兄妹のやうに親しく、家族的に暮してゐたので、その後も、二月に一度ぐらゐは、必ず顔を出して、他愛ない雑談のうちに、母子の寂寥を慰めて歸るのだつた。

「さう、さういへば眸子さんも卒業でしたね」
 英二は、二階へ通ると、いつものやうに、懐しげに室内を見廻した。そこは、以前英二が起居してゐた室で、今は眸子の書齋になつて居り、本棚の上の人形にも、机の前の座蒲團にも、衣桁にかけた着物の模様にも、若い娘の部屋らしい艶めかしい色彩が漂つて、暖かい春の庭の灯影に泌み出すやうに浮いてゐた。

「やつと今日、試験も済んで、ほつとしたところでございますの」

「眸子さんもさうでせうが、小母さんもほつとなすつたでせう」

「でも、これからが大變でございますよ。學校は出ましても、嫁けるまでが、また一と苦勞でございます

いますよ。ほつほ」

邦子が、にんまり笑聲を響かせた時、

「あら、またお母様つたら……」

眸子か、紅茶の盆を捧げて入つてきた。邦子は笑ひながら、娘の顔を眺めたが、

「あんた、牧山さんにお禮を申上げなければ……」

ちらと、英二の顔に眼を移して、

「眸子は今日の英語の試験も、誰よりも先に樂々と答案が出せたさうで、ほんとにあなたの御蔭だと

言つて、喜んでゐますのよ」

「いや、眸子さんの英語は、天才的なんです。發音なんか、どうして、倫敦ツ兒そつくりですよ。

はつはは」

「あら、可嫌、偶にいらしつちや、冷かすんですもの」

眸子は、赧くなりながら睨む眞似をした。

「いや、冷かしはしませんよ、僕の先生の奥さんが、金髪の倫敦ツ子で、あなたの發音が、その奥さんそつくりなんです。唇をこんな風に……」

英二は可笑しさうに、唇を動かして見せたが、

「あら、ひどいわ」

『はつはは』

『あなた方の喧嘩も、しばらくぶりね。ほつほほ……』

邦子も、若い一人の顔を見比べたが、もしこの娘に歴とした父といふものがあつたら、これは、どんな似合ひの縁だらう——。美しい若夫婦の肩を並べて行く姿を、邦子はうつとりと空想のうちに描いてみた。

が、暫くして、邦子は、

『牧山さんは卒業なさると、お郷里の方へお歸りになるんでせうね』

何といふこともなく、つい訊かずにゐられなくなつて言つたが。英二は笑つて、

『さうでもありませんよ。何うせ僕なんか、両親のない氣樂とんぼですからね』

『ほつほほほ。だつて、伯父様の方には、御長男お一人きりで、あちらでは、あなたを御次男同様に頼りにしていらつしやるんでせう』

英二の伯父牧山蓮藏には、夫婦の仲に長男忠雄があるきりで、蓮藏は、亡弟英作の遺み英二を引取り、忠雄に次いで、我子のやうに愛してゐることは事實で、やがては炭礦王として、有餘る巨額の資産を割いて英二にも譲り、立派に分家をさせる意向であることは、英二自身も幾度か、蓮藏から約束されてゐるのであつた。しかし、英二は、

『伯父には、そんな考へがあるかしりませんが、僕はもうこゝまでして貰へば、後はサラリーマンに

でもなつて、自由にやらせてもらひたいんですよ。伯父も、あゝいふ判つた人物ですから、必ず膝元に置いておかうなどといふ、狭い考へはなささうです。ですから就職口も、東京と新京と、兩方からかゝつてゐて、何方にしようか迷つてゐるんですよ』

英二は、そこで、何故かちよつと口籠つたが、

『それで、ねえ小母さん……』

邦子の方を見て、

『僕がもし、新京へでも決まりますと、當分、小母さんや暁子さんにも、お眼にかゝれなくなると思ひましてね、實は、まあ、お別れといつちや變ですが、長いお世話になつた思出に、小母さんや暁子さんと江の島あたりへでも、一日ゆつくりとピクニックのお伴がしたいと思ひまして、實はお誘ひに上つたんですよ』

『まあ、それは——』

邦子は、英二の厚意につこりして答へた。英二は、

『それで、今日は金曜日ですね。土曜日には、同じやうに卒業した同級生の集りがあるので日曜日にしたいと思ふんですが』

『あら、素敵だわ』

暁子は少女のやうに手を拍つて歡んだが、

『日曜日は、十日ですわね』

邦子はふと、獨言するやうに言つた。十日——その日は邦子にとつて、暁子にも明せない重大な用事が待つてゐた。『一〇ヒゴゴ、ゴテンヤマノ、ジタクニコラレヨ』——大木將軍の電報が、その後朝夕、忘れる間もなく、彼女の胸に深く刻まれてゐたのだつた。

『まあ、折角ですのに、私十日の日曜には、退引ならない御用がございますのよ』

邦子は、申譯なささうに答へた。

『ぢや、月曜日は、駄目ですか』

『平日は病院の方が……』

邦子は言つたが、英二の人物を信じきつてゐる彼女は、

『ぢや、暁子だけ、お伴させていたゞいたら何う？』

娘の方を顧みた。

『でも、私一人でいゝかしら』

『それでも結構です。でも、小母さんに悪いな』

『いゝえ、私はお伴なしでも同じですわ』

邦子は、暁子の歡びに輝く瞳を再びにつこり顧みるのであつた。

どこかで、春の夜めいた、管絃樂のラヂオが洩れてきた。

三

その日——

英二と暁子に乗せたバスは、大船から鎌倉山を越えて、片瀬の終點で停まつた。

『何だか、新婚旅行みたいね』

新調の背廣に、青年紳士らしくスネーク・ウツドを抱いた英二は、バスから降りて、乗客達の群から離れると、ほつとしたやうに、暁子を眺めた。今まで制服姿の暁子ばかり眺めてきた英二には、匂やかに化粧して、カールした髪形も、すんなりした姿態に、巧に着こなした華かな和服姿も、何か新鮮で、急に女らしい輝やきを増したやうに思はれた。

『いやだわ、ジロ／＼見られるんですもの』

暁子も笑ひながら、首を辣めて見せた。

『あなたが、綺麗だからですよ。はつはは』

『まあ、牧山さんの意地悪……』

軽く睨んだ暁子の頬に、眩しい春の光がちらりと光つた。

眼の下には、すぐ江の島が迫つて、藍を流したやうに和んだ海は、きら／＼と白く泡立つやうに光つてゐた。棧橋の上が、日曜の人で賑つてゐるのを見ると、

「島なんてつまんないことありません？ 稲村ヶ崎まで砂濱を歩いて見ませうか」と、暁子が立止つた。

「賛成……汗掻いて、鎌倉あたりで、うんと御馳走を詰め込みますか」

二人は龍口寺の丘の上から、七里ヶ濱の砂濱へ降りて行つた。人影もなく水に光の戯れる汀を、稲村ヶ崎を望みながら歩き出すと、

「ね、牧山さん……」

暁子が待構へてゐたやうに、英二の顔を見た。

「お勤めはどちらか、お決りになりました？ 東京？ 新京……」

「いや、まだ迷つてゐるのですよ。暁子さんが男なら、どつちにします？」

「私が男なら……いゝえ、女でも、斷然大陸組ですわ」

「へえ、國策の線に添つてね」

「それもあるけど……」

暁子は、美しい櫻色の貝殻を拾ひ上げながら、

「だつて、向ふの方はサラリーが、内地の四、五倍にもなるさうぢやありません？ ほつほほ……」

暁子は、自分なら、少しでもサラリーを多くとつて、母親に病院を退かせて、樂をさせてやりたいといふ氣持だつたが、

「ぢや、あなたはきつと大陸へ行きますね」

英二は、急に立止つたと思ふと、眞剣な眼眸で訊ねた。

「えゝ、牧山さんみたいに私迷ひませんわよ。ほつほほ」

「ぢや、僕も、斷然迷はない。斷然……」

英二は、本氣とも、冗談ともつかない表情だつたが、

「暁子さん、あなたが大陸組なら、僕も斷然大陸組ですよ。ね……」

暁子の肩に手を置いたが、瞬間、

「あら……」

ざあツと汀で散つた波頭が、足許で眞白い泡を飛ばしてきた。暁子は叫びながら、跳び上がったがそのまゝ、松林の方へ小走りで駆け出した。

「暁子さん、暁子さん……」

英二は呆氣に取られたやうに、ひら／＼と着物の裾を翻しながら、白砂に曳いた影ともつれるやうに駆けて行く、暁子の後姿を眺めてゐたが、すぐ、何かにつこり呟くと、自分も風のやうに駆け出した。

「あら……」

英二が追付いて肩を並べると、暁子は息を弾ませながら立止つた。透き通るやうな頬が、美しく上

氣して、鼻にしつとりと汗を泌ませてゐた。

「びつくりするぢやありませんか、どうしたんです」
怪訝に訊ねた。

「だって、子供らしいことなんですもの……」

暁子はにっこりして、
「私、一年の時分、こゝへ遠足にきたことがありますの。その時のことを思ひ出すと、急に嬉しくなつて、駈けだしてみたくなつたんですよ」

「はつはは、それで駈け出したんですか。僕はまた急に、何うしたのかと思ひましたよ」

英二は、さうした處女々々しい暁子の仕草に、抱き締めてやりたいやうな衝動をそゝるのだつた。

「ほつほ、びつくりなすつたの……」

暁子は、にっこり首を傾げて美しく微笑した。

砂濱と、美しい松林が続いて、松林は爪先上りの緩い傾斜になり、丘の上へ出ると、眼下に、青々とのびた麥畑がひろがつてゐた。

丘の上へ出た時だつた。

「あら、まあ……」

と、暁子は子供らしい歡聲を擧げて、眼を睜つた。

盛上るやうに密生した椿の樹々には、葉を覆ふやうに眞紅な花が燃えてゐた。

うつとりと、花椿を見上げた、暁子の瞳には、何か深い感動を秘めた輝きが見えた。

「……」

英二は、名畫でも鑑賞するやうに、五、六歩離れて、じつと暁子の姿を凝視してゐた。彼女の氣持を亂すまいとするやうに。

静かな、静かな瞬間だつた。

と——突然、椿の繁みをかすめて、チ、と小鳥が矢のやうに空を切つた。

「あら……」

暁子は振向くと、にんまり英二の方へ笑みかけた。

「私、赤い花さへ見ますと、子供の時分のたつた一つの、記憶を思ひ出しますのよ、あれはやはり椿の花ぢやなかつたかしら……」

「どんな記憶です？ 何か詩的な思ひ出ぢやありませんか」

英二は、興味をそゝられた面持で、始めて近く歩み寄つてきた。

「それが、自分でも齒痒いほどぼんやりした記憶なんですの。眞赤な花の咲いたお庭みたいな處を抱かれて歩いたやうな氣がしますの。私が泣いたので、母がすかしていらしたのかも知れませんが……その時、母の眼に涙が溢れて綺麗な露のやうに光つてゐた事だけは、はつきり思ひ出せますの」

「畫になりさうな場面ですね。お母様が憶えていらつしやらないんですか」
英二が、枝に手を置いたので、椿の花がぼたりと落ちた。曄子は佗びしさに、美しい眉をひそめたが、

「でも、その頃、母は不幸だったんですもの……私、何か母にとって、悲しい思ひ出のやうな気がして、何うしても訊けないんですの」

曄子の聲が潤んだ。

「さうです。夢はいつまでも、胸に秘めて置いた方が美しいものですよ」

英二は、燃えるやうな眼眸で、曄子の顔を凝視めた。が、

「さういへば、曄子さんのお父様も、きつと立派な方だったでせうね」

「私の父……」

曄子は、ちよつと瞳を曇らせたが、

「寫真で見ますと、父は額の廣い男らしい容貌ですけど……私の眼は、母よりも父に似てるんださうですよ」

「それぢや、素晴らしい美丈夫だったですね」

「あら……」

曄子は、赧くなつて、眼を伏せたが、

「いゝえ、父は容貌よりも精神のがつちりした人だつたと思ひますわ……その頃から、大陸問題に熱中して、母方の祖父などと、共鳴して、始終その方面で働いてゐたさうですから、今時分生きてゐましたら、今度の事變などにも、きつと何かしてお國のために働いてゐると思ひますけど」
樹々の間から落ちてきた日光が、頬を掠めて、亡父を偲ぶ曄子の横顔は、堪まらないほどいぢらしかつた。

「曄、曄子さん……」

英二は思はず聲を弾ませると、曄子の手をぐつと握りしめた。

「あら……」

瞬間、曄子はさつと身を引いたが、體軀が繁みに支へられて、ぼたぼたと花を落した。

「ちつとも心配なさることはありません。僕はあなたに差上げたいものがあるんです。これですよ」

英二は、なほも曄子の手首を握つてゐたが、聲はすっかり落着いてゐた。そして片手でポケットを探ぐると、曄子の掌を開いて、何か固いものを握らせた。

「あら、何ですの？」

曄子も、ほつとしたやうに、眼の前で掌を開いたが、櫻色に透いた掌には、金の賞牌が燦然と光つてゐた。

「まあ……」

「これは僕の生命を賭けたメタルなんです。札幌のスキー大会で貰ったんですが、その日は猛烈な吹雪で、僕は全く死ぬ気で頑張ったのです。ですから、これは一面僕の生命を象徴するものなんですよ」

「まあ……」

うつとりと、掌のメタルに見惚れてゐた暁子の瞳は燃え立つやうに輝いた。

「受けていたゞけますか……」

英二の聲が、耳もとで弾んだ。暁子は、はつとして顔を上げたが、

「私が頂いても、いゝんですの？」

真剣な暁子の瞳だった。

「あなた以外に、差上げたい人はありません」

暁子はメタルを握つた手を、高鳴る胸においたまゝ赧くなつて顔を伏せた。

英二と暁子が、鎌倉驛へ入つていつた時は、もう灯が煌めき始めた時分だった。

二人は人群に揉まれながら、改札から流れ込んだが、その時だった。

「あら、牧山さんぢやございません」

石段を降りてきた豪奢な春の洋装に輝く美しい令嬢が英二に聲をかけた。

「あつ、室井さん……」

英二はびつくりして立止まつたが、

「一昨日から、返子の別荘へ来てゐますのよ」

令嬢は、かう言つてじろりと、暁子の方を見た。そして、

「お連れさん……」

笑ひながらも、明らかに敵意に光つた眼眸だった。

良人無き母

その日は、邦子にとつて、一日千秋の思ひで、待ち兼ねてゐた日だった。

大木將軍の凱旋を、熱海に迎へて歸宅したその晩、將軍の電報を手にした瞬間から、將軍の晴れの帝都入り、参内奏上、伊勢神宮参拜等々——毎日、新聞に現はれる將軍の動靜を邦子は、どんなに注意しながら、今日の日を待焦れたであらう。

「それではお願いいたしますよ」

誘ひにきた英二と、美しく着飾らせた娘の暁子とを玄關に送り出しながら邦子は、朗らかな笑聲を響かせたが、二人の姿が路地の向ふに消えると、何か周章てた様子で二階の階段をとんとんと上つて

行つた。

『すつかり春だわ……』

春らしい明るい光の溢れた、嘩子の居間へ入つて行くと、われにもなく唾きながら、磨硝子の嵌つた障子戸を細目に開けて顔を出したが、そこは、澁谷でも丘續きの高台で、眼前には、赤土の駒場のグラウンドの向ふに、帝大航空研究所の時計台が、眩しい蒼空を背景にして、美しい乳白色にかどやいてゐた。

が、邦子はすぐ眼下に折れ曲つた坂道を凝視めてゐるのだつた。

『おや、どうしたのかしら……』

そこからバスの乗場へ続く道路に二人の姿が見えないので、不審に呟いた時だつた。坂の途中の或洋館の屋根を覆うた禰の樹の間から、ぼつかり若い男女の姿が現れた。間違ひもなく英二と嘩子だつた。

『おや、出てきた……』

邦子は、ほつとしたやうに、一人で眺めながら微笑した。

二人は陸しやうに、肩を並べて笑ひながら、さゝやきながら歩いてゐたが、坂を降りて通りへ出ると、しばらくバス停留場に立つてゐた。やがて疾走してきた空色のバスが二人を迎へて再び走り去るまで、邦子はじつと、瞬きもせず見送つてゐたが、そこでも、

『あんなに美しく、伶俐に育ちながら……』

牧山炭鑛王の愛甥と並べて、何の引け目もない似合の婚約者とも見える嘩子の仲よく英二と並んだ姿に、またしても、名乗れる父のない不運な娘の行先を、いちらしく心に描くのだつた。

『それにしても、あれから十九年……』

邦子は思はず私語くのだつた。

乳兒を抱いて、江島家を飛出してからの、母として、長年辿り續けてきた生活戦線のいばらの道――その血の泌むやうな幾星霜を振り返ると、女手一つでよくもこれまで嘩子を育てゝきたのが、邦子には我ながら夢のやうでもあつた。事情があつて嘩子には、死んだものと言ひ聞かせてあつたその人が、もしひよつこり眼の前に現はれるやうな日があつたとしたら、どんなにあの子の成長に驚いて、今日までの努力を喜んでくれるであらう。

時計を覗くと、もう十一時だつた。

邦子は、急いで、銭湯に走り、寂しい一人きりのお午食をすませて、やがて、顔を直し、訪問着に着替へると、もう一度鏡の前に立つてみた。

目立たぬほどの薄化粧が、彼女の顔を一きは上品に、美しく引立てゝゐた。

家を出ると、午過ぎの春らしい光りが、ぱつと眩しく顔に射した。邦子は何かときめく思ひで、さつき二人が乗つて行つたバスの停留所へ急いだ。

品川驛前通り、八つ山橋の袂から、右へ折れて、省線の深い崖に沿ひ、御殿山へ登つて行く緩い傾斜の坂道は、邦子には懐かしい思出の道だつた。

その邊は巨大な石の塀も、年古りた邸の松も、大して變りがなく、邦子には懐かしい昔のまゝの匂ひが、漂つてゐるやうな気がした。

邦子は良人と肩を並べて、幾度か此道を通つて大木將軍を訪れた。

將軍は、當時まだ少佐で、士官學校の教官をしてゐたが、その頃から、この御殿山附近が好きで、今の邸と、つい遠くない處に、家を借りて暮してゐた。邦子は、嘩子を連れて、實家を飛び出してからも、何か心の悩みのある時、一人で解決のつかない問題が起る度に、嘩子を背中に結びつけ、幾度此道を通つて、將軍の許へ相談に行つたらう！

それには勿論深い譯があるが將軍が今度凱旋の途次、上海で乗船直前に、邦子に出した簡単な繪葉書の文句には、

あなたも驚くだらうが、今度上海で、全く珍らしい人に出遇つた。

委細は内地歸還の上萬々。

とあつた。ハガキの文句が簡單であつただけ、邦子に與へた衝動は、却つて強かつたとも言へる。

『あなたも驚くだらうが珍しい人……きつとあの人に違ひない。あの人は無事で生きてゐてくれたのだらうか』

邦子は、別れて二十年、生死も不明だつた良人の顔を、懐かしく浮かべて、じつとしてゐられないやうな氣持だつた。わざ／＼熱海にまで將軍を出迎へたのも、それを確めたい一心からだつたのである。

將軍の邸宅は、坂を上り切つて右へ折れた物靜かな住宅街にあつたが、此邊の豪壯な建物の間に、忘れられたやうに挟まつた、質素で古風な赤煉瓦の洋館だつた。夏であれば深々と屋根までも蔦の葉に覆はれてしまふのだが、今は絡みついた蔓が、やつと、うす赤く芽ぐんでゐるだけで、時代のついた赤煉瓦の地肌は、剛毅な將軍の風貌を物語つてゐるかのやうに、あか／＼と日光に照し出されてゐた。

(お客様かしら……)

邦子が玄關のドアの前に立つと、奥から賑やかな談笑が流れてきた。邦子はためらひながら、將軍が支那から持歸つたといふ綺麗な緑青を吹いた鐘に、コインと撞木を當てたが、直ぐ廊下に足音が聞えて顔見知りの女中が顔を出した。

『あら先刻からお待申し上げていらつしやいましたが、只今、お國からおお客様がお見えでございますので……どうぞ、こちらへ……』

女中は、邦子を、二階の將軍の書齋へ案内した。武人らしい簡単な書齋で、窓際に据ゑた大きなデスクと並んで、將軍が佛國留學中から私淑したといふフォツシユ元帥の胸像がやはらかな光線を浴びて、三軍を叱咤するやうに天の一角を睨んでゐた。階下では引續き賑やかな談笑が聞えてゐたが、やがで客達は歸つて行くらしい氣配がして、突然玄關先で、萬歳の叫びが聞えた。

間もなく――

階段に足音が聞えたと思ふと、ドアが開いて、

『やあ……』

きちんと袴をつけた大木老將軍が、上機嫌らしく、眼の縁を赤く染めて、につこり入つてきた。

『お目出度うございます』

邦子が、懐かしさうに將軍を仰いで、祝辭を述べると、

『いや、今日は郷里の連中が、わざわざ祝ひに上京してくれたんで、一杯傾けてゐたところや』

將軍は上機嫌の笑ひ顔で、どつかりと巨軀を安樂椅子に落とすとセツトから、朝日を摘まみ上げて、

マツチを擦つたが、

『嘩子さんは、達者ですか』

ゆるやかな微笑で訊ねた。

『え、お蔭様で……この春、女學校を卒業でございますの』

『ほほう、もうそんなになりますかな。うむ……』

將軍は、感慨深さうに頷いたが、少しばらくして、

『邦子さん上海から差上げたわしの葉書で、あんたも大凡想像がつかれたことと思ふが、實は上海で

ね、偶然にも、楊大偉君に出遇ひましたぞ』

じつと邦子の顔を覗き込んだ。

『あら……』

邦子は、將軍の言ふ通り、ほゞそれかとは豫期してゐたが、さすが女心の思はず叫んで、將軍の

顔を凝視めた。

想思の良人楊大偉――あれほど愛し合つてゐた良人が、一夜忽然として自分の前から、煙のやうに

消えて二十年、風の便りにも杳として、生死を別たなかつたその人が、今も無事で生きてゐる！……

しかも大木將軍が、現に上海で逢つてきたといふのだ、邦子は、ほつと胸を撫で降ろしたと同時に、

また、何か踊り出したいやうな、激しい感動が身内に沸り返るのであつた。

『相變らず元氣でゐましたでせうか』

將軍の顔を、じつと凝視めた、邦子の大きな瞳から、覺えず涙が溢れてきた。

すると、將軍は煙草を捨て、ぐつと上身を乗出したが、

「あれから二た昔ぢやが……あんたも相變らず元氣だが、楊大偉も、あの當時の紅顔の美青年そつくりですぞ。わつははは……」

將軍は陽氣に笑つて、

「いや、實に奇遇でしたよ。それも乗船の前々の晩のことぢや。そろ／＼寢ようかと思つてゐると、副官が一枚の名刺を握つてきたので見ると『黄邦思』と活字で刷つてあつて、その横に萬年筆で『楊大偉』とあつたのぢや。『黄邦思』は彼の匿名らしいが、邦子さん、わしはこの匿名に、邦を思ふとすぐ讀んで、あんたを忘れない記念ぢやと、木然仁のわしも何かピンとききましたぞ。はつはは……」

「まあ……」

邦子は男の變らぬ情を知つて、小娘のやうに赧らむ顔を伏せた。

「それ、この名刺です」

將軍は、笑ひながら、さつきから、卓の上に伏せてあつた大型の名刺を返して突出した。黄邦思——嘘ではない、嬉しい匿名の名刺の隅に、昔懐しいその人のペンの跡が、少しも變らぬ若々しい筆勢で、『楊大偉』とはつきり讀まれた。

「どうぢやな……」

「……」

邦子は、もう何も言へず、溢れてくる涙の眼を伏せた。

將軍は、さうした邦子の姿を隣れむやうな眼眸で見下してゐたが、

「その時ぢや、さすがの彼も、萬感迫つた風で、わしの室へ入つてくるなり、この手を握りしめて男泣きに泣きよつた。そして眞先に訊ねたのは、あんたの消息だつた……」

邦子の眼にはその人の姿が、まざまざ見えるやうに描かれた。

「嘩子さんの話をする、彼はあの人の生れたことも、未だに知らなかつたらしい……」

「はい……多分、私もさうだらうと思つてゐました」

邦子は、楊の去つた後、初めて妊娠の身を知つた時の、遣り場のない寂しさを、昨日のやうに思出した。

將軍は續けて、

「わしが、嘩子さんの成長の模様や、あんたの長い苦勞の話をしてやると、彼はしばらく茫然としてゐたが、やがて濟まない濟まないと呼びながら、東方に向つて、じつと頭を垂れてゐよつた。そしてあの偉丈夫が、ほろほろと涙をこぼして居りました。恐らく楊は、あんたと嘩子さんに、詫びて感謝の黙禱を捧げてゐたに違ひない……」

「……」

邦子は、込み上げてくる感情の波と、熱い涙を押へつけるやうに俯向いてゐた。

「楊大偉が、あのやうに突然、あんたの眼の前から消えて以來、何處で何んな生活をしてゐたか、わ

しには委しく事情を物語つたが、それは今の處、あなたにも話せない國事の秘密なんぢや、……が、たつた一つ、あなたに話して置きたいのは、彼は歸國以來浙江財閥と結んで、始終影の人として立廻つてゐて、汪兆銘が重慶脱出の直前にも、彼は重慶を逃れ、汪が河内に落着いた頃は、既に香港に潜入して、盛んに汪派の同志を糾合してゐたのぢや。汪の新政權誕生の暁には、楊大偉の名も、或は大きく浮び上るかも知れんが……」

「まあ……」

邦子は、酔つたやうに眼を睜つたが、

「しかし、またあゝした男だけに何處までも表面の名を隠して、裏面に存在の活躍をするかも知れんが、とにかく、邦子さん」

將軍は、急に容を正して、

「楊君がいふことには、俺は、日支協同に捧げた軀體で、何時刺客に殺されるかも知れぬ。だから楊は、あの時死んで此世に生きてゐないものと諦めて、暁子を立派に育てくれ——これが、楊君からあなたへの傳言ぢやつた」

邦子は聲を顫はせた。將軍はそこで、

「まだあなたは、暁子さんに、ほんたうのお父さんを打明けてはゐないのですかね」

「は、……矢張り當分はあのまゝにしておく方がいゝかと存じまして……」

「なるほど……」

邦子の眼には、今朝の明るい街を、英二と一緒に愉しげに出ていつた暁子の姿が哀れに描かれるのだつた。その時、ノックの音がして、女中が顔を出した。

「旦那様、薄田様が、いらつしやいました……」

「暫く待たせておけ」

將軍は答へた。

三

邦子が、將軍の許を辭して、澁谷大山の自宅へ歸つたのは、まだ午後の三時過ぎだつた。

「十九年間生死も知れなかつた良人楊大偉が、現在まだ生きてゐる……そして將軍が直かに會つて歸つてこられた……」

この、餘りにも大きな驚きと、夢のやうな歡びに、邦子はじつとしてゐられなかつた。

「暁子のこと、あの人は知つたのだ。そして、あんなに美しく成長したことも、長い私の過去の苦勞も、あの人は將軍から聞かされたのだ……」

將軍の前に、頭を垂れて日本の方に黙禱したといふ良人の姿を思ひ遣ると、邦子は何度でも涙が流れた。

嬉しい涙——今朝も、あの暁子を送つて、何處からかひよつくりあの人が現れ、あの娘の美しい成長を見たら、何といつて喜んでくれるだらうか、と、さう思つて描いた夢も、半ば實現してゐたのだ——

邦子は、この溢れる歡びを、自分ひとりの胸に仕舞つてゐるのが、息苦しいほどだつた。彼女は、茶の間に落着いてゐられなくなつて、當てもない二階の暁子の室へ上つていつた。

そこには、明るい午後の光が、部屋一ぱいに春めかしく射しこんで、窓の外潤んで蒼空も、新芽に匂ふ樹立の姿も、すべてが彼女の歡びを、わくわく煽り立てるやうに覺えるのだつた。

『あの娘は、まだ歸つてこないのかしら……』

邦子は、何かこの歡びを、別ける相手が欲しくてたまらなくなつた。

が、しかし——邦子は、はつとして我に返つた。

『打明けられる父の素性だらうか？』

邦子は、母の歡びを子の歡びとして、今直ぐ打明けることのできない、深い身の祕密を顧みずにおられなかつた。今日も邦子はそのことを、特に大木將軍からも訊かれ、自分もまた「當分は、打明けない方がよからうと思ひまして……」と、はつきり答へたくらぬのである。そのためこそ、けふの日まで、兄弟親戚の縁も切られて、たゞ一人の愛兒を守つて、いばらの道を辿つてきたのではないか——まして「自分は何時、刺客の手に倒れるやも知れないから、これまで通り亡きものと思へ」とは、

その人も、將軍に言傳てよこしてゐるのだ。

あれほど美しく育ちながら、父の無い哀れな娘——今朝も英二と並んで出掛けた似合ひの夫婦のやうな暁子を思ふと、やがて迫つた結婚適齡期を前にして、父母の祕密に閉ざされた娘の前途が、邦子は、暗澹と思遣られて、傷々しい思ひに胸が詰まるのだつた。

『さうだ、やつぱりあの人は、二十年前に、この世を去つた人なのだつた……』

さう諦めると、今の今まで沸り返つてゐた喜びも、夢に眺めた虹にもまして、果敢ない幻に過ぎなかつた。

『たゞいま……』

ガラリと玄關の格子が開いて暁子の聲が聞えたのは、それから二時間も経つてからだつた。

『あら、お歸り……』

邦子は、あたふたと出迎へたが、

『牧山さんは？』

一緒に歸つてくるものと思つて夕食の用意までと、のへてゐた彼女は、何よりも先にかう言つて訊ねた。

『その停留場まで送つてくださつたのですけれど、晩には、學校の先生のお宅へ、卒業の御禮に上らなければならぬから、と仰有つて、歸つておしまひになりましたのよ』

『それぢや仕方がないわね』

邦子は、諦めたやうに言つたが、

『何うだつたの、面白かつた？』

『え、とても……随分な人出でしたわ』

『さうだらう、この陽気で、日曜日だものね……辨天様の方からずつと廻つて来たの』

邦子は、座敷で不斷着に替へてゐる暁子の姿を仰ぎ見ながら、今日の一日の行樂の跡を、追ひ求めるやうな眼眸で訊ねた。

『あちらの方は止しましたのよ。だつて、棧橋の方なんか見てゐてもうんざりする人出でせう。ですから私達は龍口寺の丘から、七里ヶ濱の砂濱へ降りて、静かな落づたひに、稻村ヶ崎の方へ歩きましたの、却つて閑静で、いゝ景色でしたわ』

『それはよかつたわね』

『椿の花が、眞紅に咲いて……』

暁子は英二に手を把られた瞬間、赤い椿の花が落ちこぼれて美しいメタルが手に残つてゐた時の燃えたつやうな羞恥と歡びを泛べてわれ知らず頬を染めるのだつた。そして着替へを済ますと、

『これ、お母様にお土産よ……』

土産の貝細工と、蛤の籠を出した。

『まあ可愛らしい貝のお鍋ね』

『蛤は、今夜お汁にさせようよ。それから八幡様のお札もいただいてきましたのよ』

暁子は、につこり母を見ながらハンドバックを引寄せて、お護札を取り出したが、その時、一緒に入れておいた、例のメタルが、キラリと美しい光を放つて、お札の間から、ころりと疊の上へ落ちた。

『まあ綺麗なメタル、何處の！』

邦子は、何の氣もなく手を出した。暁子は、はつとしたが、

『牧山さんから、いたゞきましたのよ』

『スキーの賞牌ね』

『札幌の大会にいたゞいたんですつて、卒業記念に上げるから大事にして持つてゐてくれるやうにと仰有つて……』

暁子は、正直に母に言つたが、そこでも、あの瞬間の揺すぶるやうな感激に顔を染めた。

『まあ、そんな大切なものを……』

浮世の表裏を味ひ抜いた母は、若人の誇りと熱情を罩めたメタルに含む謎を思遣つて、

『二人は愛し合つてゐるのではなからうか。もし、さうだつたら、何うすればいゝのだらう？』
傍に羞む娘の顔を、ちらと、いぢらしく眺めたが、

その時、暁子が

「ねえ、お母様……」

美しい瞳を見上げた。

「お母様のお姉様のお家は、室井さんつて仰有いましたわね」

「さうよ……」

邦子は、突然暁子の質問に、ちよつと眉を寄せたが、暁子はつゞけて、

「そのお家、返子に別荘はございません？」

「さあ……よくは知らないけど、でも、それ、何うかしたの？」

「私歸り途の電車の中で、英二さんから、そこのお嬢様に紹介されましたのよ」

「まあ」

邦子の顔は、何故か、さつと曇つたのであつた。

紅白の花

—

翌る朝は雨だつた。

英二は、顔を洗つて、窓を開けると、細かい、滑らかな、艶々しい小雨が、絹糸のやうに降り瀝いで、新芽に萌える芝公園の木立を、静かな濡れ色に光らせてゐた。

「昨日の天氣が、好過ぎたと思つた……」

英二は、ひとりで呟くやうに言つたが、これが昨日でなくて何よりだつたと思つた。彼の眼前には麗かな春光に輝く相模灣の静かな翠色や、丘の徑に燃える花椿や、暁子の描いたやうな和服の姿が、一幅の愉しい繪となつてまさ／＼と描かれるのであつた。

「さうだ……」

英二は、何かわく／＼するやうな、愉しい氣持を押へかねるやうに立ち上つた。

「いよく今日は、新京の方を取決めることにしよう……」

斷然大陸組だといつた、暁子の言葉を思ひ出して、決心するやうに叫んだが――。

「しかし、あの、お母さんを東京において、あの人は新京まで行つてくれるだらうか」

英二はそれが、第一氣にかゝつた。同時に――。

「いや、それよりも、小母さんは、暁子さんを快く呉れるかな……」

何よりも大事な先決問題にぶつかつて、英二は、再び机の前に坐つてしまつた。

「これが決まらないぢや、新京とも決められないぞ……」

英二が暁子に語つた就職口といふのは、新京の方は、日滿鑛業株式會社で、東京の口は、菱井系の

保險會社東海生命だつた。新京の方は、勿論給料も多いし、その上「大陸」といふ世紀的の魅力が、系累の薄い英二のやうな氣樂な青年を動かさずにはなかつた。

「とにかく、當つてみるのだ。あれほど、氣心を知合つた小母さんが、まさか可嫌とは言ふまいと思ふが……」

英二はその點、いくらかの自信もあつたし、先夜久し振りに訪ねていつた時の、邦子の態度や、口吻から見ても、樂觀の氣配は感ずることができた。

「牧山の伯父だつて、あゝいふわかつた人だから、強ひて反對はしないだらう……」

英二は、暁子母子の素性についてこそ、何の知識もなかつたが、何處か匂やかな氣品に充ちた母子の人柄や、性質から考へて、資産や門閥といふやうな條件さへ除けば、暁子は申分のない候補者と信じてゐた。

「そこで、何ういふ風に、小母さんに、切り出すかな……」

英二は、ちよつと戸迷つた。やはり直接談判などは、いくら心易い仲にしても、それは禮を缺くばかりでなく、自分をも卑しくするやうに思はれた。そして、

「さうだ、石黒に頼んで見るかな。それがいゝ……」

親友石黒雄吉の物堅い性格に思ひついて、ぼんと、かるく卓を叩いた時、

「あのお電話でございますよ……」

少女が知らせてきた。瞬間、英二は何うした譯か昨日鎌倉驛で出遇つた令嬢、室井康子の意地悪い眼を思ひ泛べた。

「誰です？」

思はず聲を弾ませた。

「さあ、御婦人でしたよ」

少女は笑ひながら答へた。

電話室は、階下の管理入室にあつた。

長らく下宿や、アパートの混雑を避けてゐた英二も、次第と都會の集團生活に馴らされてきた上にはやはり素人家では電話の便を缺くところから、こゝ一年ばかりは、學校に遠くない芝公園裏の閑靜地帯にあるこのアパートの一室に住んでゐた。

「もし……」

英二が、受話器をとつて聲をかけると、

「あら、牧山さん？……立野でございますの」

それは、康子の甘やかな聲ではなく、よく透き通つた中年婦人の聲だつた。英二は、ほつとした風で、

「牧山です。此度は、いろいろ御配慮にあづかりまして」

「いかゞ？ お急がしくつて？」

「いゝえ、急に學校がなくなつて、退屈して困つてゐます」

「實は、主人の方のお言傳やら、その他にもすこしお話したいことがございますの。今日あたりお遊びがてら、いらしつていただけませんか？ 奈都子も遊びにきてゐますのよ」

「は、御都合さへよければ、今からでもお伺ひします」

「ぢや、お待ちしてゐますから」

英二は、電話を切つて部屋へ歸つたが、

「はてな……」

と、首を傾しげた。電話の婦人は、英二の伯父牧山炭礦王の息のかゝつた少壯實業家立野眞平夫人京子だつた。そんな關係で、英二は、上京後始終出入してゐる先で、現在二口かゝつてゐる就職先のうち、東京の東海生命の方は、立野氏の推薦によるものだつた。

「東海生命の方が、決つたのかな……」

新京の方にも、未練のある英二は、ちよつと困つた場合でもあつたが、

「しかし、他にもすこしお話したいといふのは、何だらう？」

英二は、考へたが「奈都子も來てゐますのよ」といつた、夫人の言葉に思ひつくと、

「もしかしたら？……」

と、室井康子の姿を眼に泛べた、英二が、康子を知つたのは、去年の夏、立野家の家族と一と月ばかり、返子の別荘で暮した時、奈都子と康子が、双葉時代の同窓である上に、兩家の別荘も、同じ返子の浪子不動のある松原に近い同じ地域にあつたので、奈都子の紹介で、水泳のコーチなどしてゐるうちに、すつかり親しくなつて、時には奈都子と一緒に、室井家の別荘へも出入する程に、親密な關係に進んだのであつた。

が、いづれにしても、英二は、電話の約束を斷る譯には行かなかつたので、間もなく朝の食事を済ませると、アパートを出た。

二

英二が平河町の立野家へ着いたのは、もうお午前だつた。

「さあどうぞ……」

玄關へ迎へた顔馴染の女中は、すぐ英二を案内して、奥へ導いた。

春雨の煙る庭園に面した八疊の居間で、夫人は、まだ娘のやうな、派手な姿をした奈都子と二人で何か頻りに笑ひ合つてゐるが、

「あら、いらつしやいませ……」

夫人と挨拶が済むか濟まない間に、奈都子が傍から、待ち兼ねてゐたやうに、

「牧山さん、駄目よ……今朝康子さんからカン／＼になつてお電話してきましたわ。昨日鎌倉へいらしたんですつて？」

愛くるしい眼を刮つて、咎めるやうに英二を睨んだ。

出會ひ頭の不意を打たれて、英二は、どきまぎ魔誤付きながら、

「はア、行つて來ましたよ。日曜日の上にあのお天氣で、恐ろしい人出でしたよ」

やつと答へたが奈都子は、

「あら、狡いわ、とぼけて……私が伺ふのは、人出なんかぢやないわ。その時のお連れさんよ。誰方？」

「あの人ですか……」

「とても綺麗な方ですつてね……何處かの女事務員？」

奈都子は、揶るやうな微笑の中に、軽い蔑みをほのめかせて訊ねた。英二は、ちよつと表情を曇らせたが、奈都子は、尙も追究の手をゆるめず、

「駄目よ牧山さん。そこらの職業婦人なんか連れて歩くの、お止しなさいよ。伯父様の名にかゝはるわよ。康子さん、とても怒つていらしたわよ。あんまりあなたの趣味が低級だったので、紹介された康子さんまでひどく自尊心を傷つけられたつて、それは憤慨していらしたわよ」

「さうですか……それは失禮しましたね」

英二は、あの美しい愛情に充ちた慎ましやかな母子の生活を、ブルジョア娘の意味ない誇りに、無残にも傷けられたやうな公憤を感じて、ぶつきら棒に言ひ放つた。奈都子は、それを見ると、

「あら、牧山さん、慍つたの？」

半ば調戲ふやうに、英二を覗いたが、

「そんなにお好きな方……濟みません」

これもむつとした風で、口を噤んだ。夫人は見兼ねて、

「まあ、奈都子つたら……」

窘めるやうに娘を睨んだが、

「ねえ、牧山さん……」

改まつて、英二の方へ向き直つた。

「お話は、他でもありませんが、東海生命の方でございますの……一昨日も、主人が歸りまして、殆ど決定したさうでございますから、一度お目にかゝつて、細々したお話がしたいと申してをりましたよ」

「有難うございます。大變御厄介になりました……」

「まあ、あちらの會社でございますしたら、日本一の菱井の系統を引いて居りますから、内容もしつかりいたしてをりますし、私共も御推薦申上げて、安心だらうと存じてをりますの」

「御尤もです……」
 「それぢや、あの、二、三日のうちに、主人の會社へいらしつて、詳しいお話をお聞きくださいません？」

「はア……」

英二は、新京の口もあるので、飛びつくやうな返事は躊躇つたが、夫人は、得意の面持で、
 「それで、實を申し上げますと、このお話には、室井さんのお骨折れもありまして、御承知の通りあちら様は、菱井財閥でも押しも押されぬ少壯幹部でいらつしやるので、そのお聲がかりですもの。あなたもお入りになつてから、何彼と好都合だらうと思ひますのよ」

英二は、室井の名を聞くと、はつとして眉をひそめた。そして、温室に咲誇る紅薔薇のやうな、驕氣に充ちた康子の風姿を描いた。しかし、それは静かな流れの岸に、慎ましやかに咲き出でた白い野百合を見るやうな、暁子の可憐な風情には、比すべくもないと思はれた。と、夫人が、

「それで、ねえ、牧山さん……」

じろりと、奈都子の方を見て、

「御就職が決まれば、その次は、御結婚ですわ、實は、私ども、そのことでも、いろ／＼夫人と、話してゐるのでございますよ」

思はせぶりな一瞥を、英二の方へ投げた。英二は、やゝたじ／＼の形で、

「いや、その方は、まだ急ぎませんよ」

敬遠の陣を張つたが、

「あら、何うしてですの？」

「まだ、學校を出て制服を脱いだばかりですからね」

「だから、尙更急ぐんぢやありませんか。人間は獨立をすれば、結婚するのが、當り前でございますわ。立派な社會人になつてゐながら、いつまでも一人でぶら／＼してゐるのが、一番いけないだと思ひますの。奈都子なども、それで私ども急ぎまして、皆さんはすこし早いと仰有るのを、押切つてお嫁に出したのでございますよ。現に近頃は政府でも、しきりに早婚を奨励してゐるぢやございませんか。男子は二十歳、女子は十七歳になれば、生理的にも、もう十分結婚していろ／＼さうでございますわ」

「しかし、まだ僕なんぞ、女房を養へませんからね。まあ、世間一般と見て、三十前後までは……」
 「あら、あんなことを、立派な伯父さんがいらつしやるくせして……そんなことを言ふのは、境遇や何かの關係で、生活が苦しかったり、適當な方がみつからない方ですわ……あなたなど、理想の方が見つければ、早い方が結構ぢやございません？……實は豫々そのことでも、伯父様からお手紙がございまして、主人も一生懸命でございますよ……」

英二は、暁子の姿を思ひ出しながら、夫人の熱辯に壓迫を感じてゐたが、

「ねえ、牧山さん、それで私、いゝ候補者を探し當てましたのよ。ねえ、室井さんの康子様なら如何？」

熱心な眼で、英二を凝視めた。

「あの方なら、お互様に、お氣心も十分わかつてゐますし、一ト頃などは、随分お親しい御様子でしたから、申分ない御縁だと思ひますのよ……」

夫人は、蜘蛛の絲のやうなもので、ぢり／＼抜き差しならないやうに、英二の自由を縛るやうに攻めてきた。

「それで、實は、室井様にも、うす／＼御意向をうかゞつてみましたら、先方様も、とても大乗氣で、實は今も申上げたやうに、御就職の口なども、それは御熱心に斡旋してくださいましたの。あなた様さへ御異存がありませんでしたら、主人から伯父様の方へも、お手紙を差上げたいと申してゐますのですが、いかゞ？」

英二は餘りにも、押しつけがましい夫人の話に、いくら反感をさへ覺えて、

「しかし、結婚となれば重大問題ですからね。僕にも、もう少し考へさせていたゞきたいですね」

「無論、あなたのお氣持が第一ですけど、康子様なら、御容貌といひ、人物といひ、殊にお家柄といひ、申分のない方だと存じますわ。それとも他に、誰方かあなたの方で……」

にやりと、英二の顔を覗いた。すると、傍から奈都子が、

「まさか、昨日の方と……さうぢやないでせう。ほつほほ」

悪戯らしく笑つてみせた。

「まあ、失禮な、何を言ふんです……」

夫人は、すぐに奈都子を睨んだが、

「まさか、牧山さんが、タイピストや、事務員などを、お嫁になさるものですか……假にも、そんなことをなすつちや、牧山さんの御人格に係るばかりでなく、御周囲が承知なさいませんし、御上京中の事を任せられてゐる私共だつて黙つて見てはゐられませんわよ。ねえ、さうでせう、牧山さん」

夫人は、刺すやうな鋭い眼に、皮肉な微笑を漂はせて、英二の自由に防衛の陣を張つたが、すぐ、

「ですから、牧山さんも、十分自重なすつて、これからは、そんな素性の知れない女を、連れてお歩きにならないことですわ……牧山さんは御風采も御立派だし、お家柄も立派でいらつしやるのでついでさういふ女などから、ちやほやされますから、ほんとに御注意なさいまし、ほつほほ」

いきなり冷たい手で、人の顔を擦でるやうな笑聲を立てた。

「とにかく、それでは、よく考へさせていたゞきます……」

英二は、こんな連中に係つてゐたら、何を言ひ出すか知れないと思つたので、腰を浮かせて、逃げ仕度にかゝつたが、

「まあ、もう、お歸り。そんなに急いでお歸りにならなくてもいゝでせう」

奈都子が引留めるやうに言つた時だ。襖が開いて、
 『あの、室井様のお嬢様が、お見えになりました』
 女中が報らせてきた。

三

『あら、康子さんが。それはいゝ都合だわ、奈都子、あんた行つて、こちらへお通しなさいよ』
 夫人は、かう言つて、奈都子と女中を見送ると、英二の方へ、

『いゝでせう。今日は別に御用はないんでせう。とうど都合よく康子さんもいらしたのですから御一緒にお晝飯でも召上つて、ごゆつくり遊んでいらつしやいませね』

英二は、周囲の形勢に、いよいよ石黒訪問の急を感じて、

『ちよつと、訪問先があるのですが……』

もじ／＼腰を上げようとしたが、

『あら、それぢや、いけませんわ、折角康子さんがいらしたのに、すぐにあなたがお歸りになつちや、それこそ、康子さんが、お氣を悪くしますわよ。ねえ、もう十一時ですわ。せめて、お食事でも一緒になすつてからになすつちや』

『電話で約束しておいたのですが』

『それぢや、待つていたゞいたら如何……ね、お電話かけさせませうか。何番でございます？』
 相手を捜るやうに訊ねた。英二もそれを見ると、依怙地になつて、

『それぢや、恐縮ですが、牛込の×××番へお願いいたします』

『少々お待ちください』

呼鈴のベルを押して、夫人が女中を呼んだところへ、康子が、奈都子に導かれて入つてきた。

英二の方へ笑みかけたが、

『昨日は御馳走さま……』

につこり捜るやうな眼で笑つた。

英二は、何か言はうとしたが、そこへ女中が現はれた。

『牧山さんにお電話を呼び出して差上げなさい。何番でございましたかね』

夫人が訊ねたが、英二は、

『いや、僕がかませう……』

と、立上つた。

『ほつほ、他聞を憚りますの？』

また、奈都子が冷かした。

英二は電話口へ立つと、石黒の勤めてゐる會社を呼出した。

『やア、牧山君か、どうしてゐる』
磊落な聲が呼びかけてきた。

『ちよつと君に頼みがあるが一時過ぎには社にゐるだらうか』

英二が訊ねると、

『今直ぐには駄目か、……午過ぎには、少し忙しくなつて、外へ出なければならぬんだが』

『さうか……』

英二はちよつと考へたが、

『よし、ぢや、これから、すぐに出かけるから、待つてゐてくれたまへ』

『よし、来た！』

英二は、電話を切つて、座敷へ歸ると、

『タイピストさん？』

奈都子がまた調戲つた。英二はむつとしながら、

『ちよつと急な用事で友人が待つてゐるさうですから、また伺ひます』

夫人の方へ挨拶したが、

『あら、それぢや、康子さんが、お氣を悪くなさいますよ』

夫人は、眼に角を立てた。

『しかし……』

英二も、困つてもじ／＼してゐたが、

『いゝわ、お歸りなさいよ……私だつて、あなたにお會ひしに來たんぢやないんですから、いらつし

やいよ。いゝわ』

康子が、涙ぐんだまゝ、ぶんとして言つた。

『あら、どうなすつたの？』

夫人は、事態の險惡を見ると、慌てゝ、二人の顔を見比べたが、

『牧山さん、もう暫くいゝぢやありませんか……奈都子、あんたが失禮なことばかり言ふから、牧山

さんがお氣悪くなさつたのよ。康子さん、牧山さんは、奈都子に慍つていらつしやるのよ。ね、康子

さまは悪いところへいらしつたの。ね、悪くお取りになつちや困りますわよ』

極力二人の間を取做すやうに言つたが、今度は奈都子が、

『さうお、ぢや、私歸りますわ。だから、牧山さん歸らないでください』

ぶんとして、ハンドバックを取上げた。

『まあ、お前は……』

夫人は、奈都子を睨んだが、奈都子は、

『ぢや、歸りますわ……牧山さん、あんたゐなきやいけないわよ。でないと、私康子さんに悪いわ

よ」

「悩つたのか、それとも、相手を引止める政策か、見事に、英二の足を封じてしまった。

「困りましたね……ぢや、もう暫くおますから、あなたも、歸らないでください」

英二は、退引ならなくなつて、かう言ふより外はなかつた。その機に乗じて、夫人が巧に、

「だつたら、あんたも、一緒に残つて、久し振りに、昔話でもしたらどう？ ……こんなにお顔が揃ふのは、もう半年振りぢやないの……ねえ牧山さん」

「……………」

英二は、たうとう縛られてしまつた。夫人は、それを見ると、

「康子様は、ずつと逗子の御別荘でございますの……」

「はい……………」

「ぢや、この雨でも晴れましたら、ねえ奈都子、正俊さんも誘つて、牧山さんを逗子へ御案内しようぢやないの。ねえ牧山さん。御就職がお決りになると、お忙しくなりますから、暫らくあちらで英氣をお養ひになつたら。これから花時に向つて、湘南の海濱も、悪くありませんわよ。去年の夏は、二人で泳ぎを教へて頂いたりして、随分賑かだつたぢやありませんの」

老獺な夫人は、こゝでも、康子と英二が接近してゐた當時の生活を想出させるやうに言つて、

「よくあの時も、今日のやうに、奈都子と喧嘩なさいましたわ。ほつほほ」

英二の顔を覗いて笑つた。

「さうよ……あの時の牧山さんたら、康子さんばかりに熱心にコーチして、私になんか、ちつとも教へてくれなかつたのよ。だから、變な眞似なんかなると、うんと油を絞つて上げるわよ」

母に助力して、巧な結論の下に、英二を睨んでみせた。

「どうも、参つちやつたな……………」

英二は、月の美しい晩、浪子不動前の松原を散歩中、偶然、康子と出遇つて、一緒に歩いてゐるところを、ちやうど奈都子に発見され、ひどく拗ねられたことを思ひ出して覺えず揶揄つたい笑を洩らしたが、

「私をおいてきぼりにして、一緒に海岸を散歩なすつたりして、お安くなかつたわよ」

奈都子の言葉に、

「あら、あんなこと……………」

康子は、色つぼく奈都子を睨んだ眼を、そのまま英二の方へ向けた。その瞳は、英二に向つて、あの夜の祕密と歡びとを訴へるやうに囁いてゐた。英二は、その熱い視線を、思はず、眩しげに外らしたのである。

だが、その瞬間、英二の胸には、もう長らく忘れてゐたその夜の記憶が、フィルムのやうに鮮明に泛んだ。

それは去年の夏の一夜。
 月明りの空に、杜の影がくつきり浮んで、濱の砂地が白々と續いてゐた。さつきまで、ざわめいてゐた避暑地らしい賑はひも、ひっそりと絶えて、松原の間から波の音が囁くやうに際だつてゐた。英二は、窓の月の美しさと、寢床の暑さで眠られぬまゝに、別荘の裏庭傳ひに、砂濱を、松原の道までさまよひ出たのだつた。
 そして、松の根株に腰を下ろして、銀盤のやうに月光に映えた相模灘の海面に、うつとり瞳を凝らしてゐた。
 夜の海の磯めいた微風とともに、何か濕やかな感傷が、さうした英二の心を包んでゐた。
 その時だつた。

『あッ……』
 華奢な柔かい掌が、突然後から、英二の兩眼を軽く掩うた。瞬間、花の香のやうな香料の匂ひとともに、柔かい處女の肌の香が、英二の感覺に蒸されるやうに襲つて來た。

『奈都子さんだね』
 英二は、かう言つて笑つたが、女は答へもせず、手も放さなかつた。が、次の瞬間、

『ほつほ、お生憎さま……』
 澄みきつた、綺麗な笑聲とともに、放された視線の前へ、月光を浴びた康子の姿が、美しい花のやうに笑つてゐた。英二は、はつとして、

『おや、康子さんですか』

『奈都子さんでなくつて、濟みません……』

調戲ふやうな瞳が、眩しいほど近々と覗き込んでゐた。英二は、何か壓倒された氣味で、

『お一人ですか』

『悪かつた？』

『いゝえ……』

咄嗟の適當な返辭に困つて、焦立たしげに見上げた英二の眼には、銀色に輝く海を背景に、まともに月光を浴びて立つた康子の姿は、夜の海の妖精のやうに美しかつた。

何といふ大膽な、人懐こい娘だらう……。

英二は、暫時、うつとりと康子の姿を見守つた。英二は、この別荘に來てから、奈都子に康子を紹介されて、まだ一週間で経つてゐなかつた。勿論、この二、三日、奈都子に強請られて、二人に水浴のコーチを續けてゐたが、別に奈都子を措いて二人きりで、話したことさへ殆ど無かつた。しかし、英二は奈都子に比して、遙かに美しい康子の方へ、いくらか心を惹かれてゐた。わけて濃藍色の海水

着からはみ出した、すんなり豊かにのびた肢體の健康なバラ色に匂ふ線の美しさは、明るい日光の下に狂はしいばかりの魅惑を湛へてゐた。

英二は、今、その康子が偶然、人も無い初更の海邊で、一人きり自分の前に立つて、馴れ／＼しく笑みかける處女らしい媚態を、不思議な氣持で眺めたが、

「すこし、そこらを歩きませんか？」

康子がにつこり言つた。

「はア……」

英二は、夢中で立上つた。

薄霞んだ月光に煙つて、空と海とが夢のやうに溶け合ふあたりに、キラリと燈臺の灯が光つた。

「あれは、何處の燈臺でせう？」

康子が、につこり振返つた。

「さあ……大島にしては、近すぎるやうだが……」

英二は、うつとり地平にそ／＼がれた康子の夢みるやうな瞳を見た。

何か現實の世界から遊離した、夢幻的な甘い情緒が、戀する人のやうに二人を包んだ。

二人は、晝のやうな白い砂濱の上に、仲よく影を纏らせながら、暫くは無言で歩いてゐたが、

「ねえ、奈都子さんに、慍られないこと？」

突然、康子が、英二の方を覗いた。

「何故です？」

英二は、あまりに唐突な、康子の質問に眼を瞠つた。

「だつて……」

康子は、英二の不審に充ちた眼眸に、にんまり訴へるやうな微笑の眼を向け、何故か、ちよつと口籠つたが、

「だつて、二人きりで、こんな處を歩いたりして……」

「……」

英二は、突然こんなことを言出す、相手の意中を探るやうに、康子を見た。

「あなた、奈都子さんと、御結婚なさるんでせう」

「はつはは。そんなことが、冗談でせう……」

英二は、あつさり笑ひに打消したが、

「あんな、嘘……」

意外に眞剣な康子の眼眸を見ると、英二は、はつとして、息を呑んだ。

(何故この娘は、こんなことを、執こく氣にかけて訊ねるのだらう……?)

ふと、甘やかな想像に胸を躍らせたが、

「ほんとに？」

「絶対に、嘘なんか……」

英二は、われ知らず、強い調子で打消した。

そして、

「何故そんなことを、お訊きになるんです」
にっこり康子の顔を顧みた。

「だつて……」

康子は、言難さうに、足許の砂地に瞳を落したが、

「私、それだから、遠慮してゐましたのよ」

「何をです？」

「あなたに、馴々しく甘えることを。奈都子さんに悪いかと思つて、ほつほほ、かまひません？」
處女々しい可憐な媚が、圓らかな瞳を熱く潤ませて、キラリと美しい月光の粒を宿して微笑した。

英二は、瞬間、抱きしめてやりたいやうな情熱の衝動を、辛うじて制して、

「そんな御遠慮は無用です。せいぜい甘えてください。はつはははは」
自分ながら氣障な返答に、すぐ苦笑した。

「然う、ぢや、明日の晩も、こゝへいらしつてくださる？」

「……………」

「私あなたに差上げたいものがありますのよ。いゝこと」

「今時分にですか」

「困る？」

「いえ、別に……」

「きつとよ」

二人の手が、思はず觸れようとした時、突然、背後から、二人の肩を、ドンと強く叩いた者がある。

「あつ……」

二人が、驚いて振り返ると、

「お楽しみ……」

奈都子が、泣き出しさうな顔を歪めて、巫戯けた笑顔を作つてみせたが、すぐ、その眼は濡れてきて、

「ひどいわ、随分だわ……私だけ、出し抜いて……」

口惜しさうに、二人を睨んだ。英二はびつくりして、

「冗談ですよ。何も、あなたを出し抜いたんぢやありませんよ。偶然、こゝで出遇つたんですよ。そんなこと言つちや困りますよ」

「さうよ……私が、こゝへ散歩に来たら、ちやうど、牧山さんがその松の根株で、海を眺めていらしたのよ。可憐よ、そんなこと仰有つちや、ね、仲よく一緒に散歩して歸りませうよ」

康子も一緒に成つて辯解し、慰撫したが、奈都子は、

「いゝわ、私歸るから、二人で仲よくお遊びなさいよ……」

言ひさま、くるりと踵を返すとそのまゝ家の方へ駈け出した。

「あら……奈都子さん……」

康子は、遽て後から呼びかけたが、奈都子は振り向かうともせず、白い浴衣の袂を翻しながら松原の並木の木の下闇を抜けて、どん／＼向ふへ走り去つてしまつた。康子は、別に追はうともしないで、美しい眉をよせたまゝ、後姿だけで見送つてゐたが、

「歸つちやつたわ……ほつほ、構ひませんか？」

呆氣にとられて立ちつくしてゐる英二の方へ、媚びるやうに笑みかけた。

「仕方がありません。誤解ですから」

英二は、吐出すやうに言つた。

「さうお、仕方がないわ、ねえ……自分で氣を廻してゐるんですもの」

康子は、寄添ふやうにして、英二の顔を見上げた。

しかし、英二は、奈都子を歸してから、急に白けた自省に返つてきた。今日まで親しくしてゐた奈

都子にも、何か濟まないやうな氣がするばかりでなく、それを止めも慰めもしないで、むしろ勝利者のやうに冷笑してゐる康子の媚態をも、そのまゝには受入れられない興醒めた批判が頭を擡げてきた。

「それぢや、僕達も歸りませうか」

「あら、やつぱり、氣になりますの」

「氣になるとか、ならないとかの問題でなく、お互の慎しみぢやありませんか」

「さう、ぢや歸りますわ」

康子は、案外素直に言つた。

ところが、その翌日の朝だつた。いつも、眼が醒めると英二の部屋へ邪魔してくる奈都子が、その日に限つて見えないので、やはり昨夜の事で機嫌を損ねてゐるんだなと思つてゐると、午後になつて昨夜は、あれからすぐ歸つたのね」

けろりとした風で、笑ひながら部屋へ入つてきた。

「よく御存知ですね」

「康子さんは、牧山さんに參つてゐるのらしいわね」

「まさか……」

「ほんとよ……何う？ あの人と結婚なすつたら。私、あの時は口惜しかつたけれど、今朝になつてさう考へ出したのよ」

まるで昨夜とは、別人のやうな明朗さだつた。

「私、お母さんに、もう御相談したのよ」

英二は、意外に眞剣な奈都子の顔を、呆氣にとられて見守つた。

ところが、それから間もなくだつた。現在奈都子の良人である落合男爵の次男正俊が、立野家の別荘へ見えるやうになつて、奈都子との、縁談を耳にするやうになつたのは――。

それと同時に、英二に對して、立野夫人までが娘と一緒になつて、しきりと康子との接近を慫慂するやうになつた。

英二は、さうした豹變に伴ふ有産婦人の不可解な心理に、深い疑問を感じながらも、いつしか康子への愛情に惹かされて、室井家の別荘にも出入するやうになり、二人きりで夕景の海岸などを、仲好く散歩するやうにもなつたのであつた。が、夏も過ぎて、英二達も、逗子を引揚げてから間もないあの晩のことだつた。

英二が、何かの用事で立野家へ行くと、ちやうど康子も見えてゐて、三人でトランプをしたり、レコードをかけたりして遊んだが、その日に限つて、何かしら康子の調子が違つてゐた。

言葉の數も尠く、滅多に笑聲も立てないで、妙に沈んだ様子だつた。英二が氣にかけて、

「何うしたのです？ ……馬鹿に元氣がないですね」

訊ねても、

「さう、悪かつたら、御免なさい……」

妙につんとした挨拶だつた。英二は、ひどく味氣ない氣持で、その晩、康子を代々木の家まで送つたが、車中でも、始終黙々として、不機嫌だつた康子が突然、

「奈都子さんのお婚様、お決まりになつたの御存知？」

こんなことを言つて訊ねた。

「さあ、慥かなことは知りませんが、一三度逗子へ見えた落合さんちやありませんか」

「さうよ……」

康子は、つんとして答へたが、すぐ、

「その方のお父様、男爵ですつてね」

「さうらしいですね」

別に男爵だからつて、大して驚いてもゐなかつた英二は、殊更らしくそんなことを訊く康子の顔を怪訝に見たが、康子は暫くして、

「逗子へもいらしたの、その方？」

「二三度見かけましたよ」

「私には紹介もしないのよ。狡いつたらないわ」

いかにも口惜しさうに口走つた。英二は、瞬間、その言葉に、この娘達の交友にひそむ、血みどろ

な虚榮の競争に、思はず眼を刮つたのである。そして、英二等青年には、想像もつかなかつた、あの時の、意外な奈都子の豹變も、今日の康子の憂鬱な氣持も、はつきり讀取ることができた。男爵の倅——原因はそれだつたのだ、英二は、餘りの淺薄さに、突上げてくる憤りと皮肉の嘲笑を押しへることができなかつた。

英二が、康子を輕蔑し始めたのは、それからのことだつた。

ところが、何うした風の吹き廻しか、去年の暮、奈都子の結婚式があつたその頃から、また再び康子の方から、しきりに電話をかけてきたり、訪問したりして、英二に接近して來るやうになつた。英二も不思議に思つてゐると、或時康子が、突然、

『私すつかり、幻滅を感じちやつたわ』

『何にです？』

『だつて……』

康子は、かう言つて、媚びるやうな笑顔を、英二の方へ向けた。

英二は、何を言ひ出すのかと、康子の方を見返したが、

『ねえ、いくら男爵のお坊ちゃんでも、次男坊で、おまけに、あの容貌ぢやあ、ねえ。ほつほほ……私、結婚式の晩から、奈都子さんが、お可哀想に思へてならなくなつたのよ』

康子は、いかにも勝ち誇つたやうに、英二の手を握りしめた。英二は、その熱い握手に、却つてぞ

つとするやうな、うそ寒さを覺えずにゐられなかつた。

『それで、この娘は、再び僕に好意を示してきたんだ……』

英二も、一度立野家で紹介された奈都子の新郎落合正俊の、鼻の平べつたい、口の大きい、それで見ると不健康らしい蒼白い瘦軀を思ひ泛べ、あまりに淺薄な、そして現金な、康子の心事を心から蔑んだ。

英二が、康子を避けはじめたのはそれからで、これが彼の彼女に對する印象の全部だつた——。

ところが昨日、暁子と一緒に、鎌倉へ行つて歸り途に、はからず康子に出遇つたのであつた。康子は、暁子の淑やかな美しさに、一瞬は、激しい嫉妬の眼を尖らせたが、相手の質素な風采を見るとすぐ彼女らしい優越感にそゝられた風で、

『失禮ですけど、紹介していただきたいわ……』

相手の低い身分を、追究するやうに言つたのであつた。

そして、その翌日の今日になつてみると、あれほど眞剣に敵意を含み合つてゐた奈都子と、早くも連絡して、今の、この仕儀である。

英二は、内心、反感こそ募れ、かうした娘達の我儘な愛情には、少しも好意を感ずることができなかつた。

英二は、たゞ立野家に對する義理合上、夫人の言葉に従つて、中食だけつきあひ、それが濟むのを

待ちかねて、執拗く押し止める夫人や奈都子の言葉を振り切り、立野家を辭し去つたのだつた。

五

時計を見ると、まだ一時だつた。

英二は、赤坂見付までくると、公衆電話のボックスに駆け込みもう一度、石黒の會社へ電話をかけた。石黒はちやうど、出かけるところだつたらしく、

「それちや、僕はこれから社を出てゆくから、二時半頃に銀座のオリムピックで逢はう。それまでに用事を済ませて、必ず行くよ」

「ちや、頼むよ」

「そんなに急いで、一體何の用事なんだい」

石黒は笑つたが、

「委細面談の上さ……ちや、待つてゐるよ」

英二は、電話を切つてボックスを出たが、

「暁子さんのことだと聞いたら、石黒の奴、何んなにびつくりするだらう……」

石黒の驚く顔を描いて、ひとり微笑したが、その下からまだ眼に残る、暁子の處女々々しい清純な姿が、露をふくんだ純白のバラのやうに泛んだ。それは、いたづらに眞赤な色のみ誇る、何の香もな

い造花のやうな康子の風姿に比べると、それは天上と地上の相違だつた。

英二は、すぐに銀座まで電車に乗り、雨の鋪道を往つたり來たりしながら、二時過ぎるのを待ちかねて、オリムピックの扉をくゞつた。

石黒が、がつちりした、淺黒い、男らしい顔に、持前の磊落な笑ひを泛べながら、

「よう、何事だい、朝から大騒ぎをして……」

待ちかねてゐる英二の前へ近づいてきたのは、それから間もなくであつた。

石黒は、英二の中學時代の親友で、學校は、早稻田の經濟學部だつたが、英二が一高の試験に落ちて一年ばかり遊んでゐる間に、一と足早く早稻田へ入つたため、卒業も自然、一年早かつた。邦子が勤めてゐる山手病院の院長の甥であるところから、英二が最初邦子の家に寄宿するやうになつたのは實は、石黒の口利だつたのである。英二は照臭さうに、

「まあ、茶でも飲んで話しよう」

「何だ、人を急がせておいて、莫迦に焦らすんだね」

石黒は、笑つたが、

「實はね……」

と、英二は石黒を見ると、壓へきれない熱情に驅られ、思切つて切り出した。「結婚の仲立をしてもらひたいんだよ」

「俺にか……そんな色つぼいことは柄にないよ。それに、そんないゝのがあれば、俺が欲しいぢやないか。はつはは」

石黒は、運ばれた紅茶をすゝると、

「しかし、見込んで頼まれたとすれば、一と肌ぬぐかな、何ういふ話だ」

石黒の笑顔は、豪傑らしい大きな相貌に、子供のやうな無邪氣を湛へるのだつた。

「實はね……」

「また、實は、か。はつきりしろよ。何處の令嬢に惚れたんだ」

「實は……」

「また……はつはは」

「江島さんの眸子さんだよ」

英二は、早口に言つて、眞赧になつた。

「はつはは、赧くなりやがつたな……」

「たのむ、恩に被るから」

英二も笑ひ出した。

「よし……」

石黒は大きく肯いたが、

「あの人なら、正に金星だよ。貴様、女的選擇だけは、相當なものだぞ」

「馬鹿！」

「はつはは……」

石黒は、また笑つたが、急に眞面目になつて、

「しかし、言つておくよ……きつと一代、眸子さんを、泣かすやうなことはしなからうね。これだけ

は、男と男で、首をかけて誓つてくれないと困るぞ。何うだ」

「勿論だよ」

「いや……安請合は危いよ……それをはつきり聲明しなければ僕は犬馬の勞はとれないよ」

「わかつた」

「どうだ、神明の前に誓ふか」

「誓ふ」

「間違へば、首だぞ……」

「怖いね……」

「いや、冗談でなく！」

「大丈夫だ」

「さうか……それでは、呑み込んだよ。今夜早速、出かけよう」

「お願いするよ」
 「よろしい」
 石黒は、また大きく肯いた。

隣邦の志士

一

その晩、石黒は、英二の意をうけて、澁谷大山の邦子の家を訪ねた。朝からの雨は、すっかり霽れて、春めいた霞んだ夜空には、星屑が一ばいに散らばつてゐた。

「あら、まあ、お稀らしい……」
 ちやうど、母娘は、夕飯を済ませて、お針仕事を展げてゐたところだったが、思ひがけない石黒の訪問に、二人は、遠てゝ仕事を片附けながら、

「さあ、どうぞ……」
 いそぐと奥の座敷へ招じた。

「突然、お邪魔に上りまして……」

「いゝえ、ようこそ、いらしつてくださいましたわ——取散らしてをりますがさあ……こちらへ」

「どうぞ、お構ひなく……」
 邦子と向合つて坐つた石黒は、間もなく番茶を運んできた曄子の姿を、ちらと新しい興味の眼で眺めたが、

「ほう、これは、立派なお嬢さんになりましたね……」

つくぐ、曄子の美しい、成長振りに眼を瞠つた。曄子は赧くなつて、

「あら、ひどいわ」

英二のゐた時は、始終石黒も遊びにきて、無邪氣に甘え親しんでゐただけに、今でも小娘のやうに石黒を睨んでみせるのだつた。

「いや、決してお世辭ぢやありません。これぢや、立派なお婿さんを、推薦せずんばあるべからずですよ」

「また！」

「はつはは」

石黒は笑つた。邦子も思はず微笑んで、

「つい先達つても、牧山さんが、半年振りにお見えになりました」

「聞きましたよ。鎌倉へいらしたさうですね」

「はア、もしかすると満洲へお勤めになるかも知れないので、當分のお別れに、是非私も御一緒に

と、仰言つてくださつたんですが、生憎私は外に御用がございまして』

『今日、牧山君に會ひましてね』

石黒はこんなことを言つて、暫く母親の氣持を偵察してゐたが、何かの機會で暁子が、座を立つと

『實は小母さん、今夜は、柄にもない用事で、お邪魔に出たのですが……』

『まあ、柄にもないと、仰言いますと』

『一つ、折入つてお願ひがあるんですよ』

石黒の意外な眞剣な様子に、

『どうぞ、御遠慮なく、仰言つていただきますわ……』

『實は……』

石黒はかう言つて、今日の英二の顔を思出したが、その時、暁子が水菓子を運んできたので、そのまゝ口を噤んでしまつた。邦子は、眼敏く、それを讀取ると、

『暁子、ちよつと、あんた、二階へ行つてゐておくれ、少し、込み入つた御相談があるさうだから』

といつて、暁子に席を外させた、石黒は見送ると、

『いや、小母さんの御明察には驚きましたよ……』

『まあ、何故でございませう』

邦子は、につこり微笑んだが、

『實は、やはり暁子さんの御縁談ですよ』

『あら……』

『單刀直入に申しますが、相手は、牧山ですよ』

『まあ……』

『いかゞでせう、頂けませうか』

石黒は重ねて問ひ返したが、

『石黒さん……』

邦子は、ちよつと居住ひを正した。

『それは、牧山さんの御實家も、御諒解の上でございませうか』

『いや、まだ、そこまでは、行つてゐないので。しかし、先決問題として、こちらの御意向を伺つておかなければ、郷里へも話ができないといふので、今日の使ひは、それだけ伺へばいゝのです。と同時に、友人として是非、牧山の希望を容れていただきたい、これをお願ひに上つた譯なんです』

『よく、わかりました……牧山さんのお志は有難くおうけいたしますわ……』

邦子は、昨日、仲よく出てゆく、英二と暁子の後、姿に、うつとり描いたはかない空想が、かうも手近く事實となつて、暁子の運命に微笑みかけようとは、全く想像もしなかつたことだ。

『それぢや、お話は、御諒解くださるのですね』

石黒が聲を弾ませて言つた。だが、邦子は、この幸福の訪れに、軽々しく取替ることができなかつた。

「申すまでもございません……母親としては、あの娘の爲に、お願ひしてもない結構なお話でございますが、しかし、何分お身分も違ひ過ぎますので、お郷里の方へお話になれば、これは、恐らく出来ない相談かと、私には、危ぶまれますよ……」

かう言つて、相手の希望を避けた邦子の顔は、心持ち蒼ざめてゐた。

「しかし、それは、小母さんの臆測でせう。だから、郷里で承諾さへすれば、こちらは御異存ありませんか」

「え、それは、さうでございますが……」

邦子の聲音は、まだ冴えなかつた。しかし石黒は、あくまで強氣で、

「それでは、序に、お願ひがあります……」

「他に、何ういふことでございませう」

「いや、問題はやはり、今の話ですが、牧山が、郷里へ交渉する材料としまして、暁子さんの寫眞、いつも優等の、あの學校の成績——それとです。こちらの戸籍謄本と御親戚書を、一通づつ戴きたいのですが……」

「戸籍と、親戚書……」

邦子の顔は、さつと狼狽に亂れた。

恐れてゐたのは、それだつた。例へ輝く千百の縁談が来ようと、この當然な要求が伴ふかぎり、暁子よ、お前の幸福は、忽ち晝餅に歸してしまふのだ——邦子は、咄嗟に決心すると、

「折角ですが、このお話は……」

「駄目ですか」

「釣合はぬ御縁でございます……」

邦子の聲が、悲しく顫へた時だ。さつきから、何か氣にかゝる話聲に、そつと襖の影に身を寄せてゐた、暁子はたまらず、二階へ駆け上ると、聲をしのいで、机に泣き崩れた。

「どうして、どうして、お母さまは、牧山さんを……」

初めて母を恨む娘だつた。

だが、自分の父に絡む秘密を、暁子はまだ知らなかつたのだ。

彼女の父親は、一體何者なのだらう？

話は、今から二た昔前に遡る。

大正十三年初秋、或日の午後だ。

「南洲先生、滿蒙は、ちよつくら頂戴出來さうにもごわせんな。はは……」
 わが實業界の重鎮で、支那革命援助の志士、櫻堂江島直隆翁は、瘦軀鶴の如き長身を、哄笑に揺すぶつて、支那服を着た四十前後の客の顔を覗いた。
 黄昏近い弱い日射が、窓外の穂すゝきに戯れ、その向ふの植込みの間から、英國大使館の洋館が隠見してゐた。

豪華な應接間だつた。高雅な唐草模様絨氈の床、程よく配置された卓、椅子、飾棚など、何れも紫檀、黒壇材に古雅な支那風の風景や人物が、見事な象嵌で鏤められ、東洋的な高い古典的な匂ひが仄かな光りに假睡み、青磁の大花瓶に微笑む眞白な芙蓉までが、何か、主人の趣味を物語る風情だつた。

「いや、櫻堂大人、敗軍の將、兵を語らずといふが私は大いに兵を語るつもりです。はつはは……」
 客は第二革命に破れて、李烈鈞、孫逸仙、陳其美、蔣介石、殷如耕等八十餘名の同志とともに日本へ亡命してきた黄興だつた。黄興は孫と並んで支那革命の父といはれる英雄で、角ばつた顔に一種飄逸味のある下向きの八字髭が風格を添へ、沈毅重厚にして、仁俠な性格が、わが西郷南洲翁とそっくりだといふので、同志から「南洲先生」と呼ばれてゐたのだつた。

江島翁は、曩に孫文が「日本が革命を援助してくれれば、新支那の建國は長城以南でよいのか、滿蒙は日本に差上げる」といふ意見を述べてゐたので、今黄興に對して、革命の失敗を輕妙に皮肉つたのであつた。が、黄興は一矢酬いざるべからずといふやうに、ぎろりとした眼に微笑を湛へながら、
 「しかし、大人、日本は、滿蒙は要らないと、頭を振つて御座るではないですか」
 「ほ、ほう……」

江島は、呆けたやうに黄興の顔を眺めた。
 「魚心あれど、水心なし……われわれ革命の同志は、日本の志士には萬腔の謝念を抱いてはゐますが日本の國論を奈何せんやです。寺内朝鮮總督でさへも、革命はいゝが、目標が共和制では困ると言ふ意見ださうですが、そもそも政體などは、その國の國情によつて決すべきもので、末の末ぢやありませんか」

「成程……」
 「大人、革命の成否は、一口に日本の國論の方向に依つて決するのです。日本の國論さへ、革命援助に一致してくれれば……」

黄興の眼はらん／＼と輝いて、
 「孫文が、革命を援助してくれれば、滿蒙は日本に任せるといつたのも、要するに支那統一、東洋永遠の平和確立の熱意の現はれです。日本の國論が、東洋平和確立の大乘的見地に立つて、……つまり支那を強くすることは、日本を強くすることである。日支は東亞の共同體である。相提携して、英、

露、佛の外敵に當るべきであるといふ、この簡單明瞭な眞理に、日本の國論は、何故一致してくれないのでせうか』

『いや、あんたはさすがに南洲ぢや、うむ……』

江島翁は、何か感激の眼眸で、大きく頷いて、じつと黄興の顔を眺めたが、

『黄先生、あんたが武漢革命の時にぢや、漢陽城へ退却した際は涙を流しながら「吾れ今數千の子弟を殺し、何の顔あつて父老に見えんや。吾は漢陽城頭に屍を曝さんのみ」と危機を眼前に、劍を按じて動かうとしなかつたといふ、悲壯な話を思ひ出すと、わしは南洲城山の心事と比べて、いつも感動に堪へんのぢや』

老眼に、きらりと涙をさへ光らせた。

『いや、あの時は萱野長知が、一敗戦に前途を放擲するが如き弱音は何事ぞや——と聲涙共に下る苦諫をしてくれたのだ……』

黄興も感無量の面持だつたが、

『しかし、黄興は、南洲先生のやうに命もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬとまで徹底した恐ろしい英傑ではありませぬ。黄興は命も名もいらぬが、金が欲しい——革命資金が欲しい。はつはは……』

黄興は、悲壯な笑聲を立てたが、

『敗軍の將が兵を語りたのは戦ひに勝つて、資金の缺乏に敗けたと言ふことです……然るに日本に

亡命して、何よりも遺憾に堪へないのは、日本の知識階級の間には支那は分化して、基礎の強固な幾つかの國家を築くべきだといふ議論の多いことです。つまり、支那の各省には、軍閥が對立抗争して日本的要素、英米的要素、露西亞的要素などが互に相剋摩擦してゐる。これでは支那は統一といふよりも、寧ろ分化の方向に向つてゐると、かういふ謬見の多いことです……』

『俗論ぢや』

江島翁は、慨嘆するやうに言つたが、

『黄先生、そこへ行くと、うちの娘はまだ女學校を出たばかりの女の子だが、寺尾さんの意見に熱中して居つて、しきりに支那統一の提提を叫んで居りますぞ。はつはは……』

寺尾とは、當時帝大教授だつた寺尾亨博士のことだつた。博士は黎元洪から法律顧問の依頼を受けると大學教授の地位など弊履の如く捨てたほどの熱心な革命の同情者だつた。

『ほう、邦子さんですか』

黄興は、何かにんまりと、快心の笑みを漏らしたが、

『大人、私はお嬢さんに、お禮を申さなければならんことがあるのですよ』

『邦子にお禮を？……』

江島翁は怪訝に黄興の顔を凝視したが、黄興は何か悪戯らしく、
『大人、私は上海で、お嬢さんが萱野に託された激勵の手紙を受取つたのです』

『ほほう……』

『この手紙については、漢陽城退陣の際に、一場の物語があるんですが、それはお嬢様にお眼にかゝるまで、絶対に秘密にしておきませう。はつはは……』

『いや、あれもやはり、わしの子ですわい——支那革命の志士に同情することは、同時にわが國家に貢献することだ、支那を援助してその治平統一を促し、日支相携へて歐米人の跳梁跋扈を排し、東洋永遠の平和を確立することが究極の目的であらう——といふ寺尾さんの意見に、えらく共鳴してゐますんぢや』

『いや、全くその通りですよ』

黄興は大きく頷いたが、

『時に大人、汪兆銘は、青年志士の中でのえら物ですよ』

と、話題を變へた時、ノツクの音がして、美しい小間使が顔を出した。

『楊大偉さんとおつしやる方がお見えになりました』

『これへお通ししろ』

江島翁は頷いて、

『來ましたよ』

と、黄興を眺めた。

間もなく、小間使に案内されて一人の青年が入つて來た。何處か支那の名優梅蘭芳の面差に似た紅顔の美青年で、長身にダブルプレストを器用に着こなした、すこし華奢すぎる程の、ものやはらかな態度だつた。

青年が静かに歩み寄つた時、黄興が、

『江島先生、これが武漢革命以來、先生のお名前に憧れてゐる楊大偉です……楊君、櫻堂江島直隆先生だよ』

と、紹介した。

『楊大偉君ですか』

江島翁は、微笑を含んだ眼で楊を眺めたが、

『わしは、黄先生の眼識で刺客に選ばれた男だといふから、何んな豪傑張つた青年かと想像してゐたら、これは意外ぢや、わつはは……』

と哄笑した。

『いや、櫻堂大人……』

黄興は、にやりとして、

『由來、支那の英雄には、フェミニストらしい外形が多いですよ。あの攝政暗殺計畫の刺客汪兆銘がやはりそれなんですよ。はつはは……』

『成程、さう言へば何處か汪兆銘に似とるぞ』

『恐縮でございます』

楊大偉は、始めて江島翁の顔を眞面に仰いだが、その蒼空のやうに澄んだ瞳が、射るやうに煌めいた。それは物柔かな包装に秘めた爆弾を覗かせたやうな、この青年に生れながらに備はる不思議な魅力が、力らしかつた。

『うむ……』

江島翁は、感嘆の面持で、惚々と楊青年を凝視めた。

楊大偉——彼こそは、黄興の革命軍が武漢に敗れ、揚子江を下江して上海陸の際、刺客の重任を帯びて黄興の危急を救つた英雄だったのである。

それは——辛亥の初冬、十一月二十八日、武漢革命に敗れた黄興は、萱野以下の同志と、漢口から岳陽丸に便乗して下江した。船中では官軍の刺客を警戒して、嚴重に黄興の身を護衛したが、危険は上海陸にあつた。到着は小雨そぼ降る午後三時頃であつたが、郵船碼頭一帶は、黄興の風采を見ようとする群衆で犇めき合ふ混雑であつた。

『これぢや、いかん』

この群衆の中には、北方の刺客が混入してゐるに違ひないと、さう見てとつた萱野は、今だ、いつそ此方から先手を打つて、殺人騒ぎを起させ、その際に黄興を無事に上陸させよう——かう決意して

黄興に話すと、黄興は、言下に同意して、すぐ、

『楊大偉、お前やれ』

末席に控へてゐた楊青年に軽く眼配せをした。楊大偉は同志中での弱冠でありながら、武漢強襲の際、天晴れ武勳を樹て、同志の舌を巻かした剛勇であつたのである。

ところで誰を狙ふか？——同志は、協議の末、始終その船中で同志の連中から、スパイとして注目されてゐた舉動怪しい一支那人を選ばれた。その支那人は、同志より先に船橋の下り際に立つて、黄興の下船を待つやうに、船上を見上げてゐたが、誰かに話しかけられて邦船會社の船橋を渡りかけた時であつた。

『そら、やるぞ！』

船上の同志は、思はず眼を瞠つた。楊大偉の姿が、今しも怪支那人と肩を並べ、しすり抜けようとした瞬間だつた。

パーン……。

突如一發の銃聲が響き渡つて、怪支那人はばつたり倒れたが、楊大偉は何事もなかつたやうに二、三步過ぎて、悠々振返つたと思ふと今度は風のやうに逃げ出した。

そら殺人だ！ 碼頭一帶は忽ち修羅場と化した。この突發事件に、工部局は驚いて、遍路を嚴重に警戒して群衆を追い拂ひ始めたが、同志はこの騒ぎに乗じて悠々黄興を擁して下船し、勝田旅館へ

投じたのであつた。

『いや、あれだけの大事をやり遂げた奴が、旅館ではいつも同志の隅つこで小さくなつてゐるんだから。可愛い奴ですよ。はつはは』

黄興は、わが子のやうに眼を細めて、楊を顧みた。その時小間使が顔を出して、

『旦那様、食堂の御用意が出来ましてございます』

江島家では、客を饗應する場合、家族揃つて歡待する習慣だつた。

一同が、食堂のドアを通ると、華やかな飾燈の灯を浴びて 杉子夫人を始め、美しく着飾つた令嬢俊子、邦子の姉妹が、淑ましやかに迎へてゐた。

「さあ、どうぞ……」

『奥さん、これが、私の自慢話の楊大偉ですよ』

席についた黄興は、杉子夫人に笑みかけた眼で 傍の楊青年を顧み、

『楊君、奥様だよ。こちらが御令嬢の俊子さんに邦子さん……』

と、紹介した。杉子夫人は、

『お噂は、始終黄先生から伺つてをります』

と楊を見たが、見るから怪訝な表情だつた。

江島翁は、につこり眺めて、

『どうだ、驚いたらう。わしも噂で、關羽張りの豪傑を想像してゐると、かういふ瀟洒たる貴公子だつたよ。はつはは』

『失禮ですけど、梅蘭芳にそっくりですわ』

夫人は親しみ深い微笑を向けた。が、その時、

『でも、お父様……』

と、眞白なダリヤの盛花越しに、處女のやうに羞かんでゐる楊青年の方へ、かう言つて美しい視線を投げたのは、妹の方の邦子だつた。令嬢らしい束髪に結つた 冷たすぎるほど整然とした瓜實顔の、高い氣品に香る姉俊子の古典的美貌に比して、邦子は豊頬の愛嬌に満ちた近代風的美處女で、頭髪も當時流行し始めた七三の女優髷につかね、大きな角ピンを挿した好みにも、新時代の女性らしい潑刺とした魅惑を湛へてゐた。

『木村長門守でも、お芝居に出る忠臣蔵の大石力彌でも、女にも少いやうな美青年、美少年でございましてわよ。楊大偉さんだつて……』

『なるほど、さういへばね。はつはは……』

江島翁は、笑つたが、杉子夫人が、

『まあ、あんたは……』

窘めるやうに邦子を見て、

「黄先生、どうも妹はお轉婆で仕方がございませんの」

「いや、これからの婦人は、それくらゐの方が却つて結構ですよ」

黄興は言つたが、何かほひ出したやうに、

「さうでした、今夜は邦子さんに、お禮を申上げなければ、ならないことがありますよ」

邦子の方へ微笑の眼を向けた。すると、

「邦子、お前萱野さんにお願ひして、黄先生に手紙を差上げたさうぢやないか」

江島翁は、傍から、口を出した。

「まあ、あんたは……」

夫人は、呆れた風で邦子を睨む真似をしたが、黄興が、すぐ、

「いや、奥さん、黄興は、そのお手紙のお蔭で、犬死から救はれたのですよ」

「まあ……」

「革命軍が、漢陽で敗れて、城外の起元寺の總司令部へ辿り着いた時です。私は其處を死場所として覺悟を決めたのです。その時、最も熱烈に隱忍再起を勧めてくれたのは、萱野君でした。私は同君の涙の苦諫に動かされたのですが、同時に萱野君の顔を見て、ふと思ひ出したのは、上海で、同君の手から渡された邦子さんのお手紙の一節です……黄興の小父様、勝敗は兵家の常です。もし今後何んなことがありましても、革命の成就するまでは、犬死なすつてはいけません。韓信は股をくゞつたで

はありませんか……この一節が、稻妻のやうに腦裡に閃めいたのです。さうだ、革命の成就するまでは！ と私は決心を繯へしたのです。邦子さん、有難うございました」

黄は、眞剣に頭を垂れた。邦子の眼にも感動の涙が光つてゐた。

三

黄興と、楊大偉は、その晩から、江島家の客となつた。

黄興は、離れの六疊に陣取り、楊は、その控への四疊半に机を据ゑて、起居することになつた。

黄興は、同志の者や、日本の革命援助者等との往來が忙しらしく、朝出てゆくと、夜も歸らない

ことが多かつたが、楊大偉は、當時寺尾博士が、亡命支那志士に新國家建設の知識を注入するために

福田徳三、中村進午、副島義一、岡田朝太郎、牧野英一、中島力造、吉野作造等各大學教授三十八名

を講師として神田錦町の工科學校内に開いた政治學校に通つて勉強してゐた。

江島家では、客といふよりも、家族の一員といふ親しい氣持で待遇してゐたが、楊は、愛想が無さ

過ぎるくらゐ生眞面目な、無口な青年で、食卓でも、午後のお茶の席に招かれても、普通の世間話な

どには、殆ど興味がないらしく、食べると、すぐさつさと自分の室に引揚げてゆくといふ風だつた。

「楊さんは、ゐなさるか、ゐなさらないか、判らないほど、お静かな方ね」

杉子夫人などは、女だけに、さうした楊の無愛想に、物足りなさうにつぶやくのだつたが、

「いや、あんなのが、いざといふ時には、ものゝ役に立つのだよ。男は、むしろ、あれでなくちやいかん」

江島翁は、夫人を窘めてゐた。

ある日、楊の部屋へ、おやつを持って行つた小間使光子が、

「奥様……」

眼を圓くして、杉子夫人にさゝやいた。

「楊さんのお部屋へまゐりますと、あの方、机の上にお香を焚いて、きちんとその前で、眼をつむつて、坐つていらつしやいますんですの。私が聲をかけましても見向きもなさらないでせう、私何ですか、妙に薄氣味が悪くなりまして……」

「まあ……」

「可嫌ね」

夫人とともに、姉娘の俊子も、呆れたやうに眼を見合せた。邦子は、それを見て、

「でも、この頃亡命の志士達の間には、參禪なさる方も多いさうですから、楊さんも、きつと坐禪をなすつていらつしやいますのよ」

楊のために辯解するやうに言つたが、

「だつて、若い方が、一人でお部屋にこもつて、お香を焚いてゐるなんて、誰にだつて薄氣味が悪い

ぢやないの、ねえ」

俊子は、眉をひそめて、夫人の方へ言つた。

その翌日の夕方だつた。

邦子が、九段坂上のお茶の師匠の家を出て、お濠端の道を、五番町の方へ歩いてゐると背後から、

「お嬢さん……邦子さんぢやありませんか」

突然呼びかけられた。振返つてみると、楊大偉が、近づいてきた。

「あら、楊さん……どちらへお越しになりましたの」

邦子が訊ねると、

「靖國神社へ参拜してきましたよ」

「まあ……」

邦子は、我國の戦死者を祀る靖國神社へ参拜してかへる、中國青年楊の顔を、感動の眼で見上げたのであつた。

「これから、すぐお歸りですの」

「はア」

「お伴いたしますわ。私もお茶のお稽古の歸りですよ」

二人は、肩を並べて歩き出したが、

『あなた、靖國神社は、初めてお参りでございますの』
邦子は、訊ねてみたくなつた。

『いえ、毎日散歩がてら、大抵缺かさず参拜させていたゞきます』
『まあ、嬉しいわ』

邦子は、思はずにつこりしたが、

『僕は、日露戦争に生命を捨ててくださった勇士の方々にお禮を申上げないと、濟まない氣がするんですよ……日露戦争は、大東洋の明日のために、支那を露西亞の魔手から、護つてくださった聖戦ですからね』

日頃無口の楊大偉とは思はれないほど、熱のたぎつた口調だつた。

『まあ……』

邦子は感嘆するやうに楊の顔を見上げたが、すぐ思ひ出して、

『さう仰有れば、ねえ楊さん、あなた此間みつが、おやつを持つて上がった時に、お香を焚いて坐つていらしたさうですが、やはり、日露戦争の勇士のために冥福を祈つてゐてくださいました？』
たづねると、楊は微笑して、

『いや、あれには譯があるのです……』

黄昏の薄明りに光るお濠の水面に眼をうつしたが、

『武漢亂軍の際でした。軍中に日本の志士で、金子新太郎といふ老大尉がいらつしやいました。敵彈を受けて、水田中に墜落し、悲壯な戦死を遂げられたのですが、日頃僕が我を子のやうに可愛がつてゐてくださったのです。日本には宛に香を焚きこめて、死の覺悟をして出陣するといふ床しい風習があり、金子老大尉も、祖國の古武士の面影を偲んでは、香を焚いて心を練つてゐられたのですよ。僕は、金子老大尉の深い心を慕つて、その月命日には、香を焚いて冥福を祈つてゐるのです……』
『まあ、初めてうかがひましたわ』

邦子は 楊の美しい心情に、感動の聲を立てたが、近頃、母や姉が、これほどの楊の心を誤解してゐるのが、何か悲しく、恥かしい氣持さへ覺えずにゐられなかつた。そして、

『ほんとに、あなたは、感心な方でございますわ……』

思はず胸を熱くするのだつた。楊は、ちよつと頬を染めて、

『いや、別に賞めていたゞくほどの、ことでも何でもありませんよ。戦死した同志は、みんな僕達と一身同體の間柄です。そして新東亞建設の尊い捨石になつてくれたのですから、生き残つたわれは……』

楊は、感慨に、聲を詰まらせた。

二人は、いつか五番町の十字路に差しかゝつてゐた。

英國大使館の窓から、明るい灯影がきらめきそめて、櫻の枯葉が、冷たい黄昏の風に、かさこそ、

路上に舞ひ走つてゐた。

ところが、その翌る日の朝であつた。

何うしたことか、楊の姿が、朝の食卓に見えなかつた。

『楊さんは、どうなすつたの？』

夫人が、怪訝に、小間使の光子に訊ねた。

『少しお気分がお悪いさうで、いたゞきたくないように仰有つてゐましたが』

『それはいけないわ。どんなのでせう』

杉子夫人は眉をひそめて、楊の室を訪れた。楊は机に凭れたまま、

『いや、別に大したことはないのです。御心配をかけまして済みません』

と軽く打消したが、

『だつて、眞赧なお顔よ』

いつの間に、夫人について来たのか、傍から邦子が氣遣はしげに、楊の火照つた顔を覗いた。

『それぢや、あの、お醫者さんでもお呼びませうか』

夫人は當惑さうに言つたが、

『いや、ほんの風邪ですから……』

楊大偉は、眞赧に顔を火照らせながらも、大して苦しい様子も見せず、一人で歩いて、夫人に教へ

られ赤坂見附の黄鶴堂病院へ行つた。黄鶴堂病院の院長瀧川辰藏博士は、黄鶴と號し、漢詩人としても知られてゐる支那革命の同情者で、孫文、黄興と親交があり、江島家のかゝりつけの醫師でもあつた。

と、間もなく、瀧川博士から、杉子夫人へ電話がかゝつてきた。

『奥さんですか、楊さんの容態ですが……よく歩いて来られたものとびつくりしてゐるんです』

『まあ、そんなにお悪いのですか』

『四十度近い高熱ですよ。急性肺炎ですな』

『まあ……』

『黄先生は居られますね』

『いゝえ、昨日お出かけになつたきりで……それに江島も旅行中でございますの』

『兎に角、油断の出来ない容態ですよ。入院させて、看護婦もつけましたから、どうぞ……』

『有難うございます。ほんの風邪位のお話だつたものですから……ではこちらからも、直ぐ誰か伺は

せますから、どうぞよろしく』

夫人は、あたふたと電話室を出てきたが、

『楊さんは急性肺炎で、四十度からの高熱なんださうだよ。これだから、うつかり人の世話 出来な

すよ』

迷惑さうに眉をひそめた。

『まあ……』

邦子は、びつくりして母親の顔を眺めたが、

『ね、お母さん、私、様子を見てまゐりませうか』

『でもね……』

夫人は、しばらく思索してゐたが、

『ぢや、ちよつと顔だけ出してすぐお歸りなさい』

邦子は、着替へをすると、人力車で邸を飛び出した。

お壕端の水には朝の陽炎が立ち土堤の芝生は新芽の緑を滲ませて明るく春の光りに輝いてゐた。

邦子は、車に揺られながら、昨日の夕方、この壕端を一緒に歸つた時の、楊のさまんな談話を思

出してゐた。毎日缺かさず靖國神社へ参る彼、そして同志の冥福を祈つて香を焚く楊。身も心も捧げ

盡して祖國の統一と東亞協同の發展に心酔する熱血兒——邦子は今、異國の空に病む、この若い志士を

思ふと、熱く胸がふさがるのでつた。

どうぞ、楊さんの病が無事に癒りますやうに——何かに祈るやうに、眼をつむつた邦子の瞼の底に

は、昨日の楊の熱情に輝く頼母しい顔が、歴史繪に見る美しい若武者のやうに床しく凛々しく泛ぶの

だつた。

四

邦子が黄鶴堂病院に着いた時、瀧川博士は、とうど急患の往診で留守だつた。

二階の病室へ通ると、カーテンに遮られた、ほのかな光線の中に薬品の匂ひが流れて、ベッドの

傍に、じつと患者を見護つてゐた看護婦が、静かに立上つた。

『いかゞでございますの？』

邦子は歩みよりながら、小聲で訊ねた。

『高熱なものでございますから……』

看護婦は、心配さうにベッドを見たが、

『三十分おきぐらゐに、カンフルを打つてゐるんですの』

『まあ……』

邦子は恐ろしいものゝやうに氷嚢を吊した楊の顔を覗き込んだがその頬は高熱のため火のやうに火

照り、唇は忙しい呼吸のために喘ぎながら、楊は昏々と眠つてゐるのだつた。

寂とした朝の病室には、何か切迫した不安が波打つてゐた。

『あら……』

楊の手首を握つて、脈搏を數へてゐた看護婦は、かすかに驚きの叫びを發すると、楊の腕にカンフ

ルを打つた。

その時。昏々と眠つてゐた楊が突然、何か呻きながら、やゝ軀驅を揺すぶつたかと思ふと、ぱつちり大きな眼を見開いて空を凝視めた。そして、

『邦、邦子さん……』

聲は顫へてゐたが、はつきりと言つた。

『まあ、楊さま……』

邦子は思はず立上つて、楊の顔を覗き込んだが、どうしたことか楊の瞳は、何の反應もなく、そのまま消え入るやうに閉じられてしまつた。

『ああ……お氣がつかれたのではなかつたでせうか』

邦子は、不安さうに看護婦の顔を眺めたが、

『いゝえ高熱のために、譫言を仰有つたのでございます』

『譫言……』

『え……』

看護婦は、にっこり微笑をふくんで、思はせぶりな眼を邦子に向けた。

譫言に、自分の名前を——邦子が、はつと胸ををどらせた時だつた。靜かにノックの音がして、濤川博士が顔を出したが、その肩越しに黄興と今一人陸軍中佐の軍服をつけた一人の將校の顔が見えた

それは後の大木將軍——大木徹中佐だつた。

濤川博士が、楊大偉に葡萄酒の注射を済ますまで、一同は別室で待つことになり、邦子も黄興や大木中佐と一緒に、階下の應接室へ降りた。

『昨夜は大木さんのお宅で、御厄介になつたのですが先刻あなたのお母さんからお電話で、びつくりしてやつて來たんですよ。どうもとんだ御世話をかけまして……』

黄興は心から感謝の面持で邦子の顔を眺めた。

『楊は、しかし。幸福な奴ですよ。江島さんの御家族が皆さん大事にしてください。心から我々を理解してください。さるお嬢さんがゐなすつて、かうして病室にまでゐてくださいるので、私までどんなに安心か知れませんよ』

『いゝえ、恐縮でございますわ』

邦子はあかくなつて打消したが、傍から大木中佐が、

『いや、江島さんで居候をした連中は、みんな邦子さんには感謝してゐますよ』

いかにも親しい馴染らしく邦子の方へ笑みかけた。

中佐は辛亥第一革命の直前に、熱海の多賀海岸の爆發騒ぎにも關係した、猛烈な革命の同情者で、黄興や、江島翁とは肝膽相照した仲であつた。自然、江島家へも足繁く出入して、邦子姉妹などから、古くから親しまれてゐたのだつた。

『あら、あんなこと……』

邦子は褒められて赧くなりながら、

『でも大木さんは、いつかも、私におはねさんて綽名をつけてくださつたくせに』

無邪氣に睨んでみせたが、大木申佐は、

『いや、たゞのおはねさんと見てゐたのが、大木の認識不足ですよ。昨夜も黄興先生から、手紙の一件のお話をきいて、黄先生の犬死を防いだのは、大きく言へば、支那一國、もう一つ輪をかけると東洋平和の勳功者といふことになりまますからね。はつはは……』

大木は心から稱讃して、朗らかに笑つた。

そこへ、ドアが開いて、濤川博士が入つてきた。

『楊は、如何でございませうか』

黄興は、心配さうに、博士の顔を仰いだが、

『さあ、まだ／＼油断の出来ない容態ですが、案外元氣が生まれてね』

博士は、ほつとした風で、椅子にかけた。

『あなた方が見えて居られることを話しますと、大變喜んで、安心したやうでしたよ』

『それぢや、あの、お氣付きになつたのでございませうか』

邦子は、昏々と意識を失つて、火のやうに火照つてゐた楊の顔を思出しながら、懸命の眼を瞠つて

博士の顔を凝視めた。

その夜、楊大偉は、注射が効いたのか、割合に平静に過ぎたが、次の日から嘔氣がついて、睡眠がとれなくなり、心臓も衰弱の兆候を呈してきて、濤川博士も眉をひそめる症状を示してきた。

それが――

發病から六日目の夕刻になつて急に體温が七度臺に下降して、漸く食欲が萌してきたのだつた。

『ほう。これは奇蹟的だ』

回診の濤川博士は、聴診器を外しながら、感嘆の聲を擧げたが、その時、ノックの音がして、邦子が顔を出した。邦子はその日も九段の茶の湯の師匠の家を出ると、靖國神社に詣でて、楊の病氣平癒を祈願し、その足で黄鶴堂醫院を訪れたのであつた。

『やあ、いらつしやい』

博士は、快く邦子を迎へると、

『七度臺に下りましてね、もう大丈夫ですよ』

につこり邦子に告げた。

『まあ、ほんとに結構でしたわ、みんな先生のお蔭でございませうわ』

邦子は嬉しさに、楊大偉の顔を覗き込んだ。が、博士は笑ひながら、

『いや、これは、邦子さんの至誠が通じたのですね。楊さんは邦子さんの贈物のメロンから食欲が萌

してきたつて言ひますからな、はつはは……」
 博士は、朗かに笑ひ聲を響かせたが、その時ベッドの上から、

「ほんとに……それに違ひないのです」

と邦子の顔を仰いだ楊の瞳は、感謝の涙に熱く潤んでゐた。

その日から、楊の容態は薄紙を剥ぐやうに、日一日快方に向つた。或日の夕刻、邦子が訪ねると、看護婦は所用で外出でもしたのか、楊が一人で、珍らしく、床の上に起上つて、ぼんやり窓の外を眺めてゐたが、

「毎度、済みません」

楊は、毎日の邦子の見舞を、心から濟まなさに、しかし、待兼ねてゐたやうに迎へた。そして、

いかにも嬉しうな笑顔で、

「今日はね先生から、ベッドを離れて歩いてもよいといふ、お許しが出たんですよ……」

「まあ、結構ですわ」

「僕は先刻から、そのバルコンへ出てみたくて仕方がないんですがね？ 何だか危なつかしくて、出られないでゐたんですよ」

「ちや私の、肩に掴まつていらつしやるといふんですわ」

「いや、あんたが側にさへゐてくだされば、それで安心して、歩けると思ふんですよ」

楊は、おど／＼しながら、ベッドを降りた。いくらか体軀がふらつくらしく、歩きたての幼児を見るやうな、何か覺束ない足どりではよるよるバルコンへ出て欄干に掴まつた。そこから見る黄昏のお濠の水面には、乳色の狭霧が流れて、煌めき初めた電燈の灯に浮いた、弁慶橋から、谷を挟んだ樹々のたゞすまひが、まるで深い山峽を、思はせるやうな趣きだつた。楊は、暫らく物珍らしげに眺めてゐたが、

「僕は、黄先生と同郷の湖南の生れですが、この景色は故郷そっくりですよ。かうしてゐると少年時代の、懐かしい思ひ出が、まざまざと眼前に湧き上つてきますよ……」

楊は懐しさに、黄昏の景色に尙も瞳をこらせて見とれてゐたが、

「さうです。僕は少年時代から非常に讀書好きの子供でしたが、或時でした。友人の一人が、突然君に素晴らしい本を見せてやるが、きつと祕密が守られるか、と言ふのです。そこで僕が誓ひを立てますとその晩、裏の畑の中で、そつと手渡してくれたのが「楊州十日記」といふ書物でした。そして、友達と言ひますには、君、この本は、清朝から、絶版を命ぜられてゐるから、萬一役人に見つかると、打首になるんだと言ふのです。僕はぎよつとしましたが、好奇心で一ばいになりました。

それでそつと寢床の中に隠して置いて、家人が寢静まつた眞夜中に、こつそり、ほの暗い行燈の灯影で、夢中になつて讀み耽つたのです。その中に書いてあることは、暴虐極りない清朝政府が十日間に亘つて漢民族を惨殺した、戦慄すべき地獄繪巻だつたんです。そこには人間の自由も、意志も、虫

けら同然に蹂躪され、亡ぼされて行くのです。僕は読みながら戦慄を禁じ得ないと同時に、横暴な清朝の権力に對して、革命の血が湧き立つたのでした……」

病上りの楊の顔は、次第に美しく紅潮して、
「その結果、僕は祕かに、或る祕密結社に入るやうになつたのです……さういふ譯で、僕の苦勞の種子は「楊州十日記」一冊だつたのです。その一冊から、支那四億の民衆を塗炭の苦しみから救ひ出さなくちやならんと、子供心にも強く決心したのですが、その夢はだん／＼大きくなつて、今では、東亞の平和といふ、大きな夢を見てゐるのです。しかし、前途を眺めると、道はまだ／＼遙かですよ」

楊は、ほつと吐息を吐いたが、
「結構でございますわ。お話承はつてゐますと、女だてらに私までが、何ですか、心が躍るやうですわ」

邦子の瞳も、夢みるやうに輝くのだつた。

「しかし、僕は、今も寝てゐて、不思議な感情に耽つてゐたのですよ」

楊が、何か感慨めいた口調でしみじみと洩らすのだつた。

「僕は革命には命を捧げた人間ですが、病氣なんかで死にたくはなかつたですよ。しかし、苦しい時には、今度こそ駄目かと、観念したこともありましたが、さういふ時には、今にもあなたがいらしてくださるかと思ふと、死んぢや、あなたの御親切に對しても、濟まないやうな氣持がして、不思議に

元氣が出て來たんですよ」

「まあ……」

「しかしあなたに毎日いらしてゐたゞいて、お母様は何とも仰有らなかつたでせうか」

楊は氣遣しげに邦子に訊ねた。

「いゝえ……」

邦子は答へたが、心中でははつとした、どちらかといへば、愛想もお世辭もない楊大偉は、決して母の氣受はよくなかつた。その間を、隠れるやうにして、邦子は毎日お茶の稽古の歸りを、内密で黄鶴堂醫院を訪ねてゐたのだつた。しかし邦子は、

「母だつて、あなたの御病氣をどんなに心配してゐるか知れませんか……」

「さうですか、全く申譯ありません……」

楊は喜ばしさうに、窓を仰いだが、何時の間にか麴町一帯の高臺の木立の上が、淡い月魄に輝きそめてゐた。

「おや月が出ますね」

「あら……」

邦子も窓を仰いだが、二人はしばらく無言だつた。すると、楊が突然――。

「邦子さん……」

熱つぼい聲を弾ませた。
 「あなたは、日支提携の御理想を、あなた自身の實生活の上にまで、ほんたうに取入れるだけのお覺悟がありますか」

「えー？」
 邦子は不意を衝かれて、どきまぎしたが、
 「例へば、眞に愛する男なら、例へ中國人であらうとその愛情を受入れて、結婚なさるだけのお覺悟がございませうか」

燃えるやうな楊の眼だつた。邦子は、はつとして眼を伏せたが、
 「ほんたうにお慕ひ申す方なら……」
 「さうですか……」

楊は、暫く躊躇らふ風だつたが、

「邦子さん、僕と結婚して頂けないでせうか——」

「えッ……」

邦子は、胸がわくわくして、急に言葉が出なかつた。楊は、ほのかな月明りに浮いた邦子の横顔をじつと眺めてゐたが、

「僕は、日支協和を理想として是非日本の婦人と結婚したいと思つてゐましたが、あなたを知つてか

ら、その相手は、あなた以外には、斷然ないと思ふやうになつてきたのです……」

楊は、熱情に聲を顫はせたが、

「しかし、僕はいつ何時、命を落すかも知れない革命兒です。あなたの幸福を考へると……」
 楊の聲は急に濕つて、

「僕と結婚することは、つまり、明日にでも僕と一緒に、民國の爲に死んでくれることなんです」

その時、何故か邦子の眼が、きつと、楊の顔を見つめた。

「私が命を惜むやうな、卑怯な女だと御心配なさいますの」

強く言放つた邦子の顔は、月光の中に、女神の塑像のやうに冴えてゐた。

「いや……」

楊は、相手の意外な熱情に暫くは氣押された形で口籠つてゐたが、邦子は、尙も續けて、

「楊さん、あなたの日頃のお望みは、東亞永遠の平和のために、日支兩國が、しつかり握手することだ——さういふ御意見でございましたわね。それなら何故、私の個人の幸福など、御心配になる必要がございませう。お國のためでございましたら、私、命など、今でも捨ててごらんに入れますわ」

「邦子さん、そ、それぢや……」

楊は、激しい感動に、眼を潤ませて、

「あなたは僕と結婚して、日支……？ いや、極東平和の捨石になつてくださると、仰有るのですか」

「え、私、命も心も、そのためになら……」

「邦、邦子さん……」

楊は、思はず力を罩めて、邦子の手を握りしめた。月が、高臺の森を離れて、ひしと手を把りあつた二人の姿を、さやざやと照らしてゐた。かうした強い信念と、激しい熱情に結ばれた二人の愛情は、その後日増しに進んでいつた。しかし、さうした二人の接近が、江島家の人々の注意に觸れずに済む筈がなかつた。驚いたのは杉子夫人や、姉の俊子だつた。わけて門閥や名聞に神経質な、杉子夫人の如きは、朝晩喧しく邦子を窘める一方――。

「あなた、早く楊さんを、何處かへ出して頂きます。邦子のためになりません……」

かういつて江島翁を突つゝのつた。これを見た二人が飛び込んだ先は、大木中佐の許だつた。中佐は、二人の純情を認め、よく互ひの覺悟を慥めた上、早速、日支提携の大御所として、隠然日本の政界に勢力を占めてゐる遠海讓翁と相談の結果、犬養木堂氏をも一枚味方に加へ、黄興と共に先づ江島氏を説いて二人の結婚を承諾させ更に夫人を説き落すまでには並々ならぬ骨折りが重ねられた。これには夫人も、理論に負けて、「よろしうございます。それでは娘一人を亡きものにしたつもりで、皆様のお言葉に従ひませう。そのかはり、邦子は今後、江島への出入を、絶対に禁じます。よろしうございませうか」

涙ぐんで言つたのであつた。この條件を承諾の上翌春三月、楊大偉と邦子の國際結婚は、表面の仲人犬養氏邸奥座敷で、世を忍ぶ形ばかりの式が舉行されたのであつた。

そして、二人は、青山にさゝやかな、家庭を持つたが、そこへは、殆んど毎日のやうに、亡命中の戴天仇、張群、張繼、岑春煊など中國の若い志士や、日本の有志、支那留學生などが押かけて、日支往來の梁山伯となつた。

邦子は、良人や、革命の志士達の信頼と敬愛を一身に集めて、彼等の若々しい理想の中に、幸福な日を續けてゐた。

五

それから三月――。世は爽かな新緑の五月になつた。何うした譯か毎日のやうに見えてゐた亡命の同志が、その頃から急に一人、二人と支那へ歸つていつて楊家の賑ひも次第と寂れてきた。と、ある日の午後、黄興が訪れて、楊と二階の一室で、何かしきりに密談をしてゐたが、黄が歸つていつた後で、

「邦さん……」
楊が、改まつた調子で邦子に呼びかけた。

「……………」

邦子も、今日の密談が、何か事態の容易でないことを感づいてゐたので、はつと楊を顧みだが、

「實はね……」

楊は腫を輝かせて、

「そろ／＼第三革命の機運が熟してきたやうです……同志は、先づ上海攻略の手がかりとして、黄浦江の軍艦乗つ取りを計畫してゐるんです。上海を占領すれば、孫文先生を迎へて、天下に號令する方針で、上海では陳其美が、ひそかに、或る畫策をしてゐるといふんですよ」

「まあ……」

邦子も腫を燃したが、

「それぢや、その時は、私も上海へ連れていつてくださいますか？」

「勿論、さうしてもらはなければ……」

「まあ、嬉しい……」

邦子は、いよ／＼望みの日の近づいたことを思つて、思はず楊の手を握つた。ところが、それから五、六日経つた或日の夕方だ。

「あなた、お手紙よ」

邦子は、赤い封の入つた支那封筒を持つて楊の書齋に入つていつたが、楊は、封を切つて眼を通すと、

「えッ……」

低い聲ではあつたが、激しく叫ぶと、何故かその手をわな／＼顫はせた。

「まあ、何うかなさいましたの？」

邦子は驚いて訊ねたが、

「いや、何でもありませんよ……」

楊は、すぐ、いつもの微笑に返つて、

「武漢で戦死したと思込んでゐた同志が、助かつて北京にゐるんですよ」

何氣なく笑つてみせただけだつた。

だが、その夜、楊大偉は、黄興を訪ねると言つて、ぶらりと家を出たきり、翌日も、翌々日も歸つてこなかつた。勿論、黄興を訪ねた形跡もなく、同志の人達は八方手を盡して探してくれたが、楊の行方は判らなかつた。すると、三日目の朝、一通の電報が届いた。

クニコヨ ワシハギリトニンジヨウノタメニシス スマナイガ アキラメテ コウフクニクラシテクレ、ヨウタイキ

「まあ……」

邦子は顔を掩うて泣き崩れた。

邦子が、懷姙に氣附いたのは、それから間もなくだつた。その時分から、革命軍は、支那各地に蜂

起して、物情騒然たる有様だったが、楊大偉の消息は、杳として知れなかつた。
 邦子は、さうした不幸の中に、翌春二月、月満ちて女兒を産んだ。暉子と名づけたのは、日本と中華民国——即ち「日華」の綜合を記念して楊大偉を偲ぶ女心からだつた。
 ちやうど、その頃江島家では、長らく英京倫敦に留學中の、長男直彦が歸朝し、八方から縁談も持上つてゐた際なので、一としほ邦子と楊大偉の關係を秘密に附し、暉子の出生を闇から闇に葬るため暉子は、祖父直隆夫妻の子として入籍し、そのまゝ里子に出してしまつた。それから間もなく、邦子には新しい結婚問題が起つてきたのである。が、

「楊は、何處かに、きつと生きてゐる！」

邦子はわれとわが心に誓つて、あくまで縁談を拒み通し、或晩家を出てしまつた。

しかし、令嬢育ちの邦子にとつて、生活の道は容易でなかつた。彼女は、瀧川博士に乞うて、看護婦で立たうと決心し、看護婦學校に入つて講習の後、やつと獨立ができた時、暉子を里親の手から引取つた。折も折、實父直隆は急逝し、邦子は、いよゝ實家江島家から、名實共に絶交の状態で、子育てと生計のイバラの道を、二十年近く撓みもなく、辿りつゞけたのであつた。

娘は知らず

ねつとりと、春の夜らしく霑んだ夜氣を透して、何か甘さを含んで聞えてゐた、遠くのラヂオの演藝放送も、いつの間にか消え絶えてゐると思ふと、公園裏の閑靜地帯は、急にひっそり静まり返つてゐた。

牧山英二は、疊に腹這ひになつて、退屈しのぎに讀耽つてゐた小説から、また思出したやうに卓上の置時計を仰いだ。

「おや、もう十一時だ」

焦立たしげに眉をよせると、

「馬鹿に待たせやがるなア……」

呟きながら、むつくり半身を起した。

彼は、今日の晝間、銀座のオリンピックで、自分の意中を打明けて、暉子への求婚交渉に行つてもらつた石黒の返事を、かうして、もうさつきから、待侘びてゐたのだつた。

「いやに交渉が長びくのは、餘りいゝ辻占ぢやないな……」

英二は、顔を曇らせたが、
 『しかし、澁谷の大山からこゝまでは、電車で一時間はたつぷりかゝるから、九時に向ふを出たとしても、こゝへ着くのは十時にはなる譯だが……あれほど打明けて熱情を吐露しておいたのだから、いくら氣の利かない石黒でも、結果が良ければ、あの近所から公衆電話の一つもかけて、先づ安心させてくれさうなものだが……』

英二は、石黒の交渉の結果に、次第と不安を覚えそめてきた。
 『嘩子さんは勿論、小母さんだつて、あれほど僕を信頼してゐるのだから、問題はなからうと樂觀してゐたのは僕の己惚れだつたらうか……だが、それにしても、この縁談を断るくらゐなら、昨日鎌倉へ行く時だつて、年頃の娘を一人きり若い僕と一緒に出す譯がない。きつと石黒の奴、話の進行に、いゝ氣になつて御輿を据ゑてゐるのかも知れない……』

『居るか……』

待兼ねた石黒の太い低音が、ドアの向ふで響いた。

『お入り……』

英二は、飛立つやうに入口へ駆け寄ると、

石黒は、につこりしてドアの外から顔を出した。

『何うだつた？』

英二は、相手の晴れない微笑に、何か直覺的な危惧の念を覺えて、石黒が座につくのも待切れないやうに訊ねた。石黒は、がっかりしたやうに、胡坐をかきながら、簡単に、

『失敗だつたよ……』

『えッ？……』

『俺も全力を擧げて、交渉に及んだが、何うもね』

『僕ちや、駄目だといふのかね』

英二は、今まで夢に描いてゐた幸福を一氣に奪はれたやうに、聲を顛はせた。石黒は勉るやうに、

『いや、さうぢやないんだが……』

『ぢや、何故駄目なんだ』

『釣り合はぬ縁だといふんだよ』

『何がつりあはないんだね』

『九州の炭礦王牧山蓮藏翁の愛甥と、父も亡く一看護婦長の娘とは、釣り合はぬ縁だから諦めてくれといふのだよ』

『しかし、そんなことは、客觀的な境遇の差に過ぎないぢやないか』

『その境遇の差が、ひいてはこの縁談の進行に不安を伴ひ萬一成立してみても、お互の將來に不安を

残すといふんだね』
『馬鹿な……そんなことは、二人の愛情で、どうにでもなる問題ぢやないか。君は僕のこの氣持はずかり話してくれたんだね』

英二は、寧ろ、石黒を詰るやうに追究した。

『勿論、それは、繰返し訴へたよ……暁子さんに非ずんば、共に苦樂を誓ふ人なしとまで、君が熱情を捧げつくしてゐることも、その爲にはどんな周囲の障害も、必ず突破してみせるといふ決心も、また、牧山翁その人も、君の結婚にまで不用な容喙をするやうな判らない人物でないことも、君から聞いたことは一切合切、口を酸くして縷々説いたさ。いや、そればかりでない。俺は自分でおまけまでつけて、もしこの際、それほど思ふ暁子さんと結婚ができなければ何しろ牧山はあんな男ですからどんなに落膽して、人生を悲觀するか知れません。漸く學園を巢立ちして、社會へ一步をスタートしようとする大事な際に、もしそんなことにでもなれば、それこそ牧山一個の前途は暗澹として思ひ遣られる譯ですから、その點も十分御憫察の上……』

『御憫察の上か……』

英二は苦笑して、石黒の眞面目な顔を見た。

『さうさ、そこまで、俺は言葉を極めて、君の爲に頑張つたんだが結局駄目さ……膳本も、親戚書もよこさうとも言はないんだよ』

『ぢや、問題にもしてくれないといふ譯だな』

英二は、吐き出すやうに言つたが、しかしそれだけでは、まだ心から諦め切る氣にはなれなかつた。身分の相違——たゞこれだけの簡単な理由で、何故これほど今日まで親しみ、理解し合つてゐた苦の自分と暁子の結婚を、そこまで危ぶまなければならぬのだらうか？ 英二は、早く良人に別れ、女手一つで二十年近く、愛兒を守つて闘ひ續けてきた邦子の過去の險阻な道を考へ、さうした苦勞に叩かれ抜いた女の、警戒心の深さといふやうなことも顧みてはみたが、しかし、それにしても、こちらの愛情が、どこまで眞實の深さに根ざすものか、一應膳本ぐらゐは示して、成行を眺めてくれてもよささうなものだのに——さう考へると、日頃の邦子にも似合はず、餘りにも自分に對して、用心深く水臭く、冷酷すぎる話のやうにも思はれ、

『それは牧山蓮藏は、九州の炭礦王かも知れないさ。しかし、僕はその甥に過ぎないぢやないか。殊に、それつぼちな境遇の差で、女房に思上つた態度をとるやうな、そんな男に僕が見えるのだらうか』

英二は味氣なさを訴へるやうに石黒の顔を恨めしげに凝視めて言つた。

『その點も、勿論、繰返して言つたが、向ふぢや、本人はそれにしても、周圍といふものがございませから——さう言つて、立上らうともしてくれないんだよ』
『さうか……』

英二は口を噤んだが、ただそれだけの理由の下に、暁子母娘に、かうもあつさり見切をつけられた自分だと思ふと、何か堪まらない氣持だつた。石黒は見兼ねた風で、

「何なら、俺が皮切をしてきたんだから、君自身出向いて、膝詰談判を試みたら何うだ」

「さうだな……僕も、それだけの理由ぢや引込めないよ」

「さうしたまへ……僕も病院の叔父を説いて、搦手からどしどし工作するから」

石黒は、英二を激勵して間もなく歸つていつた。

二

その翌日、英二は、肚を決めて澁谷大山の邦子の家を訪ねた。

「ごめんください」

玄關の格子を開くと、すぐ、境の襖が開いて、

「あら……」

ぱつと奥から射しこむ電燈の逆光線に、暁子の表情が、ほのかに亂れた。

「お母さんいらつしやる？」

「まだ、歸つてまゐりませんのよ」

暁子は答へたが、昨夜訪ねてきた石黒と邦子の對談を殘らず洩れ聞いて、がっかりしてゐた彼女は

追つかけての英二の來訪を見ると、消えた光りの、再び燃え立つやうな新たな希望を身に感じて、何か絶りつきたいやうな、熱情に心が踊るのだつた。

「でも、もうおつづけ、歸つてみえますわ。あの、お上りになつて、お待ち下さいましたら……？」

暁子は、彈む胸を押さへて、何氣ない微笑で英二に笑みかけた。

「ぢや、暫く待たせてもらひませう」

「どうぞ……」

英二は暁子に導かれて、奥の座敷に坐を占めた。暁子は、お茶などを運んでゐたが、何か湧きたつ感情をこらへてゐるやうな、英二の、いつにない押黙つた様子を見ると、暁子も、これまでのやうに氣輕にお喋りもできず、自分でもいぢらしいほど堅くなつてしまつた。そして、ものの十秒と、二人ぎりの對坐に堪へかねるやうな、落着かぬ心の動搖に、おどろ／＼してゐると、

「鎌倉は、よかつたですね……」

英二も、話題に困つた風で、突然、こんなことを言ひかけた。

「とても愉快でしたわ……」

暁子も、につこりと顔を上げた。英二は、暁子の耻らひに火照つた頬を見ると、思切つて、

「昨夜、石黒が來たでせう……」

さつきから、切り出さうと思ひながら、切出し兼ねてゐた重點に、話題を急轉させていつた。

「はア、お久し振りに……」

暁子も、はつとした風で聲を弾ませたが、

「何か母と一ときりお話をなすつていらつしやいましたけど」

ちらと英二の顔を仰くと、すぐ眩しげに眼を伏せてしまった。英二は、何か意味を罩めた暁子の様子に力を得て、

「その用談を、あなたはお聞きになりましたか」

「あの、いゝえ……」

暁子は狼狽しながらも、かう言つて打消す外はなかつた。

「實は、僕、今夜もそのことでやつてきたんですよ……」

英二は、邦子が留守中と知つた瞬間から、この機會に自分の決心を、直接暁子にも打明けて、ぢかに、本人の決心を擲んでおかうと考へたのであつた。

「僕の氣持は、一昨日鎌倉で、メダルを差上げる時に、ちよつと申上げておいたやうに、僕には、あなたを差置いて、僕の生涯を托する女性には、他に一人もありません……」

「……………」

「ところがかうして學校も出まして一本立になるやうになりますと、急におせつかいな人達から、縁談などを持込まれて困つてゐるんです。しかし僕の心は決まつてゐますから、この際、一日も早く小母

さんに、この心を打明けて、あなたとの婚約を承諾していただくやうに、實は昨日石黒君を介してこちらの小母さんにお願ひしたのですよ……ところが、結果は駄目なのです」

「まあ……」

「それで、今日は、僕が直接、小母さんにお願ひするつもりでやつてきたのです。暁子さん御自身の氣持は何うでせう、僕の求婚を快くお受けくださるでせうか」

英二は、熱い瞳を凝らして、じつと暁子を見守つた。

「……………」

しかし、暁子は俯向いたきりだつた。胸一ぱいに湧き立つ歡びが、甘い悲しみと一つになつて、深い吐息とともに洩れ、ふくよかな圓んだ可愛い肩のあたり、切なげな波を一つ描いた。それが、まだ十九の處女には、せい一ぱいの返答といへばいへるだらう。

「どうでせう……あなたさへ僕の愛情を容れてくだされば、僕はどんなに勇氣を得て、今夜の交渉に當れるか知れないのです……お母さんの拒絶の原因が、不釣合の縁談だと仰有るんださうですが、何がそれほど不釣合か、僕には全然解し兼ねるのです。よしました、多少境遇の上に、等差があるにしても、それは二人の愛情次第で、どうにも解決のつくことだと思ふのです。どんな釣合つた縁談でも相方に愛情がなければ不幸な結果に陥るし、多少境遇の差違はあつても、深い愛情に結ばれた結婚なら、何も心配することはない筈です……ましてあなたは僕にとつて、何物にもかかけがへのない只一

人の女性です。あなたの愛情さへえられれば僕はどんな周囲と戦つても、必ず幸福な勝利を掴んでみせますよ。幸ひ九州の伯父といふ人間も、長い苦勞で叩き上げた人物ですから、さういふ判らないことを云ふ人でもありませんし、僕は、外に親も兄弟もない、實に氣樂な身分なんです。たゞ問題は、あなたの氣持です。僕のこの熱情を、快くお受けくださるか、どうか、僕の將來の幸福は、たゞ、この一點にかゝつてゐると言へるのです……ねえ、何うでせう、ほんたうの氣持を、お答へ願ひたいのです……」

英二の聲は熱情に弾んで、いくらかもしかしげな顫へさへ帯びてゐた。

「……………」

暁子は、男の溢れるやうな熱情に、耳の根元まで赤くして俯向いてゐた。英二の瞳は焦立しく燃えて、

「どうしました？ 暁子さん、あなたも僕の求婚に、當惑なすつていらつしやるのですか」

「あら……………」

暁子は、はつとして顔を上げたが、

「私……私、勿體ないくらゐに……………」

やつと、これだけ言ふと、急に泣けさうになつた。その手を、ぎゅつと英二が握りしめた。「それぢや、僕の心を受けてくださるのですか」

「……………」

暁子は黙つて頷いた。物を言はうとすると涙が出さうになるのだつた。

「有難う、暁子さん、そのことさへ承はれば、僕は今夜、どんなに頑張つても、お母さんを動かしてみせますよ。いゝですか」

「お願ひしますわ……………」

暁子は、聞こえかねるやうな、低い聲で言つたが、すぐ、

「でも……母が、承知してくださらなかつたら……………」

呟くやうにさゝやいた。

「私、ほんとは、昨夜も石黒さんのお話、みんな蔭で聞きましたの」

「えッ……………」

「私、母のお返事を聞いて、泣いてゐましたわ……………」

暁子が、取絶るやうに訴へて、思はず啜り上げた時だつた。

「只今……………」

玄關で邦子の聲がして、ガラリと格子戸の開く音がした。

「あら……」

暁子は、遽て涙を拭くと、玄關へ駆け出していった。

「お客さま？」

「牧山さんですの。さつきからお待ちしてらつしやいますのよ」

母子の聲が玄關で聞えて、すぐ座敷へ、邦子の顔が見えた。

「おや、いらつしやいませ」

「留守中に出て、お邪魔してゐます」

牧山は、いくらか堅くなりながら、ちらと邦子の顔色に、探るやうな眼を向けたが、邦子の表情はいつもと變らない親しみの微笑に美しく綻びてゐた。そして、

「先達つては、暁子がいる〜お世話さまになりました」

「いゝえ、一向お構ひもできませんで」

邦子と英二の挨拶が終ると、暁子は殊更、席を外して、別席へ退がつた。邦子と二人きりになつた

英二は、弾み立つ心を制しながら、

「昨夜は、石黒君が上りまして……」

邦子を見た。

「はア、折角、御親切に仰有つていたゞきながら、勝手なことばかり申上げまして……」

邦子は、たつた一言で巧に英二の鋭鋒を防ぎ、

「どうぞ、悪しからず思召してくださいまして」

につこり如才ない微笑で包んでしまつた。英二は、やはり出鼻を挫かれた形で、暫くは、二の矢の繼穂に惑つてゐたが、やつと思切つて、

「實は、その件で、誠に無様ですが、改めて今一度、御再考を願ひに上つた譯ですが……」

「すみません。あんな不束な娘のことをそんなにまで仰有つていたゞきまして、ほんとに勿體ないくらゐに存じますけれど、昨夜も石黒さんに申上げましたやうな譯で、牧山さんなどは、何んな立派なお嬢様でも、お貰ひになれるお身分なんですから、暁子なんかをお望みにならないでも、もつと廣くいくらでも、適当なお方がお選びになれるぢやございませんか」

「ところが、選び選んだ上で、僕は暁子さんを望んでゐるんです……その氣持は、石黒君からも、充分申傳へたはずでございますから、是非とも枉げて僕の希望を、容れていたゞきたいのです」

英二は、眞赧な顔をしながら、吃り〜一生懸命で訴へた。邦子は青年らしい熱情と、誠意に溢れた英二の様子を、感謝を罩めた眼で眺めたが、

「御厚意には、お禮の言葉もございませませんが、何しろ、餘りに釣り合ひませぬ御縁ですし……」

「小母さん、僕には、それが肯けないんですよ」

英二は、すぐに遮つて、石黒や暁子にも繰返して述べたやうに、邦子の不釣合説をそこでも懸命に

辯解した。そして、

「そのことなら、大丈夫ですからほんの話の材料に、膽本と御親戚書だけでもいたゞけば、伯父の方は僕の熱意で、必ず動かしてみせますから、どうぞ小母さんのやうに、最初から、さういふ客觀的な想像だけで、僕の希望を拒絶しないで頂きたいのです。いかゞでせう」

「折角でございますけど……」

邦子の瞳は、われ知らずうるむのだつた。この幸福を掴めない娘の秘密——邦子は甚しく弾む息を呑んだが、

「小母さん……」

これも打挫かれたやうに顔を歪めてゐた英二が、突然、涙ぐんで強く呼びかけた。

「僕は、どうも小母さんの仰有る、拒絶の理由が呑み込めないのです。何か他にもつと深い、理由があるんぢやありませんか」

「まあ……」

邦子は、自分の心の底を、何かで刺されたやうに、はつとしたが英二は、それを一と目で見て、

「さうです。きつと小母さんはそれが言へないで、釣り合はぬ縁などと、無理な理由をくつ付けていらつしやるんです……それならそれと遠慮なさらないで、僕にはつきり聞かせていたゞきたいのです。例へば、僕といふ人間が、曄子さんの良人として不満があるなら、何ういふ點がいけないのか、

それを聞かせていたゞけば、改めるところは改めもしますし、誤解の點は釋明もして、御安心をなさるやうにしますから、遠慮のないところを聞かせてくれませんか」

「滅相もないことを……」

邦子は、遠て遮つて、

「不満どころの話ぢやございませぬ。何度も申上げるやうに、私どもでは勿體ないくらゐに……」

「それぢや、何も、最初から、僅かな境遇の差ぐらゐで、これほどの僕の熱望を、お拒みなさることはないぢやありませんか。それが事實だとすれば、それは小母さんの杞憂に過ぎませんよ……ね小母さん、とにかく僕の周囲のことは、僕を信じて任せてください。そして周囲が同意すれば、曄子さんは、僕にいたゞかせてください。決して僕はあの人の將來を、不幸にするやうなことはしませんから誓ひます小母さん、ほんたうですよ」

英二の言葉は一句一句、曄子に對する熱情に燃えて、ひし／＼邦子の胸に迫つてくる。だが、曄子の父の秘密を知つたら？——邦子は、やはり安心がでなかつた。英二本人は兎に角としても、地方一流大財閥である牧山一門が、異國の男を父とする曄子の身分を認めてくれるだらうか？ いや、英二本人にしてさへが、長い月日の間にはさうした差別の心から、一門一族の交際にも、妻の身分を卑下するやうな、悲しい結果に陥りはすまいか——現にこの二十年、そのためにこそ、血族兄妹にまで疎んぜられて、人の世の表裏を味ひつくした邦子は、矢張り危まれずにおられなかつた。邦子にとつ

て英二の厚意は、むしろ、大きな苦しみだつた。

「ね、小母さん——それぢや、とにかく僕の方から、郷里へ言つてやりますから、向ふで調査して、いゝといへば、それで御承諾願へますね」

しかし、先方で手を廻して調べて、この秘密が、知れずに済むだらうか。まして曄子は、戸籍上、亡父直隆の子となつてゐるのだ。邦子は、英二のひたむきな愛情に追ひ詰められて、もはや返答の言葉もなくつたが、英二は、そんな邦子の苦惱は、想像する由もない。

「ねえ、いゝでせう小母さん、さうすれば」

英二が重ねて念を押した時、

「牧山さん、それでは一言、申上げておきたいことがございます」

邦子の聲は顫へてゐた。そして一だんと聲を落して、

「實は、あの娘は、私の娘ぢやございませんの」

「えッ……そ、それは、ほんたうですか」

英二も、びつくりして聲を立てた。

「ですから、あの娘の縁談となりますと、私一人の自由にはならないのです」

「それぢや、曄子さんの一身上の御用談は、どなたにお話すればいゝのです」

英二は、ますます真剣に追究してきた。

「ところが、あの娘の父は亡くなつて、相談する相手がありませんのよ」

「ぢや、やつぱり、小母さんが責任者ぢやありませんか」

「その私が、何んなに同意しようとしても、それを邪魔する人がありましたら、何うなさいます」

邦子も、真顔で英二を見た。

「何うも、小母さんのお話は、わかりませんね。何だか、僕、調戲はれてゐるやうで……」

英二の眼は、焦立たしげに、また恨めしげに邦子の方へ燃えた。しかし、邦子の言葉には、決して偽りはないのであつた。曄子は、楊大偉と邦子の仲に生れながら、戸籍の面はさうなつてゐなかつた。外聞と傳統を、何よりも尊しとする名門江島家では、異國の青年と邦子の關係を極度に世間へ耻ぢたばかりでなく、邦子の戸籍に私生子の名を連ねることも、これまた忍びない家門の汚れとして、曄子を祖父江島直隆の末子として、偽りの屈を出してあつたことは、前にも述べた通りである。邦子は、こゝまで熱してゐる英二なら、黙つてゐても役場へ頼んで、戸籍の謄本を取るに違ひないことを覺悟して、こゝまで打明けたのである。

「決して、冗談や、調戲ひごとではございません。あなたのやうな御名門と御縁談が起きましたら、きつと、さうした邪魔の入ることは、見え透いてゐるのでございます……」

邦子は、豫て恐れてゐたことを、そのまゝ言へないで、迂回して言つたに過ぎなかつた。曄子の戸籍が、さうなつてゐる以上、たとへ直隆は亡くなつてゐても、結婚となれば一應は、江島の本家へも

應へなければならぬし、それも相手が九州の炭礦王、牧山家ほどの名門でなかつたなら、向ふも深く素性を究めないだらうし、本家でも「勝手にするがよい」で、話は氣樂に進められるだらうが、相手が相手なら、先方も調査するだらうし、殊に意地悪い本家の兄や、室井の姉などが、黙つて承知してくれる譯がなく、必ず秘密の暴露に備へて、責任逃れの方法を講ずるに違ひない。それには縁談に不服をとなへて成立を妨げるか、或はもつと意地悪く、楊と邦子の秘密を仄めかさないと限らない。さうなれば、英二がいくら頑張つても、周囲の許す筈がない。――それを見抜いておればこそ、邦子は、これほどの娘の幸運を、心で泣きながら、拒まなければならぬのだ。しかし、英二には、それほどの邦子の涙も、解する術がなかつた。

『それなら、その邪魔する人を教へてください。僕、その人に談判します……』

『あなたがお話しなすつて、動くやうな人達でしたら、私、こんなに苦しみません』

邦子は、裂けさうな胸を押へて、

『ですから、もうこのことは、これ以上、どうか仰有らないで……』

『しかし、それは、嘩子さんにとつて、何ういふ關係の人達です。それぐらゐのことは、仰有つてくだされども……』

英二が尙も追究するのを、邦子は、遮つて、

『どうぞ、それ以上は、お訊きくださいませんやうに……』

邦子の眼にキラリと浮んだ涙の潤みを、英二は見ると、はつとして口を噤んでしまった。

四

その夜、英二はそのまゝ歸つたが、何か邦子の言ひ難さうな、嘩子の一身上の謎にひかれて、翌日は、江島邦子の戸籍謄本を取りに、一人で澁谷の區役所を訪ねた。

『謄本をいたゞきたいんですが……』

英二は、かう言つて、代書人に書かした謄本下附願ひを戸籍係の窓口へ出した。

『暫くお待ち下さい……』

若い係員の言葉に、英二は窓口を離れて、腰掛けにかけた。係員は、間もなく給仕を呼んで、何か命じると、暫くして給仕は分厚い戸籍簿を二、三冊、身中で抱へるやうにして運んできた。

英二はバツトに火をつけて、窓越しに、原本を繰つてゐる係員の横顔を眺めてゐたが、誰が見ても實の娘としか思へない嘩子を「實は私の子ぢやないのです」と、避け廻る邦子の奇怪な言葉を思ひ出して、何か戸籍の影に潜んでゐるらしい母子の上の深い謎に、軽い好奇と不安の胸を躍らせてゐた。

と、間もなく、原本を寫し終つた係員が、ボン／＼と澤山な印を捺して、

『牧山さん……』

と、英二を呼んだ。

「は……」
英二は、すぐに立ち上つて窓口へ近づいたが手数料と引換へに、一葉の謄本を受取つた。が、歩きながら展いて見た瞬間、

「あッ……」
びつくりしたやうに眼を瞠つた。一枚の謄本には邦子一人の名が記載された外、暉子の名も、前に死んだといふ良人の名も見えないではないか。

「ちや、やつぱり暉子さんは、他人なのだらうか……」

英二は、なほも怪訝な眼を瞠つて謄本の面に眼をさらしてゐたが、再び、

「おや……」

重ねて、驚きの聲を發したのである。

東京市麴町區二丁目××番地亡江島直隆二女、

思ひもかけない、傍書の細字に、英二の視線が吸ひよせられてゐた。

「江島直隆！ あの、少年時代によく聞いた實業出の大政客ではないか……」

青年英二の記憶にも、邦子の實父江島翁の名は、今なほ華やかな印象を残してゐた。

「ちや、あの人は江島さんの娘さんだつたのか……それでは、あの暉子さんは？」

英二は、はたと深い疑問に直面したが、

「しかし、暉子さんも、學校の通信簿などをみると、たしかに江島暉子だつた。それでは、直隆翁の何に當るのだらう……」

さう思ふと、名門江島家の戸籍に連なる暉子の身分が、何故自分に釣合はぬ縁であらう……英二は怪訝に思ふと同時に、その江島家の嫡出子である邦子が、幼い頃から暉子を抱いて、激しい看護婦の劇務にたづさはりながら、女手一つに社會の風波と闘つてきた、険しい過去の經歷に、不審を覺えずにゐられなかつた。

「これは大きな謎だ……江島家といへば、たしかに今でも盛大に、現存してゐる筈だつたが……」
何か心中思ひあたる江島家の記憶を辿つてゐたが、途端に――。

「あッ、さうだつた……康子さんのお母さんの實家が、やはり江島家だつた筈だ」
思はず眉をひそめたのである。

「とにかく、麴町の區役所へ行つて、江島の本家の謄本を取つてみよう」

英二は、さうと決めると、すぐその足で、澁谷の驛まで引返して忠犬ハチ公の銅像の傍に公衆電話のボックスがあつたので、英二はそこで備附の電話帳を繰つて、區役所の所在を調べた。そして、ちやどその時發車しかけてゐた電車を見て、飛乗つた。

「どうも、わからない……」

英二は、ぼんやり車體の動搖にまかせながら、暉子と邦子の不思議な關係を考へつゞけた。が、

「どちらにしても、本家の謄本を見ればわかるだらう」
 英二は、妙に騒ぎ立てるやうな異様なスリルを感ずると同時に、またかうして彼女等に無断で、こつそり戸籍まで調べてゐる自分を顧みると、何か彼女等を裏切つて探つてはならない二人の秘密を曝らしてゐるやうな濟まない氣持にもならずにはゐられなかつた。

「いづれにしても……何か秘密がある……」

英二は、昨夜も、最後になつて暁子は自分の子供でない、と打明けた時の、邦子の、いつにない亂れた表情を思ひ浮べると次々と、さまざまな想像が湧いて、何かさうした謎の裏面の一種の不安と、躊躇をさへ覚えるのであつた。

「それにしても、あの貞淑な婦人に、口外できないやうな、秘密があらうとは……」

英二は、さう考へたが、立派な生家と打絶えて自分の戸籍にもない娘と、母子のやうに暮してゐる邦子の過去が通常でないことはどうしても否む譯には行かなかつた。

「あら、あんなに櫻が……！」

ふと、乗客達の囁きに、はつと我に返つて窓外を振り返ると、電車は、今、赤坂見付を出たところでそれから三宅坂に向ふ兩側は、立ち並んだ櫻並木がもう七分咲きの花を連ねて、午近い春の日射の中に、花のトンネルのやうに續いてゐた。

「ほう、これは……」

英二も、その美しさに、暫らくうつとり見惚れてゐたが、

「さうだ……花の美しさに、理窟はないのだ……」

こんな美しい花を咲かせる櫻の幹の中には、何んな秘密が隠れてゐるだらうと幹を切つて中味を捜した愚かな男の譬へ話を英二は、ふと思ひ出した。

「さうだ、たとへ暁子さんが謎の娘だらうと、あゝして育てゝきた以上、小母さんの意見で何うでもなる筈だ。要するにこちらの熱情が問題で、暁子さんさへ美しく立派な娘であれば、戸籍の詮索など何うでもいゝ筈でないか」

却つて餘計なことを調べて、不快な秘密など知ることがあつては、それこそ、自分の愛情を傷つけるばかりでなく、あの聖母のやうな母親を、好んで傷つけるものではなからうか——英二が、そんなことを考へてゐた時、

「三宅坂……三宅坂でございます。九段半藏門、神田方面はお乗り替へでございます」

「おや、築地行だつたのか」

英二は、はつとして立上がらうとしたが、今思ひ付いてゐた櫻花の譬喩は、急に彼に區役所行を思ひ止まらせて、そのまゝ、電車の中に留つた。

が、その夕方である。英二が、アパートの机にもたれて、やはり暁子の身の上の、深い謎に囚はれてゐると、

「あの、お電話でございます」

管理人の娘が知らせてきた。階下の電話口まで急いで出ると、「

もしく、牧山さん？」

若い女の聲は、康子だった。

「あッ……」

英二は、思ひがけない相手に、瞬間、ちよつと戸惑つたが、

「あら、何うなさいましたの、牧山さんでせう」

悪戯らしい康子の聲が電波の向ふで媚びるやうに笑つてゐた。

「どうしてゐます……」

英二は、遽て、意味なく訊ねたが、

「ほんやり、詰まなく暮してゐるわ……だつてこの間も、あんなに冷淡に、歸つておしまひになるんですもの……」

鼻にかゝつた甘たれ聲で恨むやうに言つた。英二もあの日、我ながら邪慳に康子を振切つて、立野家を飛出した前後の行動を思ひ出し、それにしても莫迦に妥協的な康子の調子について氣を惹かれて、

「いや、あの日は、ちよつと用事があつたんです」

「さうお、でもこの頃ちよつともお電話くださらないのね。御卒業も済んでお暇なんでせう」

「暇といへば暇、忙しいといへば忙しい、何だか落着かない氣持ですよ」

「ねえ、明日でも、どつかへビクニツクにいらつしやらない？ 櫻ももう四五日よ」

「さうですね……明日は、ちよつと忙がしいんですが……」

「ほつほ、またこの間の方と、何處かへいらつしやるんでせう」

「まさか……」

英二は、われながら拘りなく打消したが、ふと、思ひ出して、

「さうく、妙なことを訊ねますが、ねえ康子さん」

「何アに？」

「お家のお母さんの御實家は、麴町の江島さんですね」

「さうよ、それが、何うしたの」

「お父さんは、有名な政客の、直隆といふ方ですね」

「まあ、何うなさるの、そんなこと訊ねて」

康子は、英二が自分との縁談についてでも、調査を進めてゐるのかと思つたらしく弾んだ笑聲で答へたが、

「ねえ、明日の朝お誘ひするわ、九時頃にいゝでせう」

急に、強氣におつ被せてきた。英二も困つて、

『とにかく、明日の朝、もう一度電話をかけてくださ』
『さうお、八時頃にね。きつと——』

電話は切れた。
英二は、部屋へ歸つてきたが、康子の母が江島直隆の娘とすれば邦子の姉妹であるといふことを知つて、自分を取巻く意外な因縁にます／＼強く好奇心をそゝられた。

そして、その翌朝、朝飯もそこ／＼に、アパートを出て半藏門で電車を降りると、麴町區役所へ入つて行つた。

戸籍係へ謄本下附願を出すと、二十分ばかりして、二枚續きの江島家の謄本が渡された。

英二は、謎の回答を見るやうに書類の紙面を貪り搜した。

『あ、あつた……』

暁子の名が、正しく、最後のところに、當主直彦の末妹として記載されてゐるではないか。

『何だ小母さんの妹だつたのか……ぢや、康子さんの叔母さんぢやないか』

英二は、思はず私語したが、あの鎌倉の驛頭で出遭つた時の、あまりに甚だしい貧富の懸隔を示した、二人の服装を思ひ出して、英二はまたしても、邦子、暁子の境遇に深い不審を覺えずにはゐられなかつた。

血を引く敵

同じ朝——。

康子は、窓のカーテン越しに覗く、明るい朝の陽光に眼を醒すと、昨夜英二との電話で約束したピクニックのことを思出して、子供のやうに潑刺と身を起した。そして、ピジャマのまゝでカーテンを引くと、

『まあ、いゝお花見日和……』

うつすら霞んだ青空を、愉しげに仰いで、すぐ飾棚の置時計を覗いた。
八時十分過——。

『あら、寢坊しちやつたわ……』

康子は、着替もそこ／＼にして、傍の呼鈴を押し、

『大急ぎで、芝の×××番へ電話をかけて、牧山さんを出しておくれ……』

女中に命じて、洗面所の所へ急いだ。そして歯ブラシを使つてゐると、

『あの、お出かけださうでございますが』

女中が報らせてきた。

「お留守?……」

康子は、顔色を曇らせたが、

「そんなことないわ、まだ八時を過ぎたばかりよ、お前、何か間違つてゐるんだわ……」

「芝園荘でございませう」

「さうよ……でも、八時にお電話する約束してゐるのよ。いゝわ、私が出るから」

氣短かに言つて、顔を洗ふと、今度は自分で電話口へ出た。

「もし……芝園荘でせう……牧山さんいらつしやいます?」

康子は一氣に尋ねたが、聞き覚えのある若い女の聲が、

「あの、ついさきほど、お出かけになりましたが……」

「牧山さんよ……あなた芝園荘でせう」

「はい、さやうでございませうが、牧山さんは、ついさきほど……」

「をかしいわ……何も仰有らないで?」

「はい、あの、つい二十分ばかり前でございましたわ……お歸りになりましたらお傳へいたしますが

何方様でございませう……」

康子は、がっかりして、

「さうお、なら結構ですわ……」

ガチャリと邪慳に受話機をかけて、ぶんとふくれて電話機の傍を離れたが、

「どうしたの、牧山さんがいらつしやらないの」

いつの間に来たのか、母の俊子が、すぐ傍の廊下に立つてゐた。

「ひどいのよ……昨夜わざ／＼お電話して、ピクニックのお約束してあるのに……」

泣き出しさうな顔を歪めて、そのまゝ不機嫌に、母の前を素通りし、自分の部屋へ歸つてきた。

「きつと、この間の女と一緒にんだわ……」

口惜しげに呟いて、机の前へ腰を落したが、ふと、何を思つたのか、抽斗から日記を出して、頁を

繰り始めた。

三月十日 日曜日

春めいた好天氣、朝食後海岸を散歩する。今日もセパードを連れた例の大學生に會ふ。ちよつとウ

インタをしてみせると、嬉しさにニッコリしてゐた。家へ歸つて、お午まで退屈する。午後、約

束の奈都子さんを迎へに驛まで行つたが見えず。癪だつたから一人で鎌倉まで伸した。驛で牧山さ

んと會ふ。小汚い娘同伴、意地悪く笑つてやると、きまり悪さうに娘を紹介した。江島暉子。きつ

とどつかの事務員に違ひない。でも、江島なんて苗字、身分にも似合はない、生意氣だわ……。

康子は、こゝのくぐりを見ると、昨夜電話をかけた時、母の實家の江島家のことなどを、唐突に

訊ねた牧山のことを思ひ出され、何か直覺的にはつとしたのである。そして、暫くの間、何かひとり考へてゐたが、ふと立上ると、室を出て、廊下傳ひに俊子の室の襖を開けた。

「お母さま……」

俊子夫人は、明るい縁側で、朝の紅茶を啜りながら、その日の新聞を展いてゐたが、

「何ですの、唐突に……」

康子の弾んだ聲に、驚いて振り返つた。

「お母様のお實家の親戚に、江島暁子つて娘のある家がございませぬの」

「エフコ……」

「何だか職業婦人みたいなの、あまり身装のいゝ人ぢやありませんわよ」

「職業婦人？……お母様の親戚に、娘を働かしてゐるやうな、そんなお家はありませんよ。江島

家のお祖父様は、世間にも知られた實業家出の立派な政治家ですし、近しい親戚には、そんな家庭は

ありませんが、苗字は、何といつてゐました？」

俊子は實家の名譽を誇るやうに言つた。

「やはり江島ですわ……」

「知りませぬね」

「暁子つて言ひますのよ……」

康子が再び繰返した、途端に、

「エフコ……」

俊子が、はつとしたやうに、聲を弾ませた。

康子はそれを見て、

「御存知？……」

母の表情の變化を覗いた。が、俊子はすぐ、

「知りませぬよ……」

冷静に答へたが、さすがに何か氣にかゝる風で、

「その娘が、何うかしたの？」

「この間、牧山さんと、一緒に歩いてゐましたの」

康子は、訴へるやうに告げた。

「牧山さんと……」

俊子も、それを聞くと、驚いて眼を刮り、

「その娘が、江島家と親戚だなどと、言つたのですか」

「いゝえ、それは知りませぬけど……昨日も牧山さんにお電話すると、あの人、私の話も聞かないで

あなたのお母さんのお實家は麴町の江島さんですね、なんて聞くんでせう。私何だか變な氣がしたんですもの』

『それは、あんたとの縁談で親戚筋の調査でもしてゐなさるんだわ』

『さうかしら……でも、昨夜あんなにお約束しておいたのに、時間にお電話をおかけしても、しらつしやらないんですもの。その娘と一緒に何處かへ行つたのよ』

『それやあなたの邪推でせう。後で、もう一度お電話してごらんなさ』

俊子は、康子をなだめて、室へ歸したが、一人になると、

『きつと、邦子の娘だわ……』

眉をひそめたが、

『まあ、いやらしい、牧山さんも、支那人の娘とも知らないで……』

心の中で吐出すやうに呟いた。そこへ、女中が襖を開けて、

『あの、立野さんの奥様が、お見えになりました』

『立野さんか、應接へお通しなさい』

女中に命じた。そして、

『きつと牧山さんとの縁談の報告に違ひない……』

俊子は、微笑ましく呟いたが、さつきの康子の心配を思出し、遠い記憶の底にある、あの若い異邦

人楊大偉の姿を泛べて、今は家門の耻辱として、長らく思ひ出しもしなかつた妹邦子と、その時の嬰兒のことを、何か穢らしいもののやうに心に泛べた。

俊子はすぐに衣裳を替へて、應接の前まで行くと、習慣的に姿態を改めて、

『まあ、いらつしやいませ……』

社交的な、一種のしなを作りながら、聲まで改めて、ドアを引いた。立野夫人も負けず劣らぬ氣取つた調子で、

『あら、御免あそばせ……早朝から、突然、お邪魔いたしました』

彼女等の早朝には、もう太陽が窓ガラスの外から高々と苦笑しながら、斜めに片隅の青磁の花瓶に匂ふ、櫻の生花をあか／＼と照らしてゐた。

『此度は、また康子のこと、いろ／＼とお世話さまに……』

『いゝえ、あなた……いつぞやは、また奈都子が、結構なものを……』

『いゝえ滅相な……ところで、お嬢様は、ずつと御機嫌よく』

『はア、おかげさまで、あんな不束者でございませうが』

『いゝえ、何を仰有います……さあ、どうぞ、おかけあそばせ』

『では、御免あそばせ……』

山鳥の長々しい儀禮のくさりが濟んだ、二人が、やつと椅子に向ひ合ふまでには、新聞小説の一

回分ぐらゐはらくに讀めて了ふだらう——それから、また、

『あの、お嬢様は？』

『はア、何か先刻から部屋の中で、新刊の書籍らしいものを讀み耽つてゐましたが……おつゝけ挨拶に来ることゝ存じますが……』

『いゝえ、あの、實は今日も、お嬢様の、例の、お話でございますよ』

『それは、わざく、恐れ入りますわ』

『昨夜、博多の牧山さんの方から、大變お喜びのお手紙がまゐりまして、さういふ御立派な先のお嬢様なら、是非この際、極力お願ひしたいから、と、それは大乗氣でいらつしやいますの。それで、ちよつとお傳へかたく、細かなお打合せも申上げたいと存じまして』

『それは、何よりでございますわ。私どもも、何んにか安心いたしたでせう。おかげさまで、室井もそれを承りましたら何んなに喜ぶことでございますわ』

俊子は、ほつとしたやうに言つたが、ふと、今朝の康子の話を思ひ泛べて、

『それで、あの、如何でございますませう。御本人様は、もうすつかり、御承諾でございますませうね。あんな不束者でございますので、何よりそれが、心配でございますが……』

『いゝえ、あなた、それは、それは奥様、大丈夫でございますよ……抑も、このお話の初まりが、御本人同志の御様子から、奈都子が思ひついて私にすゝめたのでございますから、その方は、もう、

あなた。ほつほほ』

『いゝえ、それは、さうでございますませうが、もうあれから半歳も経つてをりますし、この頃暫く、お顔も見えませんが、つゝ……』

『いゝえ奥様、電話ではしよつちゆうお話なすつていらつしやいますよ』

『どうぞ、まあ、この上にもよろしくお願ひ申します』

それから双方の間に、可なり進んだ結婚準備の話も出て、立野夫人は、引揚げた。

俊子は、玄關へ見送ると、

『康子はゐますか……』

康子の部屋の襖を開けたが、

『あら……』

瞬間、俊子の顔色が、さつと曇つたのであつた。

それは、窓際の机にもたれて、しきりに手紙を書いてゐた康子が、俊子を見るなり、ひどく狼狽の態で、遽て、その上を兩掌で掩うてしまつたからだ。俊子は、娘の不審な動作に、

『どうしたの？ 急に書き物を祕したりして……』

俊子は、不機嫌に康子を睨んだ。康子は、まごつきながら、

『あら、何でもありませんわ』

口籠つた。

『お手紙でせう。誰方に出すんです』

俊子は、大事な一人娘が、母に見られてならない手紙を書いてゐると思ふと、厳しい眼で、つかつかと近づいていつた。康子は、それを見ると、諦めた様で、母の剣幕に頬をふくらませながら、

『別に、悪いところへ、書いてゐるんぢやありませんわ』
拗ねた表情で母を見上げたが、すぐ、

『牧山さんだわ……』

『牧山さん？……それなら何も、お母さんに秘したりなんかすることはないでせう』

覗くやうに見下す母の視線を、康子は尖つた眼で見返し、

『ぢや、御覧になるといゝわ……』

途端に、その眼が、弱々しく曇つたと思ふと、

『私……牧山さんに、絶交状を書いてゐるんだわ……』

言ふなり、用箋の綴りのまゝ、手紙の書きかけを、疊の上へ投げ出して、急にポロ／＼涙をこぼした。俊子は、びつくりして、

『まあ、この娘は、どうしたといふんです』

『だつて……だつて、あんな冷淡な人、大嫌ひ……』

涙の溜まつた眼を伏せた。そして、

『きつと、今日だつて、あの、江島つていふ娘と、何處かへいらしたのよ。いくらお母さんや、奈都子さんの小母さまが躍起になりなすつても、もうあんな人の、お嫁になんか行つて上げないから』
口惜しさうに唇を顫はせた。俊子も、ちよつと面喰つた形だつたが、さうした娘の嫉妬を見ると、
さぢらしくなつて、

『だつて、それやああなたの想像でせう……ぢや、もう一度、お母さんが、牧山さんにお電話してみます』

『もう澤山……そんなことなされると、ますます／＼増長してよ。それより、こんな御縁、お断りすればいいのよ』

『何を言ふんです、今更になつて……今も立野さんの奥様がいらしつて、あちらでももう大乗氣だと仰つて、それは喜んで、知らせにいらしつたんですよ』

『私知らないから……』

『それぢや、あなたは、黙つていらつしやい。お母さんが、ちやんとお話をまとめます……お家にいらつしやらないからといつて、餘所の娘と遊んでゐるとは、何うして決められます？……とにかく、お母さんに任せておけばいゝんです』

俊子は、言ひ残したまゝ、部屋を出たが、普通ではない康子の憤りを思ふと、今まで立野夫人の

返事で、明るく弾んでゐた心に何か一抹の陰影を覺えずにゐられなかつた。そして、
 『あの娘も、何か理由がなければ、あんなに怒る譯もないのに……その邦子の娘といふのは、どの程
 度に牧山さんに、接觸してゐるのだらう……』
 ふと、深い疑惑に包まれた。

二

ちやうど、その時分――。

英二は、例の謄本をポケットにして、石黒の勤めてゐる日本印刷會社の應接室へ通されてゐた。
 日本印刷は、神樂坂を降りて、少し入った牛込見附の電車通りにあつて、二階の應接室からは、眼
 下に湛へた外濠の彼方に、盛りに近い土手の櫻が、朝の光に鮮かに照らされ、遠景を彩る九段富士見
 町あたりの高臺に盛上がつた若葉の新緑に美しく映え、その間を白聖の洋館や、青い尖塔などが、異
 國の風景畫のやうに覗き、水ぬるんだ濠の水面からは、ボートを操る學生や娘達の、若々しい噪ぎ聲
 が、賑やかに傳つて來た。

『やあ……早いね』

扉が開いて石黒が入つてきた。英二は、ちよつと照れながら、

『朝つばらから邪魔して濟まないね』

『どうだつた？ 當つてみた？』

『やつぱり駄目だつたよ』

『そうれみる……釣り合はぬ縁といつたらう』

『いや、それは表面の口實らしいんだよ』

『無論さうさ。しかし、實はそれ以上、僕はどうしても突つ込めなかつたんだよ』

『君も、そんなものを感じたかね』

『あの母子の間には、追究してはならないものがあるんぢやないか――だん／＼押してゆくとさうい
 ふ疑問にぶつかつたがそれは僕の口から報告できなかつた。だから君に直接行つてもらつたが、何か
 打明けて、あの人は話したかね』

『最後になつて、暁子は私の子ではないといふんだよ……』

かう言つて、英二は、交渉の顛末を、詳しく石黒に報告した。

『そこで僕も不審に思つて、實は、あの家の戸籍謄本を取つて調べたんだよ』

英二は續けて、澁谷、麴町兩區役所を訪ねて、やつと二人の身分が判明した経緯を語り、

『これだよ。見たまへ……』

ポケットから、二通の戸籍謄本を出して展げた。

『これで見ると母娘と思つた二人は、姉妹なんだよ……しかも二人とも、あの有名な大政客江島直隆

翁の娘だつたんだ」

「これは知らなかつた」

石黒も愕然と怪訝の眼で、二通の謄本を比べてゐたが、

「しかし、可訝しいね……その大家江島家の娘として、今日までの二人の生活は、なるほど、不審な點がある」

「さうだらう……」

英二は、石黒の顔を見上げたが暫くして、

「ところで僕の想像だが、小母さんが難しく言ふのは、この本家の意向だらうと思ふんだよ」

「なるほど……」

「そこで、ひとつ本家へ當つて碎けてみたら、何うかと思ふんだよ。邦子さんの方では、御本家の御意見次第と仰有るが如何でせう……かういつて、誰かの手で交渉はできないものかと思ふんだよ」

「また僕を動員しようといふんだらう」

「さうして貰ふと、助かるんだ」

「さうらしいと思つたよ。はつはは」

石黒は笑つたが、

「頼むよ……君なら、人を恐れない男で、相手が何だらうと、十分物が言へるからね」

「馬鹿に煽てるね」

「いや、冗談ぢやないんだ。頼むよ」

「ひどくまた、君も唾子さんに惚れたもんだね」

「同情しろよ……」

「さうか……」

石黒は腕を組んだ。

「どうだ？……」

英二は、膝を進めた。石黒は暫くして、

「しかし、相手は大山の家などと違つて、格式張つた御大家だからね、僕のやうな風來坊が飛出しちや、却つて打ち毀しになりはしないかね。第一、會つてもくれまいと思ふんだよ。それよりか、君の伯父さんの方からでも、堂々と交渉してもらつた方が得策ぢやないか」

と答へたが、英二は、

「勿論、それは君の言ふ通りなんだ。——しかし、實は伯父の方へは、君も御承知の立野夫人が或る候補者を推薦して、しきりに交渉中なんだ。そして、うっかりするとその方へ伯父も傾きさうな危険があるんだよ。だから、今この話を持出して、立野の方の話が形付くまでは、乗氣になつてくれまいと思ふんだよ。ところが、僕はその縁談の娘は、全然歓迎しないんだが、伯父は、僕のいふことよ

りも、立野の忠義立てに信頼をおいてゐるからね、ぐずぐずやつてゐると、僕自身、拔差しならない破目に陥つてしまふんだよ。そこで、この際僕の方でも、立野に祕密で疾風迅雷的に、暁子さんの方の内諾を得て、それを武器に、立野の口を、打ち毀さなければいけないんだよ……だから、もし、君の意見のやうに、このまゝ伯父に相談すれば、萬一伯父の心が動いても、必ずその交渉には、立野を動員するにきまつてゐるんだ」

「ぢや、君から立野夫妻を口説いて、暁子さんの話に同意させたいや、ぢやないか」

「駄目々々、立野の推薦してゐる候補者といふのが立野の娘の親友でね、夫人は徹頭徹尾これを支持して、僕に押付けようと熱中してゐるんだから、他の候補者を持つて行つたつて、邪魔されても、纏りつこないよ。でなくても、英二さんの奥さんは、きつと私共の手でお捜しいたしますからと、豫々伯父の御機嫌を取つてゐる奴だからね、僕自身で選んだ娘などは意地にも賛成しやしないよ。あの我意一徹の夫人だもの。伯父の信頼を踏みつけられたら怒つて眞先に、敵視して排斥してかゝるよ」

「なるほどね……」

「どうだね、ひとつ、こちらはこちらで當つて碎けてみようぢやないか……もし御承諾の御意志があれば、博多の牧山家へ、直接交渉をすゝめてもらひたい……かうはつきり言ひさへすれば、先方も信用するだらう。そして可能性があるやうなら、立野などに出しやばられないやうに、僕が自身博多へ歸つて、伯父に會ふよ。もう兩人の間には、戀愛が成立してゐると言つてもいゝし、どんな嘘をいつ

ても、伯父を虜にしてしまふから、どうだね」

「さうか……ぢや、二三日中に出かけてみるかな」

「行つてくれるか……頼む」

「しかし、豪家の主人なんでものは、蓋し物の判らない奴が多いからね。十中九分は玄關拂だぜ」
石黒は、懸命の眉をよせたが、

「では、かうしよう。今夜あらまし手紙で豫告しておいて、日曜日の朝でも乗込むかな」

「それがいゝや、お願ひするよ」

英二は、石黒の手を堅く握りしめた。

「そのかはり、いつもいふ通り、後日暁子さんを虐めたり、信愛に反いたりするやうなことがあつちや、承知しないよ」

「大丈夫！」

それから、江島家との交渉について、暫くは、二人の間に、細々とした策戦の協議が重ねられた。

二人の姪

次の日曜日朝、石黒は、英二の懇望を容れて、麴町の江島邸を訪れた。麴町二丁目の豪奢を競ふ邸宅の中でも、江島家は一段と宏莊を誇る見事な構へだつた。燃え立つやうな若葉の繁みに囲まれて、深々と奥まつた玉砂利の彼方に、豪華な玄關が遙かに覗いて、深林のやうな深い木の間がぐれに、白堊の洋館が、城塞の如く聳えてゐる。想像を越えた、この邸宅の偉觀には、さすがの石黒もちよつと威壓を感じ、一瞬間前に躊躇したが、すぐ、思ひきつて、玉砂利の道をどん／＼進んでいつた。そして、磨きたてた玄關の前へくると、呼鈴のボタンを押した。

間もなく、玄關は開いて、敷臺の上へ、十七、八の美しい小間使が懇慫に三つ指をついた。

「御主人いらつしやいませうか」

「誰方様でございませう？」

「二三日前にお手紙を差上げておきました者です。さう仰有れば、お判りになる筈です」

石黒は、さう言ひながら、ポケットから名刺を出した。

「しばらくお待ちくださいませ……」

小間使は小さな銀盆に名刺を受けると、正面に立てた土佐風の密畫を描いた立派な大衝立の蔭になつて奥の方へ消えてしまつた。

「會ふかな？」

石黒が、敷臺の前に立つて、暫く待つてゐると、間もなく、先刻の小間使が戻つてきた。例によつて、懇慫に三つ指を突き、

「何うぞ、お通りくださいませ」

占めた！ と石黒は、心中で叫びながら、

「ぢや、御免蒙ります……」

靴を踏いだ。

通されたのは、玄關脇の應接室だつた。

高雅な唐草模様絨氈の床、紫檀黒檀材に古雅な支那風の人物風景を現はした卓、椅子、飾棚——總て先代當時のままの東洋的な古典的數奇を凝らしたもので、石黒はむしろ驚嘆に近い表情で、調度の贅に見惚れてゐた。

と、間もなくノツクの音がして、靜かにドアが開いた。石黒も反射的に、その場に立上がつたが、「お待ちせいたしました……」

入つてきたのは、背丈のひよる長い六十を越えた執事風の老人だつた。石黒は「代理だな……」とすぐにさう思つたが、

「僕石黒ですが……」

相手の顔を見守つた。老人は、

「私、當家の執事香川政成と申すものでございます。主人多用中でございますので、お手紙の趣につきましては、私からお答へ申し上げます……」

かう言つて、石黒に着座をすゝめ、自分は起立したまふ、
「實は、折角でございますが、當家は既に長年の間、邦子様、暁子様方とは、義絶同様になつて居りますので、御申越の件につきましては、當家主人といたしましては何とも御返事の申上げやうがないのでございます。どうぞ、悪しからず」

言ひ終ると、びよこんとゴマ鹽頭を下げて、

「では、御免蒙ります……」

石黒の退席を促すやうに言つた。

その時、自家用らしい立派な自動車が一臺砂利道を近づいてきて、玄關先に停まつた。

「ちよつとお待ちください……」

石黒は、遽て、腰を上げ、執事に呼びかけた。

「何か、まだ？」

相手の立去るのを持つてゐた執事は、石黒の言葉に、小煩ささうな眉を寄せた。石黒はすぐ、

「義絶と仰有るのは、何ういふ譯です？」

「それは、内方のことでございますから、輕々しく餘所様へ、お洩しすることは致し兼ねます……と

にかく、さやうな次第ですから」

執事は、突放すやうに言ふと、今しも玄關前の車寄せに停まつた自動車を降りてくる、四十過ぎの盛装した婦人の姿にちらと窓越しの視線をそゝいで、急に慌しげに、

「それでは……」

と、再び石黒の退席を促した。しかし、石黒は、それだけでは立ち去れなかつた。

「それぢや何ですか。暁子さんの御結婚に關しては、御當家では、責任も負はないが、同時に意見も挿まない。御本人の御自由に任せると仰有るんですね」

「まあ、さういふことになりませうね」

「慥に間違ひありませんね」

石黒は、ぐつと詰寄るやうに言つた。執事は、そこまで強く念を押れると、困つた風で、

「とにかく、義絶いたしてゐるやうな譯ですから……」

曖昧になつてきた。石黒は、笑つて、

「しかしですね、義絶といふことは、あなた方が勝手に仰有つてゐることで、法律はそんなものは認めませんからね。暁子さんが、御當家の御家族である以上、その戸主たる御當家の御主人には、どこまでも戸主として暁子さんに對する義務と同時に権利があるのです。或は、今は義絶などと仰有つてゐても、いざとなつて御都合が悪ければ、いつ何時戸主の権利を主張なさらないとも限りませんから

ね、僕はその點を、はつきりしていただきたいのです。義務もない、権利も決して主張しないと仰有るのなら、それをもう少しはつきりした具體的な形式で、僕に示していただきたいのです』

「と、仰有ると……」

『いくら義絶をなすつてゐられても結婚になれば、御家族の重大事です。御主人に出でいただきたいのです』

「御主人は、今も申す通り、御來客で御多忙ですから」

『いくら御多忙でも、お妹さんの御縁談ほどの重大な御用ぢやあるまいと思ひます。五分や三分の時間を割いて、お話願へない筈はないと思ふのです』

『しかし、それは今も申したやうに、あちら様とは義絶同様で……』

「義絶は、感情だけの言葉で、法律上の行爲ぢやありません。いくら口だけで義絶しても、兄妹はどこまでも兄妹で、戸主と家族の關係は、消滅する譯ぢやないんです。だからもつと責任のある、しつかりした御返事が願ひたいんです。それには、失禮だが、あなたぢや、駄目ですから……」

「何が駄目です。失禮なことを……」

「執事は、ちよつとむくれてみせたが、石黒は笑つて、

『まあ、怒りたまふな……君がいくら偉い人間でも、他人の家族の責任まで負へないぢやありません

か。だから御主人に會はせて貰ひたいといふんだよ。忙しければ、十分でも、二十分でも、一時間でも、半日でも一日でも、僕は御主人が御暇になるまで、かうしてお待ちしてゐますから』

二

一方、奥の談話室では、當家の主人直彦が、今しも訪れて來た中年の婦人を相手にヴェランダの卓に向つて、親しげに語つた。

そこからは、若葉の燃え立つ樺の木立を背景に、數寄を凝らした庭園が、流れの妙、巖石の奇、樹木の贅を盡して深山の如く起伏し、その間をところく、八分咲の櫻の花が、自慢の庭の春を彩つてゐた。

このサロンに通されて、主人とヴェランダの卓に向ひ合ふ客は、この家族にとつても、よほど親しみ深い相手でなくてはならなかつた。

この婦人客は、直彦の妹で、實は井菱の少壯幹部室井誠之助夫人俊子——康子の母であつたのだ。

「實は康子の縁談でございますのよ」

「いゝ話があつたかね」

直彦は、セツトの中から葉巻を取上げたまゝ、小肥りした躰を急に卓上に乗りに出した。
『お話は、いろ／＼ございますが、只今立野さんから来ておます御縁談が、大それた本人も氣に入つてゐるやうですし、主人も大へん乘氣になつてゐるんですの』

『相手は？』
『九州の炭礦王といはれておます牧山さんの甥御さんでございますの』

『牧山の甥』

直彦は、はつとして聲を弾ませた。彼は今も自分を訪ねてきて、執事の香川が應接に出てゐる、石黒といふ青年の手紙を思出したのだ。牧山蓮藏翁の甥牧山英二——その手紙の中に書かれた暁子の求婚者が、慥にさうであつた。まさか同人でもあるまいが——直彦は思はず取上げたマツチをおいたが俊子は、それとは氣づかず、

『牧山さんなら大きなものでございませう』
兄の驚きを、寧ろ得意に眺めて、

『それに、甥御様と申しましたが、實子同然で、牧山さんにはお子様、御長男お一人しかありません上に、血を引く甥御さんも、この方お一人でございます……』

『甥も一人かね……』
直彦は、訊ねたが、

『他には、亡くなられた奥様の方の御姻戚に、甥御さんが二、三人おありのやうですけれど、御主人の血を引いて牧山姓を名乗るのはその方きりなんでございますの……』

『うーむ』

『そんな譯で、御長男お一人しかない牧山さんは、その方を、實子同様に可愛がられて、本來ならば養子として、家にも入れたいくらゐますが、それでは御分家が廢家になるもんですから籍こそ入れませんが、十分のお別け前もなすつて、御息と一緒には御自身の兩腕になさるおつもりで、大學もこちらへ寄越して卒業なされたやうな譯で、當分は、室井の世話で東海生命へお入りになることに決まりましたが、それはせい／＼二、三年ほんの事務見習で、行く行くは九州へお歸りになつて、牧山系の諸會社の重役になりなされる方でございますよ』

俊子は、口を極めて、英二の立場と將來を保證した。

直彦は、黙つて聞き終ると、

『そして、その方のお名前は？』

『牧山英二さんと申しますの……』

『やつぱり……』

直彦が覺えず呟いた時、

『あの、お差支へございませんでせうか……』

廊下傳ひに、執事の香川老人が顔を出して、慇懃に俊子の方へ會釋した。

「お客さんは、歸つたかね」

直彦は、訊ねると、

「實は、それで困つてゐるんでございます」

執事は、何か持て餘ましたやうな困憊の色を漂はせて言つた。

「何と申しましたも、歸りませんので」

「歸らない？」

「はい、その、御主人にお眼にかゝるまでは、一日でもかうしてお待ちしてゐると、テコでも動きさうにないのでございます」

「それは、何ういふ譯だ……」

直彦は、不機嫌に眉を寄せた。香川執事は、俊子の方に氣を兼ねて、ちよつと言ひ難さうに口籠つたが、

「それが、その、何でござりますよ……義絶同様の有様だからと申し聞かせましたのですが、義絶などといふことは、御當家の感情に過ぎないので、法律上の權利義務は、そんなことで消滅するものではない。御主人にお目にかゝつて、その段はつきり、責任あるお言葉を伺はなければ、歸れないと申すのでございます」

「そんな生意氣なことを言ふのか」

「いや、それだけちやありませんので、義絶の理由まで聴かせると申しまして、諸かなかつたのでござりますが、それは私から、斯様なことは内方の話で他言すべき性質のものではないと、はつきり突つ刎ねてやつたのでございますが……」

執事は、この點だけ、ちよつびり得意の面持で報告した。すると、傍から老人の話を、怪訝さうに聞いてゐた俊子が、

「兄さん、何のことですの、義絶だなどと仰有るのは？」

「いや、なに、暁子の件さ……」

「暁子さんに、何かございましたの？」

「やはり縁談だよ」

「あら、まあ……」

俊子は、暁子の縁談と聞くと、すぐ英二のことを思出し、思はず瞳を刮つたが、

「それで、只今いらしつてゐるのは、お仲人の方？」

「さうだらう。まだ若い青年らしいよ、二、三日前に手紙を寄越してきたが、本人の友人らしいんだよ」

「御本人といふのは、何んな方ですか」

「相手の本人か……」

直彦は、じろりと俊子を見たが、すぐ、

「いや、暁子のことなどはどうだつていゝぢやないか。それより今の康子の話だよ、お前達は、その
牧山さんといふ本人については、何の程度まで調査したかね」

「調査ですつて……」

つい今朝も、康子から英二のことについて、あんな話を聞かされてゐた俊子は、既に本家へ對して
暁子を貰ひにきた青年のある事を聞き、妙に不安を覚えてゐた折から、兄直彦の異様の口吻に、いよ
いよ懸念の顔を曇らせたが、

「それはもう調査などしませんでも、牧山さんは、去年の夏から、立野さんの御紹介で、暁子の別荘
へも、始終遊びにいらしつて、私もお目にかゝれば、康子もまるで兄妹のやうに親しくおつきあひ
して、お互に氣心も、よくわかつてをりますわ」

「ほうう、そんなに親しくお交際してゐたのか……」

直彦は、苦笑したが、すぐに石黒から來た手紙の「これは決して一時の熱情でなく、本人は心から
暁子様の人物に傾倒し、深き純情を捧げてゐる者で——」牧山青年の意中を述べた文句を、はつき
り記憶に浮べ、そして不審さうに、
「しかし、その人は、今でも康子を眞に心から、愛してゐるのかね」

「康子を……」

俊子は、何かほつとして顔を上げたが、

「愛してゐるから、おつきあひしてゐるんですわ」

「さうか……間違ひはなからうな」

「あら、どうして、兄さん、そんなことを……」

俊子は、じつと兄を見据ゑた。

「いや、別に、何うといふ譯はないが、それが、肝心な問題ぢやないか」

直彦は、何と思つたか、俊子の氣組を躲すやうに言つたが、その時、執事の香川老人が、横合から
恐る／＼直彦の顔を顧みだが、

「いかゞ取計らひませう」

石黒の處置について訊ねた。直彦は、ちらと老人を顧みだが、何と思つたか、

「それぢや、わしが會はう」

「あ、お會ひなさいませうか」

執事は、ほつとした様子で言つた。

「では俊子、お前、暫くこゝで待つてゐてくれ……」

直彦は、俊子に言ひ残して、香川老人と室を出ていつたが、間もなく一人で引返してきて、

『その間に、この手紙を、読んでおいてくれ……』
途中で書齋からでも取つてきたらしく、一通の手紙を、卓上において、そのまゝ再びサロンを出て
いつた。

三

俊子は、兄が理由も語らず、自分の前に投出して出ていつたその封書を手にとつたが、差出人の名
を見ると「石黒雄吉」――。

『何ういふ方だらう？……』

俊子は、ちよつと小首をかしげて、封筒の中味を取出して展いた。

甚だ突然ながら、書面で失禮いたします。實は親しく拜眉の上、お願ひ申上ぐべきですが、御多繁
中突然の訪問も、却つて御迷惑かと存じ、豫め書面をもつて、御用件申述べ、然る上参上いたし
ました方が、何かと都合かと存じ、無様を顧みず、突然かやうな書面を差上げる次第であります。
用件の筋は、貴家御令妹江島子様に係る縁談の儀でございます。相手方は、小生無二の親友で、
牧山英二と申し、九州における炭礦王として知らるゝ牧山連藏翁の愛甥でございます。今年四月東
京帝大經濟學部を優秀の成績で卒業しました快男子でありまして、以下、簡単に、牧山翁の家庭に
おける英二君の立場を、御説明申し上げます……。

一氣にこゝまで読み進んだ、俊子の手はぶる／＼顫へて、頬は蠟のやうに蒼ざめてゐた。

『それでは、今應接にゐるお客様はこの石黒といふ青年だわ、そして、自分が今も康子の相手として
縁談の相談に來てゐる英二のために、あの、邦子の娘を貰はうと膝詰談判にきてゐるんだわ……』

俊子は、尙も、貪るやうに、手紙の續きに眼を走らせた。手紙は續いて、巨萬の富を擁しながら、
親一人子一人の牧山翁の寂しい家庭から、自然、只一人の血を引く甥英二に對する同翁の、實父にも
勝る愛情から、將來英二に對する囑望の深さなどを仔細に縷述して、

やがては、南海の大財閥牧山コンツェルンの主翼となつて活躍する、有爲の將來を約束されてゐる
青年であります……。

今も、俊子が直彦に語つたと同様に、英二の將來を説明し、更に、五年前上京の當時、邦子の家
に寄宿してゐた當時からの暁子との長い交りを述べ、

英二君とても、これは決して一時の熱情ではなく、本人は心から暁子様の人物に傾倒し、深き純情
を捧げてゐるものでございます……。

危く手紙を取落さうとした俊子の燃ゆるやうな憎惡の眼に、今朝の康子の悲しげな姿が、いちらし
く描かれるのであつた。

『随分、馬鹿にしてゐる……』

俊子は、間もなく読み終つた石黒の手紙を、もとの封筒に巻きをさめると、敵の挑戦狀でも見るや

うに、暫らくは烙き付きさうな憎悪の瞳を瞶めてゐたが、

『……………』

ひくつと唇を痙攣させ、何か激しい語氣を洩らして、封筒の兩端を、きゆつとつまんだ。彼女は夢中で、手紙を破らうとしたのだつたが、瞬間、我に返つてみると、それは兄の直彦に對しても、あまりに耻かしい動作であるのに氣がついてそのまゝ卓の上へ手紙を返した。しかし手紙は、いつまでも意地わるく、皮肉に、俊子の視線にちらついて、折角康子の縁談の進行に意氣込んできた自分の顔を冷たい手で逆さに擦でられるやうな、屈辱をさへそゝるのだつた。

『それにしても、兄さんは、何んなつもりで私にこんな手紙を見せるのだらう』

俊子は、さつきも、英二のことで、

『ほんとにその人は、康子を愛してゐるのか。間違ひないかね』

と直彦に、強く念を押れたことを思出すと、暁子のために可愛い、康子が我慢のならない耻を受けたりやうで、彼女の自尊心は滅茶滅茶に踏み躪られるのだつた。

『いつそ、應接へ乗りこんでその石黒といふ男に會つて面皮をむいてやらうかしら』

俊子の胸は息苦しくなるほど、激しい憎悪に燃えさかつてゐた。

しかし、さうした俊子の單純な感情にまし深い混亂に苦しんでゐたのは兄の直彦だつた。

彼は、今應接の卓に向ひ合つて石黒の熱烈な要求と質問に、しどろもどろに返事を濁らせてゐるの

だつた。

『ですから私は手續きの慎重を期するために、あくまであなたに戸主としての御意見を伺はないでは安心できないのです』

『しかし、今も申上げた通り、暁子の問題に限りまして、多少込み入つた事情もありますので、意見を申述べる譯にゆかないのです。早く申せばあの娘達の行動に對しては、江島家として責任をもちたくないのです』

『それなら此際、恐縮ですが、暁子様のご結婚は、斷然本人の自由意思に任せ、一切異存申立てず、戸籍上の婚姻手續等にも戸主として決して同意を拒まずといふ風な具體的な意志表示が願ひたいのですね』

『具體的な意志表示と申しますと？』

『一札書いていたゞきたいんですね』

『御冗談を仰有つちや困ります……』

直彦は、鷹揚に葉巻の煙を吐いて、適當に示した威嚴の下から、この青書生の要求を手もなく突放すやうに言つたが石黒は喰ひ下つて、

『決して冗談事ぢやありません。これは人生の重大事である、縁談上の手續ぢやありませんか』

『しかし、私は毎度申すやうに萬事不介入。あの子のために、さうした意志表示をすることすら、甚

だ快しとしないのです』

『ですから、その不介入の意志表示を、私はお願いしてゐるのぢやありませんか……』
假借のない石黒の攻勢に、直彦はまたしても、返答に窮したが、ふと思ひ出して、

『しかし、その牧山君といふ人は、眞個にそこまで暁子を愛してゐるのですか』

直彦は、急に話題を轉じて、一方康子とも縁談のある英二本人の意中を糺すことにした。實は、直彦がわざわざ應接に出て、この未知の客の面會に應じたのも、何よりその點を明かにしたいからであつた。

『勿論です。僕が、かうして厚顔ましく一面識もないあなたに、無躰なお願ひをしますのも、彼の熱情に動かされた友情以外の何物でもないのです。もし初對面の私に對して多少の疑問でもございまして、明日でも本人を寄越しますから、直々意中をお聞き下さればいゝでせう』

思ふ壺に入つた石黒は、かう言つてにつこり直彦を見た。そして更に、

『いかゞでせう。明日でも本人にお會ひくださいませんか。その方が却つて私も結構なんです。なほその上にも御懸念がございましたら、その節本人に自分の寫眞を持参させますから、それをお送りくだすつて博多の牧山本家へ對して、直々お話をお進めくださつても結構なんです』

自信に充ちた石黒の言葉には、一點の疑問も、挿む餘地はなかつた。

やはりこの男はインチキぢやない——心中で見取つた直彦は、咄嗟に、またこんなことを考へた。

(これが事實であるとすれば、炭礦王牧山家とのこの良縁に、氣負ひ立つてゐる俊子の希望も、暁子の爲に向ふから毀される譯だ……)

直彦の眼前には、一つの幸運を競ひ合ふ、二人の姪の姿が、まざまざ描かれた。しかし直彦の描いた康子は、長らく伯父姪の縁にながれて、彼の愛情に包まれてゐる愛姪康子だったが、暁子の姿は想像してみるに過ぎなかつた。いや、寧ろ家門の穢れとして、その存在を意識するさへ、心よからぬ未知の娘だつた。瞬間、直彦は、康子や俊子のために——いや、江島一族の平和と面目のためにも、この石黒の要求は、應諾してはならないと決心した。その時、石黒が、

『いかゞです。それでは明日、牧山を同行しますから、何時頃に御約束が願へませう』
瞳を燃やして、ぐつと詰寄つた。

『いや、お待ちください……』

直彦は、急に立ち直ると、

『折角ですが、それは見合せませう。何度も申上げる通り、私は不介入ですから』

『それでは、只今もお願いした、不介入の一札を、お願ひませうか』

『それも困ります』

『何故です、それぢや暁子さんは、永久に、正式の縁談が運ばれないぢやありませんか』

石黒は、これほど富める兄をもちながら、あゝして生活のイバラの道を歩む暁子等の不審な境遇を

いとしく思出して、多少激越した調子で、咎めるやうに直彦に言った。直彦は冷やかに、

『それも、私の介入する處ぢやないのです』

反身になつて外つぽを向くと、ぶーつと一息、葉巻の煙を吐いた。

『それぢや、あなたは戸主としての義務を怠るものぢやありませんか』

石黒は、湧き立つ憤りを押へかねて、

『まるであの人達の生涯を、日蔭に葬るやうな言葉ぢやありませんか』

直彦は、瞬間、はつとして顔を向けた。それは激しい石黒の言葉に刺戟されたためではなかつた。

『日蔭に葬る』といふ一句が、ピンと胸にこたへたのだつた。そして内心、

(さうだ、日蔭の人間達ぢやないか、彼女達母娘の秘密がわかれば、あの名門牧山の家で、どうして

暁子との結婚を許すものか……)

さう考へると、直彦は、俊子母娘のために、はつとした氣持になり、

『いや、或はさうかも知れませんが、既に私達も、あの二人とは義絶をしてゐるくらゐですからね』

にやり、思はせぶりの冷笑を、洩らして見せたのである。

『あなたは自分の妹さんを、そんなに蔑んでいゝんですか』

石黒は、直彦の歪んだ感情を読み取ると、暁子達の憤まじやかな、涙ぐましい生活を思つて、思はず湧き立つ憤りを洩らした。直彦も、はつとしたが、

『別に蔑む譯ではないが、とにかく私は妹と思つてないだけです』

『その理由を承りませう。私も暁子さんや小母さんとは、親しくお交際をしてゐる者です。あの

立派な人達が、何故そのやうに除外されるのか、はつきり伺ひませう。僕にはあなたのお言葉が、全く

信じられないです』

しかし舊弊な傳統に生きる者にとつて、邦子等の過去は、この上ない家門の汚辱のやうに思はれ、

さすがにそれは口に出すことができなかつた。そして、

『それは何度仰有つても、申上げられません。とにかく、さういふ譯ですから、この交渉はこれで御

免蒙ります』

石黒もあまりな直彦の頑冥に、これ以上突張る勇氣が出なかつた。直彦は、それを見ると、更に被

せるやうに、

『どうぞ牧山さんとやらにも、悪しからずお傳へを願ひます……では、私も多忙ですから、これで』

直彦は椅子を離れた。石黒も取り付く島を失つて、

『さうですか、それぢや僕達もこの問題には、あなたを除外して進みませう』

覺悟の色を仄めかせて立ち上つた。直彦は、それを聞くと、康子のために氣にかゝつて、

『しかし、これだけ申せばお察しもつきませうが、兄でさへも顧みない子を、殊更懇望なさらなくて

も、牧山さんなら、もつと他にいくらも立派な候補者がありでせうに。はつはは』

康子のために付加へて、われながら餘計な贅言を、笑ひに紛らせた。石黒は冷やかに、
 『御無用な御忠言です……除外した者が正しいか、僕達の人間批評は、もつと透徹してゐますよ……』
 失禮します』

床を蹴つて出ていつた。

直彦が奥の談話室へ歸つてくると、俊子が蒼ざめたまゝ、待ちかねたやうに呼びかけた。

『兄さん、この手紙にあることは、ほ、ほんとなのでせうか』

直彦は笑つて、

『そんなことは、どうだつていいぢやないか。たゞ参考に見せたまでだよ』

『でも、これが眞個だとしたらこのお話は駄目ですわ』

『しかし、お前達は、この縁を何處までも纏めたいのかね。どちらだ。それから決めよう』

『私より康子が熱心ですの。あの子は何も知りませんから、牧山さんを慕つてゐますのよ。ねえ暁子』

の素性を、この男にも、よく話してくださいなすつたでせうね』

『そんな恥が、わしから言へるか。しかし、どうしても康子が希望することなら、相手の身分は申分』

ないし、俺が戸主の権利をもつて、暁子の結婚に同意さへしなければ、この方の話は、立消えになる』

までぢやないか』

『お願ひしますわ。私も歸つてあの子の決心も訊ね、また英二さんにも會つて、真相を糺してみます』

わ』

俊子は、かう言つて取纏るやうに直彦を見上げた。

春を呪ふ嵐

朝、母を病院へ送り出すと、暁子は、學校のない一日を、殆ど所在なく持て餘した。家の掃除をするにしても、半日もかゝれば十分だし、二人きりのさゝやかな炊事には、大した手間もかゝらないし洗濯物は、きちんとした母だから殆んど溜つてゐなかつた。

春の日は、駢蕩として暮れるに長く、はちきれるやうな青春期の娘には、餘りにも無聊な朝夕がつづいた。そんな時に思ひ出すのはこの二十年來愛する自分の爲に至てを忘れて稼ぎ通し、今日も慌しい病院の劇務の中に動いてゐる母の白衣の姿だつた。

『やつぱり私も遊んでゐては濟まない……』

あんたはそんな心配しないで、ちやんとお嬢様らしくしてゐればいゝの——母はさういつて就職口にも反對し、ひたすら良家の娘として、氣品のある花嫁に仕立てやらうとしてくれるのだが、それでは餘りに勿體なくて、暁子は長い母の苦勞は心から濟まなくなるのだつた。

いや、暁子の思ひは、そればかりでなかつた。その嫁入りの準備についても、彼女は、近頃人知れぬ寂しい疑問に包まれてゐた。

それは、いつか洩れ聞いた牧山英二の求婚である。

『何故お母さんは、あの御縁を、あんなにも膠なく断つておしまひになつたらう』

せめて一口でも相談して、自分の氣持を訊いてくれるかと思つて、暁子は、夕食の卓でも、夜の燈火のつれづれにも、母と二人になるごとに、胸を躍らせてゐたが、今だに何の話もなかつた。

『お母さんは、あの人が、お氣に入らないのだらうか……』

それなら、諦める外はなかつた。希望も青春もさうげつとして、今日まで自分を育ててくれた愛情深い母を思ふと、暁子は母の意志にさからつてまで、英二を想ふことはならないと決めてゐた。

しかし、それは暁子の理性だつた。

春の夕ぐれ、母の歸りを待ち兼ねて、とりとめもない春の寂しさに、ひとり窓邊に寄る時など、暁子のうつろな瞳をかすめるものはあの、紅椿の花が燃え立つてゐた、楽しい小徑の一と時だつた。彼女はさうした時は、必ずこつそり机の抽斗を開いてみた、そこには、あの日の金メダルがあつた。

『あなた以外に差上げる人はありません』

——懐しい英二の愛のさうやきが、彼女の胸に熱く甦るのだつた。

今も、暁子は、朝の用事を済ませて、ぼんやり机にもたれてゐると、

『江島さん……』

玄關が開いて、人の訪なふ聲がした。急いで階下へ降りてみると

『あら……』

英二が立つてゐた。

『お邪魔してもいいですか』

『え、どうぞ……』

暁子は、自分でもいぢらしいほど、そはそはしながら、英二を座敷へ通した。

『どうしてゐます、毎日？』

英二は、坐につくと、につこと話しかけた。

『毎日ひとりぼんやりしてゐますのよ』

暁子も誘はれるやうに笑つて答へたが、英二が、急に容を改めて、

『實はこの間のことですが、お母さんから、何もお話はなかつた？』

『いゝえ……』

暁子は答へて、英二が何を言ひ出すか、ときめく思ひで、じつと顔を見上げた。すると英二が、

『暁子さん』

眞剣な瞳を向けて、

「僕、今日は、そのことでああなたの覺悟を促しにきたんですよ」

「私の覺悟?……」

暁子は、英二の差迫つた表情に覺えず聲を弾ませた。

「さうです……何んな障碍を突き破つても、愛情を受け容れてくださる、堅い覺悟をしていただきたいのです」

英二は、熱情に喘ぎながらこれだけ言ふと、後は必死の眼眸で暁子の顔を見まもつた。

「……」

暁子は、あまりにも突然な、英二の突詰めた質問に、どきまぎ泡を喰つた眼を刮つたが、英二は、焦立たしげに、眺めてゐて、

「實は、先達つても、小母さんから、僕は重ねて拒絶されたんです……しかし、僕には、あなたを指いて、生涯を共にすべき女性を發見することができないのです。たとへ小母さんから、何と拒まれても、僕はあなたの愛情なしには、生活してゆく張合もないのです。どんな冒險、どんな決斷に訴へても、僕はあなたを妻としないので、措かないだけの堅い覺悟をきめてゐるのです……暁子さん、僕の、この氣持を、判つてくださいますか」

暁子は、かすかに背いたが、震へ易へ處女の魂は、餘りにも激しい男の情熱に揺すぶられて、眩暈でもしさうな迷惑に、ぼーつとしてしまつた。

「わかつてくださいますね」

英二の聲が、被せるやうに繰り返した。暁子はかすかに、

「え……」

「それぢや、僕のこの熱情を、そのまゝ受け容れてくださるでせうね……」

「……」

「それとも、こんな熱烈な氣持は、却つて御迷惑とでもお思ひでせうか」

「あら……あんな」

暁子は、相手の言葉を打消すやうに、遠て、眞赧に火照つた顔を上げたが、

「私……勿體ないと、思つてゐますわ」

「有難う……暁子さん……」

英二は、暁子の手を軽く握つたが、

「ぢや、もしお母さんが、この先とも、飽くまで二人の結婚に反對されても、あなたの意志は變りませんか……もし萬一の場合には、お母さんに背いても、悔いなしだけの覺悟をしていただけませうか」

暁子は、はつとして、返答に詰まつた。母に背いても——思へば長い二十年間、夢も望みも、この身一つにかけて、私ゆゑに孤獨に耐へ、貧乏と戦ひ續けてきた氣の毒な母、その愛情を裏切つて、大恩に背き去ることが出来るだらうか?